



お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、149 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise バージョン 6、リリース 2、モディフィケーション 0 および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： WebSphere® Adapters  
Version 6 Release 2  
WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise User Guide  
Version 6 Release 2

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2009.2

© Copyright International Business Machines Corporation 2006, 2008.

# 目次

|   |           |
|---|-----------|
| <b>第 1 章 WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise の概要</b>                    | <b>1</b>  |
| ハードウェア要件とソフトウェア要件   | 2         |
| 技術概要  | 3         |
| Outbound 処理   | 3         |
| Inbound 処理  | 5         |
| ビジネス・オブジェクト   | 6         |
| 外部サービス・ウィザード  | 7         |
| <b>第 2 章 アダプター実装の計画</b>   | <b>9</b>  |
| 作業を始める前に  | 9         |
| セキュリティ  | 9         |
| ログ・ファイルおよびトレース・ファイル内の重要ユーザー・データを保護するためのサポート                                     | 10        |
| ユーザー認証  | 10        |
| デプロイメント・オプション   | 12        |
| クラスター化された環境の WebSphere Adapters   | 15        |
| バージョン 6.2 へのマイグレーション  | 16        |
| マイグレーションに関する考慮事項  | 16        |
| マイグレーションの実行   | 18        |
| バージョン 6.0.2.x またはバージョン 6.1.x プロジェクトは更新するが、マイグレーションしない                           | 20        |
| バージョン 6.2 WebSphere Adapter で使用するための WebSphere ビジネス・インテグレーション・アプリケーションのマイグレーション | 21        |
| WebSphere InterChange Server からアプリケーションをマイグレーションするためのロードマップ                     | 21        |
| WebSphere ビジネス・インテグレーション・アダプターのマイグレーションに関する考慮事項                                 | 23        |
| WebSphere InterChange Server からのアプリケーション成果物のマイグレーション                            | 24        |
| アダプター固有成果物のマイグレーション   | 25        |
| マイグレーション後のインポート・ファイル、エクスポート・ファイル、および WSDL ファイルの変更                               | 28        |
| <b>第 3 章 サンプルおよびチュートリアル</b>   | <b>31</b> |
| <b>第 4 章 デプロイメントのためのモジュールの構成</b>  | <b>33</b> |
| モジュールの構成のためのロードマップ  | 33        |
| PeopleTools でのカスタム・イベント・プロジェクトの作成   | 35        |
| 認証別名の作成   | 37        |
| プロジェクトの作成   | 38        |
| 外部ソフトウェア依存関係の追加   | 39        |
| 外部サービス・ウィザードの接続プロパティの設定   | 40        |
| Outbound 処理のモジュールの構成  | 43        |
| ビジネス・オブジェクトおよびサービスの選択   | 43        |

|  |           |
|--|-----------|
| 選択されたオブジェクトの構成   | 44        |
| デプロイメント・プロパティの設定およびサービスの生成                               | 45        |
| Inbound 処理のモジュールの構成                                      | 52        |
| ビジネス・オブジェクトおよびサービスの選択                                    | 52        |
| 選択されたオブジェクトの構成   | 53        |
| デプロイメント・プロパティの設定およびサービスの生成                               | 54        |
| <b>第 5 章 アセンブリー・エディターを使用した対話仕様プロパティの変更</b>               | <b>63</b> |
| <b>第 6 章 モジュールのデプロイ</b>                                  | <b>65</b> |
| デプロイメント環境  | 65        |
| テスト用のモジュールのデプロイ  | 65        |
| 外部依存関係の追加  | 65        |
| Inbound 処理をテストするためのターゲット・コンポーネントの生成および接続                 | 67        |
| サーバーへのモジュールの追加   | 69        |
| テスト・クライアントを使用した Outbound 処理用モジュールのテスト                    | 70        |
| 実稼働用モジュールのデプロイ   | 70        |
| サーバーでの外部ソフトウェア依存関係の追加                                    | 70        |
| RAR ファイルのインストール (スタンドアロン・アダプターを使用するモジュールの場合のみ)           | 71        |
| EAR ファイルとしてのモジュールのエクスポート                                 | 72        |
| EAR ファイルのインストール  | 73        |
| <b>第 7 章 アダプター・モジュールの管理</b>                              | <b>77</b> |
| 組み込みアダプターの構成プロパティの変更                                     | 77        |
| 組み込みアダプターのリソース・アダプター・プロパティの設定                            | 77        |
| 組み込みアダプターの Managed (J2C) Connection Factory プロパティの設定     | 79        |
| 組み込みアダプターの活動化仕様プロパティの設定                                  | 81        |
| スタンドアロン・アダプターの構成プロパティの変更                                 | 83        |
| スタンドアロン・アダプターのリソース・アダプター・プロパティの設定                        | 83        |
| スタンドアロン・アダプターの Managed (J2C) Connection Factory プロパティの設定 | 84        |
| スタンドアロン・アダプターの活動化仕様プロパティの設定                              | 86        |
| アダプターを使用するアプリケーションの開始                                    | 88        |
| アダプターを使用するアプリケーションの停止                                    | 88        |
| Performance Monitoring Infrastructure を使用したパフォーマンスのモニター  | 89        |
| Performance Monitoring Infrastructure の構成                | 89        |
| パフォーマンスに関する統計の表示   | 92        |

Common Event Infrastructure (CEI) を使用したトレースの使用可能化 . . . . . 93

## 第 8 章 トラブルシューティングおよびサポート . . . . . 95

Log and Trace Analyzer のサポート . . . . . 95

ロギングおよびトレースの構成 . . . . . 96

    ロギング・プロパティの構成 . . . . . 96

    ログ・ファイル名およびトレース・ファイル名の変更 . . . . . 98

First Failure Data Capture (FFDC) サポート . . . . . 99

ビジネス・フォールト . . . . . 99

Outbound 処理中のメモリー限界例外の解決 . . . . . 101

セルフ・ヘルプ・リソース . . . . . 101

## 第 9 章 参照情報 . . . . . 103

ビジネス・オブジェクト情報 . . . . . 103

    アプリケーション固有情報 . . . . . 103

    サポートされる操作 . . . . . 105

カスタム・イベント・プロジェクト用 PeopleCode 105

Outbound 構成プロパティ . . . . . 110

    外部サービス・ウィザード用の接続プロパティ 112

    リソース・アダプター・プロパティ . . . . . 114

    Managed Connection Factory プロパティ . . . . . 119

    対話仕様プロパティ . . . . . 124

Inbound 構成プロパティ . . . . . 125

    外部サービス・ウィザード用の接続プロパティ 126

    リソース・アダプター・プロパティ . . . . . 129

    活動化仕様プロパティ . . . . . 134

グローバリゼーション . . . . . 144

    グローバリゼーションおよび双方向データ変換 144

    双方向データ変換で使用可能なプロパティ . . . . . 146

アダプター・メッセージ . . . . . 146

関連情報 . . . . . 146

## 特記事項 . . . . . 149

プログラミング・インターフェース情報 . . . . . 151

商標 . . . . . 151

## 索引 . . . . . 153

---

## 第 1 章 WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise の概要

Adapter for PeopleSoft Enterpriseを使用すると、標準インターフェースを介して PeopleSoft Enterprise と情報を交換する統合プロセスを作成できます。このインターフェースにより、クライアント・アプリケーションは、実装や、使用されるアプリケーションまたはデータ構造に関する低レベル詳細を分析する必要がなくなります。

このアダプターを使用すると、クライアント・アプリケーションは、PeopleSoft Enterprise サーバーとの間で要求のやり取りを行うことができます。例えば、アプリケーションは、HR テーブル内のレコードを照会する要求を送信したり、更新された社員レコードに関する通知などのイベントをサーバーから受信したりできます。

標準的な方法で通信できるように、WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise は、Java™ 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE) Connector Architecture (JCA) に準拠しています。JCA は、アプリケーション・コンポーネント、アプリケーション・サーバー、および PeopleSoft Enterprise サーバーなどのエンタープライズ情報システムが相互に対話する方法を標準化します。WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise により、JCA 準拠アプリケーション・サーバーは、PeopleSoft Enterprise サーバーに接続して対話できるようになります。これで、JCA 準拠サーバーで実行するクライアントは、標準的な方法で PeopleSoft Enterprise サーバーと通信できます。

アダプターは、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server、WebSphere Message Broker などの JCA 準拠環境で実行できます。アダプターをセットアップし、使用方法は、アダプターが実行する環境によって決まります。

例えば、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus で WebSphere Integration Developer ツールを使用してアダプターをセットアップし、会社で PeopleSoft Enterprise を使用してそのビジネス・オペレーションのほとんどを統合することを考慮してください。PeopleSoft Enterprise には、さまざまなスキル・コードに対する応答として社員のリストを返すビジネス関数が組み込まれています。クライアント・アプリケーションは、全体的なビジネス・プロセスの一部としてこの関数を使用できる場合があります。例えば、社内の技術サポート部門がトラブルシューティングや機器の修理のためにお客様のサイトへ社員を派遣するが、その過程で、定義された担当地域内で一定のスキルを持つ社員のリストを入手する必要があります。

ただしこの関数を使用するには、技術サポート部門が使用するクライアント・アプリケーションは、PeopleSoft 関数の低レベル実装詳細およびデータ構造を理解する必要があります。情報技術資源と時間を基準として、クライアント・アプリケーションと PeopleSoft 関数がリンクされる必要があります。

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseを使用すると、PeopleSoft 関数へのインターフェースを自動的に生成して、その関数の低レベルの詳細を隠すことができま

す。アダプターの使用計画に応じて、デプロイしたアプリケーションにアダプターを組み込むことも、複数のアプリケーションで使用されるスタンドアロン・コンポーネントとしてインストールすることもできます。

組み込みアダプターは、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にデプロイされるアプリケーションの一部となります。アプリケーション・コンポーネントが対話するのは、PeopleSoft 関数ではなく、このアダプターになります。

WebSphere Integration Developer の外部サービス・ウィザードで生成されるコンポーネントは、標準インターフェースおよび標準ビジネス・オブジェクトを使用して、ビジネス・オブジェクトがクライアント・アプリケーションによって送信されるようにし、PeopleSoft 関数が呼び出されるようにします。その後、ビジネス・オブジェクトをクライアント・アプリケーションに返します。クライアント・アプリケーションは、PeopleSoft 関数を直接扱うことはありません。代わりに、このコンポーネントが関数を呼び出し、結果を返します。

この例では、社員のリストを必要としたクライアント・アプリケーションは、該当範囲のスキル・コードを持つビジネス・オブジェクトを PeopleSoft アダプター・コンポーネントに送信します。クライアント・アプリケーションが、標準ビジネス・オブジェクトの形で結果 (社員のリスト) を受け取るようになります。クライアント・アプリケーションは、関数がどのように機能するかや、データの構造に関する情報を必要としません。アダプター・コンポーネントが PeopleSoft 関数との対話をすべて実行します。

さらに、クライアント・アプリケーションは、PeopleSoft Enterprise サーバーでのデータの変更 (例えば、特定社員のスキル・セットの変更) に関する警告を受ける場合があります。そのような場合は、PeopleSoft Enterprise サーバーで発生するそのようなイベントを `listen` し、更新をクライアント・アプリケーションに通知するアダプター・コンポーネントを生成できます。

---

## ハードウェア要件とソフトウェア要件

WebSphere Adapters のハードウェアおよびソフトウェアの要件は、IBM® Support Web サイトに記載されています。

WebSphere Adapters のハードウェアおよびソフトウェアの要件を表示する場合は、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006249> を参照してください。

### 追加情報

以下のリンク先には、アダプターの構成およびデプロイを行う際に必要となる可能性のある追加情報が記載されています。

- WebSphere Business Integration Adapters および WebSphere Adapters の互換性マトリックスによって、ご使用のアダプターで必要となるソフトウェアのサポート対象バージョンが識別されます。この資料を表示するには、WebSphere Adapters のサポート・ページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wbiadapters/support/>) にアクセスして、「Additional support links」セクションの「Related」の見出しの下にある「Compatibility Matrix」をクリックしてください。



- WebSphere Adapters の技術情報には、製品文書には記載されていない回避策および追加情報があります。ご使用のアダプターの技術情報を表示するには、  
<http://www.ibm.com/support/search.wss?tc=SSMKUK&rs=695&rank=8&dc=DB520+D800+D900+DA900+DA800+DB560&dtm> にアクセスして、「**Product category**」リストの中からアダプター名を選択し、検索アイコンをクリックしてください。

---

## 技術概要

アダプターは、統合用に基礎のビジネス・データを公開する PeopleTools アプリケーション・プログラミング・インターフェース・クラスの 2 つのレイヤーに接続することで、PeopleSoft Enterprise サーバーと WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus の間のビジネス・データのやり取りをサポートします。

アダプターは、以下のように 2 つの PeopleTools アプリケーション・プログラミング・インターフェースに接続することで、PeopleSoft Enterprise サーバーとの双方向接続を確立します。

1. アダプターは、1 次 API レイヤーにアクセスしてセッション・インスタンスを作成し、Jolt ポートを通じてアプリケーション・サーバーに接続します。
2. 次にアダプターは、PeopleSoft の Component Interface API にアクセスします。この API で基礎となるビジネス・オブジェクト、ロジック、および機能が公開されます。

PeopleSoft では、コンポーネントは、ビジネス目的 (社員プロフィールなど) のためにまとめられたページのセットであり、Component Interface は、外部アプリケーションからコンポーネントへのアクセスを可能にする API です。アダプターが Component Interface に接続されると、以下のエンティティーがアダプターに公開され、統合可能になります。

- Component Interface 定義内のすべてのビジネス・オブジェクト
- 基礎のコンポーネントに関連付けられた PeopleCode メソッド
- レコード (検索およびメニュー固有処理オプションを除く)

## Outbound 処理

アダプターは同期 Outbound 要求処理をサポートするので、クライアント・アプリケーションがビジネス・オブジェクトの形式で要求をアダプターに送信すると、アダプターは、その要求を処理して、操作の結果を表わすビジネス・オブジェクトをクライアント・アプリケーションに返します。

アダプターは、WebSphere ビジネス・オブジェクト階層を受信すると、それを以下のように処理します。

1. アダプターは、アクセスする適切な PeopleSoft Component Interface を識別するメタデータを抽出します。
2. アダプターは、実行する Outbound 操作を抽出します。
3. Component Interface へのアクセス後、アダプターは、ビジネス・オブジェクトに指定された値からキーを設定します。Create 操作などのように、キー値が生成されない場合、PeopleSoft アプリケーションがキー・フィールドを生成します。

4. PeopleSoft オブジェクトの取得後、アダプターは、既存の Component Interface のインスタンスを作成して、Component Interface を削除、取得、更新、または作成します。
5. 更新操作 (Create、Update) を実行する場合、アダプターは、Component Interface に WebSphere ビジネス・オブジェクト階層からのデータを取り込みます。Delete 操作が必要な場合、アダプターは、Component Interface に StatusColumnName および値情報のみを取り込みます。

注: Create および Update 操作の場合のみ、アダプターは、ビジネス・オブジェクトで定義された順序で属性を処理します。例えば、2 つの単純属性の間に複合属性がある場合、アダプターは、最初の単純属性、次に複合属性、最後に 2 番目の単純属性の順に処理します。変更が行われた後では、データを PeopleSoft データベースにコミットするために、Component Interface が保存されます。

## サポートされる Outbound 操作

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseは、以下の Outbound 操作をサポートします。

- Apply Changes
- Create
- Delete
- Exists
- Retrieve
- Retrieve All
- Update

以下の表では、これらの操作のそれぞれについて説明します。

表 1. サポートされる Outbound 操作

| 操作           | 説明   |
|--------------|--|
| ApplyChanges | 変更の要約に含まれるデルタ情報に基づいて、ビジネス・オブジェクトを更新、作成、または削除します。                                     |
| Create       | ビジネス・オブジェクトを作成します。   |
| Delete       | ビジネス・オブジェクトおよびその子を削除します。アダプターは論理削除のみをサポートするため、オブジェクトは削除のマーク付けられるだけで、取り除かれるわけではありません。 |
| Exists       | 着信ビジネス・オブジェクトの存在をチェックします。  |
| Retrieve     | PeopleSoft コンポーネントを取得し、コンポーネントのデータをビジネス・オブジェクトにマップします。                               |
| RetrieveAll  | PeopleSoft コンポーネントの複数インスタンスを取得し、コンポーネントのデータをビジネス・オブジェクトにマップします。                      |
| Update       | 対応する PeopleSoft コンポーネントを着信ビジネス・オブジェクトで更新します。   |



## Inbound 処理

アダプターは、非同期の Inbound 処理をサポートしています。Inbound 処理とは、アダプターが指定の間隔で PeopleSoft Enterprise サーバーをポーリングしてイベントを確認することです。イベントを検出すると、アダプターは、イベント・データをビジネス・オブジェクトに変換して、クライアント・アプリケーションに送信します。

Inbound 処理を使用するには、PeopleSoft でカスタム・イベント・プロジェクトを作成する必要があります。

### イベント・ストア

イベント・ストアは、ポーリング・アダプターが処理できるようになるまで、データ変更を表わすイベントが収められるテーブルです。このアダプターは、イベント・ストアを使用してイベント・エンティティを追跡します。

Inbound 処理を使用するには、PeopleTools Application Designer を使用して、イベント通知用のカスタム・プロジェクトを作成する必要があります。このカスタム・プロジェクトでは、将来のイベントの処理方法を決定する 2 つの PeopleCode 関数が必要とされ、Inbound 処理にアダプターが必要とするイベント・ストアが作成されます。ビジネス・オブジェクトが作成、更新、または削除されるたびに、プロジェクトで使用されてから Component Interface に追加される PeopleCode 関数により、適切なオブジェクト名、キー、および状況値を持つ新規レコードがイベント・ストアに挿入されます。

Inbound 処理中、アダプターは、構成されたポーリング間隔でイベント・ストアからイベントをポーリングします。それぞれのポーリング呼び出しでは、構成された数のイベントがアダプターによって処理されます。イベントの処理順序は、昇順の優先順位および昇順のイベント・タイム・スタンプに基づいています。各ポーリング周期でのポーリングでは、ポーリング開始可能 (0) 状況のイベントが選出されます。アダプターは、オブジェクト名とオブジェクト・キーを使用して、対応のビジネス・オブジェクトを取得します。

イベントが確実に 1 回だけターゲット・アプリケーションに送達されるようにするには、活動化仕様プロパティ AssuredOnceDelivery を true に設定します。このプロパティを true に設定すると、イベント・ストアの各イベントに XID (トランザクション ID) 値が設定されます。イベントが処理対象として取得されると、イベント・ストア内でそのイベントの XID 値が更新されます。次に、イベントがその対応するエクスポートに送達され、その状況が更新されて、イベント送達が完了したことを示します。イベントがエクスポートに送達可能になる前にアプリケーションが停止した場合、または送達が失敗した場合、イベントの処理が完全でない可能性があります。この場合、XID 値は進行中状況を表わし、XID 列に基づいて、イベントは必ず再処理され、エクスポートに送信されるようになっています。データベース接続が再確立されるか、アダプターが再始動すると、アダプターは、イベント・テーブル内で XID 列にポーリング開始可能 (0) の値があるイベントをチェックします。アダプターは、まずこうしたイベントを処理してから、ポーリング周期の間にその他のイベントをポーリングします。

アダプターは、状況コード (99) を持つイベントに対して特殊処理を使用して、こうしたイベントが将来発生することを示します。ポーリング周期中に、アダプター

は、将来の状況の各イベントを取得すると、それぞれのイベントのタイム・スタンプをシステム時刻と比較します。イベントのタイム・スタンプがシステム時刻に等しいか、それ以前である場合、アダプターはイベントを処理し、イベント状況をポーリング開始可能 (0) に変更します。

注: アダプターに将来の状況のイベントを現時点で処理させたい場合、関数 IBM\_FUTURE\_PUBLISH\_EVENT ではなく、関数 IBM\_PUBLISH\_EVENT を使用します。こうした処理をすると、イベントが将来 (99) の代わりにポーリング開始可能 (0) として識別されます。

以下の表に示すように、イベントがイベント・ストアから取得され、処理されると、イベントの状況が変わり、その状態を反映します。

表2. イベント状況値

| 状況のショート・ネーム | 説明                                   | イベント・テーブル値 |
|-------------|--------------------------------------|------------|
| エラー処理イベント   | イベント処理中にエラーが発生しました。                  | -1         |
| ポーリング開始可能   | イベントは選出できるようになっています。                 | 0          |
| 成功          | イベントは、イベント・マネージャーに送達されました。           | 1          |
| 削除          | イベントは、正常に処理され、イベント・ストアから除去されているはずです。 | 4          |
| 将来のイベント     | こうしたイベントは、将来の日付で処理されることとなります。        | 99         |

## ビジネス・オブジェクト

PeopleSoft Enterprise との間でデータをやり取りするために、アダプターはビジネス・オブジェクトを使用します。ビジネス・オブジェクトとは、データ、データ上で実行されるアクション、データを処理するための追加の指示 (存在する場合) で構成される構造体のことです。データは送り状レコードや社員レコードなどのビジネス・エンティティーを表わすこともあれば、非構造化テキストを表わすこともあります。

### ビジネス・オブジェクトが作成される仕組み

ビジネス・オブジェクトを作成するには、外部サービス・ウィザードを使用してください。このウィザードは WebSphere Integration Developer から起動します。起動したウィザードは、アプリケーションに接続し、アプリケーションのデータ構造をディスカバーして、そのデータ構造を表わすビジネス・オブジェクトを生成します。さらに、アダプターで必要な他の成果物も生成します。

### ビジネス・オブジェクトの構造

アダプターは、階層構造のビジネス・オブジェクトをサポートします。最上位のビジネス・オブジェクトには、PeopleSoft の Component Interface との 1 対 1 の対応が必要であり、最上位オブジェクト内で発生するコレクションはその子となりま

す。ビジネス・オブジェクトを処理するためにアダプターが使用する情報は、オブジェクトのアプリケーション固有の情報およびオブジェクトのそれぞれの属性に保管されています。

以下の表では、ビジネス・オブジェクトを構成する属性について説明します。

| 属性プロパティ   | 説明  |
|-----------|---|
| 名前        | ビジネス・オブジェクト属性の名前。   |
| タイプ       | <p>ビジネス・オブジェクト属性のタイプ。アダプターは、PeopleSoft コンポーネント・プロパティ・タイプと生成済みビジネス・オブジェクトの属性タイプ間の文字マッピングを使用します。PeopleSoft コンポーネント・プロパティ・タイプは生成済み属性タイプへ以下のようにマッピングされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• CHAR は、属性タイプ String にマップされます。</li> <li>• NUMBER は、属性タイプ Integer にマップされます。</li> <li>• SIGNED NUMBER は、属性タイプ Integer にマップされます。</li> <li>• DATE は、属性タイプ String にマップされます。</li> <li>• TIME は、属性タイプ String にマップされます。</li> <li>• DTTM は、属性タイプ String にマップされます。</li> </ul> |
| キー        | 基本キーのアプリケーション固有の情報。また子ビジネス・オブジェクトは、その親ビジネス・オブジェクトからキーを継承します。  |
| カーディナリティー | 単純属性の場合は単一カーディナリティー、コンテナ属性の場合は複数のカーディナリティー。   |

## ビジネス・グラフ

アダプターの構成時に、ビジネス・グラフを生成するオプションを選択することもできます。バージョン 6.0.2 では、最上位レベルの各ビジネス・オブジェクトがビジネス・グラフに含まれていますが、このビジネス・オブジェクトには、実行する操作に関する追加情報を指定するために、バージョン 6.0.2 でアプリケーションが使用できる動詞が組み込まれています。バージョン 6.2 では、ビジネス・グラフが必要になるのは以下の状況に限られます。

- Outbound ApplyChanges 操作を使用する必要がある場合
- バージョン 6.2 より前のバージョンの WebSphere Integration Developer で作成されたモジュールにビジネス・オブジェクトを追加する場合

ビジネス・グラフが存在する場合、ビジネス・グラフは処理されますが、ApplyChanges 以外のすべての操作で動詞は無視されます。

## 外部サービス・ウィザード

外部サービス・ウィザードは、アダプターを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にデプロイする前に、そのアダプターを構成する場合に使用するツールです。外部サービス・ウィザードは、PeopleSoft Enterprise サ

サーバーとの接続を確立し、(指定した検索基準に基づいて) ビジネス・オブジェクトおよびサービスをディスカバーして、ディスカバーされたサービスに基づいてビジネス・オブジェクトを生成します。

WebSphere Integration Developer を使用して、PeopleSoft Enterprise サーバーとの接続を確立し、PeopleSoft Enterprise サーバー上でメタデータ・リポジトリを参照します。また接続情報 (サーバーへのアクセスに必要なユーザー名とパスワードなど) も指定します。

外部サービス・ウィザードを実行すると、アダプターとともにビジネス・オブジェクトおよびサービスを含むモジュールが得られます。このモジュールを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にデプロイします。

---

## 第 2 章 アダプター実装の計画

IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseを実装する場合には、Inbound および Outbound 処理を計画し、セキュリティーおよびパフォーマンス上の要件を考慮する必要があります。

---

### 作業を始める前に

アダプターのセットアップおよび使用を開始する前に、ビジネス・インテグレーションの概念、使用する統合開発ツールおよびランタイム環境の機能と要件、およびこのソリューションを構築して使用する場所となるPeopleSoft Enterprise環境について十分に理解しておく必要があります。

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseを構成してデプロイするには、以下の概念、ツール、および作業に関する知識と経験が必要です。

- 構築するソリューションの業務要件。
- Service Component Architecture (SCA) プログラミング・モデルなどのビジネス・インテグレーションの概念およびモデル。
- ソリューションの作成のために使用する開発ツールに用意されている機能。これらのツールを使用した、モジュールの作成方法、コンポーネントのテスト方法、その他の統合作業の実行方法を理解しておく必要があります。
- 統合ソリューションのために使用するランタイム環境の機能と要件。ホスト・サーバーの構成方法と管理方法だけでなく、管理コンソールを使用して、プロパティ定義の設定と変更、接続の構成、およびイベントの管理を行う方法についても理解しておく必要があります。
- Component Interface と基礎コンポーネントとの関係が組み込まれた PeopleSoft 統合アーキテクチャー。
- アプリケーションをサポートする PeopleTools バージョン。PeopleSoft Application Designer を使用して、ビジネス・アプリケーションを構成するオブジェクト定義にアクセスし、プロジェクトを作成してコンポーネントに追加できるようになっている必要があります。
- PeopleSoft (PeopleCode) に必要なプログラミング環境。コンポーネント内での PeopleCode の役割の理解、および Application Designer で作成するプロジェクトに PeopleCode を追加する方法に関する知識が必要です。

---

### セキュリティー

アダプターは、Java 2 セキュリティーの J2C 認証データ入力 (認証別名) 機能を使用して、ユーザー名およびパスワードの安全な認証機能を提供します。セキュリティー機能について詳しくは、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus の資料を参照してください。

---

## ログ・ファイルおよびトレース・ファイル内の重要ユーザー・データを保護するためのサポート

アダプターにより、ログ・ファイルおよびトレース・ファイル内の重要データまたは機密データを、許可なく表示できないように保護することができます。

アダプターのログ・ファイルおよびトレース・ファイルには、重要情報または機密情報が入っている可能性のある PeopleSoft Enterprise サーバー からのデータが含まれる場合があります。時として、このようなファイルは、重要データの表示許可を持たない人でも表示しなければならないことがあります。例えば、サポート・スペシャリストはログ・ファイルおよびトレース・ファイルを使用して、問題のトラブルシューティングを行う必要があります。

このようなシチュエーションでデータを保護するために、アダプターで、アダプターのログ・ファイルとトレース・ファイルの中にあるユーザーの機密情報を表示させるかどうかを指定できます。このオプションは、外部サービス・ウィザードの中で選択したり、HideConfidentialTrace プロパティを変更したりできます。このプロパティが有効な場合、アダプターは、機密データを XXX で置き換えます。

このオプション・プロパティについては、119 ページの『Managed Connection Factory プロパティ』を参照してください。

次のタイプの情報が基本的に機密データであるとみなされ、隠蔽されます。

- ビジネス・オブジェクトの内容
- イベント・レコードのオブジェクト・キーの内容
- ユーザー名とパスワード
- PeopleSoft Enterprise サーバーに接続するために使用される URL

以下のような情報は、ユーザー・データとみなされず、表示されません。

- イベント・レコード・オブジェクト・キーの部分ではないイベント・レコードの内容。例えば、XID、イベント ID、ビジネス・オブジェクト名、およびイベント状況
- ビジネス・オブジェクト・スキーマ
- トランザクション ID
- 呼び出しシーケンス

---

## ユーザー認証

アダプターでは、PeopleSoft Enterprise サーバーへの接続に必要なユーザー名およびパスワードを指定する方法がいくつかサポートされています。それぞれの方法の特徴および制限を理解した上で、ご使用のアプリケーションにとって適切なセキュリティ・レベルを提供する都合のよい方法を選択してください。

アダプターをアプリケーションに統合するには、以下の場合にユーザー名およびパスワードが必要になります。

- ユーザーがアダプターでアクセスできるオブジェクトおよびサービスに関する情報を抽出、つまりディスカバー するために外部サービス・ウィザードが PeopleSoft Enterprise サーバーに接続するとき。



- WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus での実行時に、アダプターが Outbound 要求および Inbound イベントを処理するために PeopleSoft Enterprise サーバーに接続するとき。

## ウィザードでの認証

外部サービス・ウィザードは、ディスカバリー・プロセスの接続情報を要求し、これを、実行時に使用される接続情報を指定するアダプター・プロパティのデフォルト値として再利用します。ウィザードの実行中に使用するユーザー名およびパスワードは、アプリケーションをサーバーにデプロイするときとは別のものを使用できます。別の PeopleSoft Enterprise サーバーに接続することもできます。ただし、2つのデータベースのスキーマ名が同じである必要があります。例えば、Adapter for PeopleSoft Enterprise を使用するアプリケーションの開発および統合中は、実動データベースを使用しないことがあります。テスト・データベースを使用し、同じデータ形式で、より少ない数の模擬レコードを使用することにより、実動データベースのパフォーマンスに影響を与えることなく、また顧客データのプライバシー要件に起因する制限が生じることなく、アプリケーションを開発および統合できます。

ウィザードは、ディスカバリー・プロセス用に指定されたユーザー名およびパスワードをディスカバリー・プロセスでのみ使用します。これらは、ウィザードの完了後はアクセス不能になります。

## 実行時の認証

実行時、アダプターは、PeopleSoft Enterprise サーバーに接続するためにユーザー名およびパスワードを提供する必要があります。ユーザー介入なしに接続するためには、アダプターは保管されているユーザー情報のコピーにアクセスしなければなりません。サーバー環境では、ユーザー情報の保管方法はいくつかあります。外部サービス・ウィザードでは、アダプターが次のいずれかの方法でユーザー情報を取得するように構成できます。

- アダプター・プロパティ
- データ・ソース
- J2C 認証別名

アダプター・プロパティへのユーザー名およびパスワードの保管は、実行時にこの情報を提供するための直接的な方法です。外部サービス・ウィザードを使用してモジュールを構成するときに、ユーザー名およびパスワードを指定します。ユーザー名とパスワードを直接指定する方法は最も簡単のように見えますが、この方法には重要な制限があります。アダプター・プロパティは暗号化されません。パスワードは、サーバー上で他のユーザーがアクセスできるフィールドに平文で保管されます。さらに、パスワードが変更された場合は、アプリケーション EAR ファイルに組み込まれたアダプターおよびサーバーに個別にインストールされたアダプターを含む、その PeopleSoft Enterprise サーバーにアクセスするすべてのアダプター・インスタンスのパスワードを更新しなければなりません。

データ・ソースを使用すれば、別のアプリケーションのために既に確立された接続を使用することができます。例えば、複数のアプリケーションが同じユーザー名およびパスワードを使用して同じデータベースにアクセスする場合は、同じデータ・ソースを使用してそれらのアプリケーションをデプロイできます。ユーザー名およ

びパスワードを知るユーザーを、そのデータ・ソースにアプリケーションをデプロイする最初のユーザー、またはデータ・ソースを個別に定義する最初のユーザーのみに限定できます。

Java 2 セキュリティーの Java 認証および承認サービス (JAAS) 機能で作成された J2C 認証データ項目、または認証別名を使用することは、堅固で安全なアプリケーションのデプロイ手段です。管理者は、システムにアクセスする必要がある 1 つ以上のアプリケーションで使用される認証別名を作成します。ユーザー名およびパスワードを知るユーザーを、その管理者のみに限定できます。管理者は、変更が必要な場合は単一の場所でパスワードを変更できます。

---

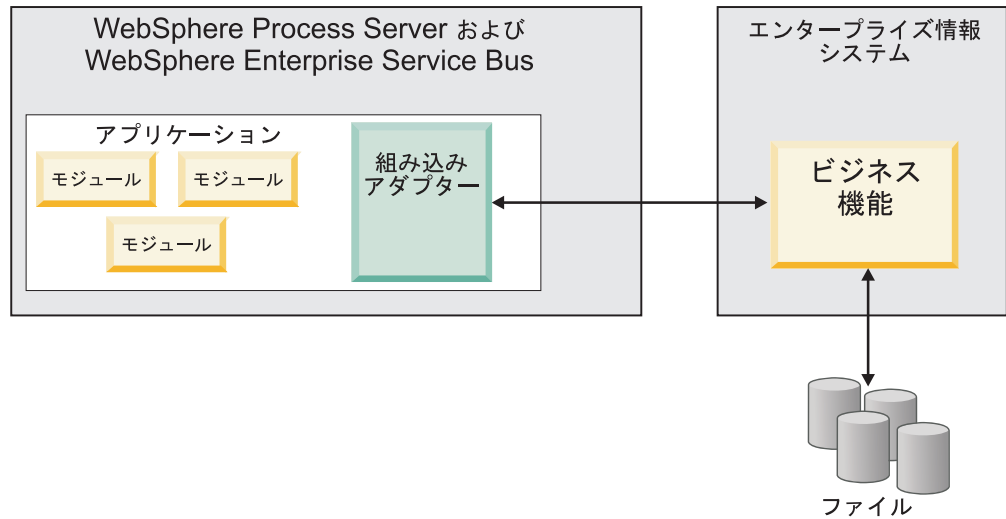
## デプロイメント・オプション

アダプターをデプロイする方法は、2 とおりあります。デプロイされたアプリケーションの一部としてアダプターを組み込むか、アダプターをスタンドアロン RAR ファイルとしてデプロイできます。ご利用の環境の要件によって、選択するデプロイメント・オプションのタイプが異なります。

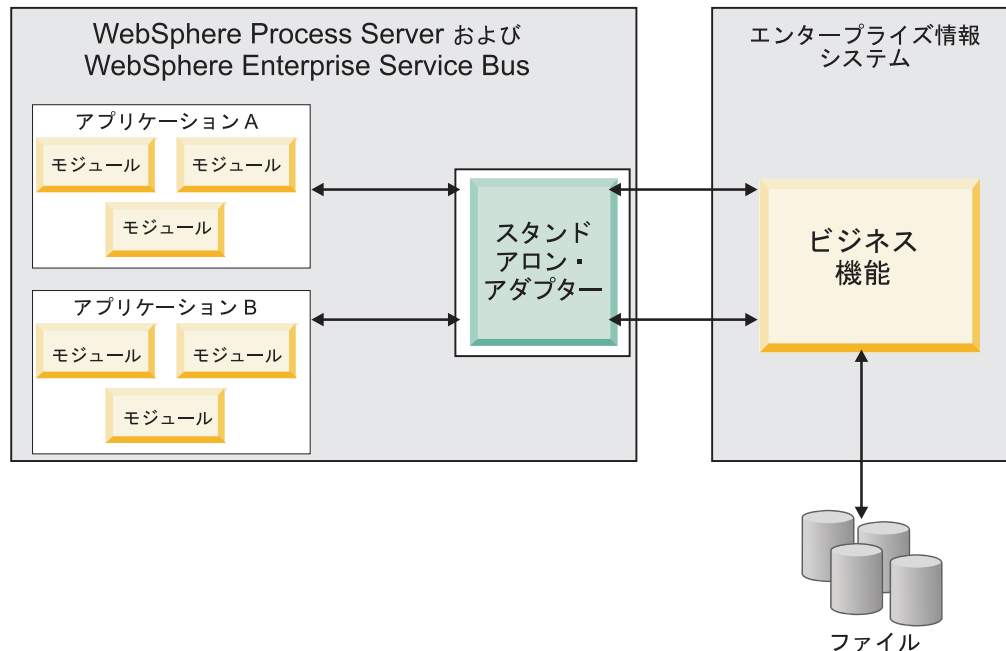
デプロイメント・オプションについて以下に説明します。

- 「**単一アプリケーションが使用するモジュールとともにデプロイする**」。アダプター・ファイルをモジュール内に組み込むと、モジュールをあらゆるアプリケーション・サーバーにデプロイすることができます。組み込みアダプターを使用するのは、組み込みアダプターを使用するモジュールが 1 つある場合か、複数のモジュールでバージョンの異なるアダプターを実行する必要がある場合です。組み込みアダプターを使用すると、他のモジュールのアダプター・バージョンを変更することで、それらのモジュールを不安定にするリスクを生じることなく、1 つのモジュール内でアダプターをアップグレードできます。
- 「**複数アプリケーションが使用するサーバー上**」。モジュール内にアダプター・ファイルを組み込まない場合は、このモジュールを実行するアプリケーション・サーバーごとにモジュールをスタンドアロン・アダプターとしてインストールする必要があります。複数のモジュールが同じバージョンのアダプターを使用可能で、アダプターを中央の場所で管理する場合は、スタンドアロン・アダプターを使用します。スタンドアロン・アダプターの場合も、複数のモジュールに対して単一のアダプター・インスタンスを実行することにより、必要なリソースが軽減されます。

エンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイル内には、組み込みアダプターがバンドルされています。この組み込みアダプターは、一緒にパッケージされ、デプロイされたアプリケーションでのみ使用することができます。



スタンドアロン・アダプターを表すのは、スタンドアロンのリソース・アダプター・アーカイブ (RAR) ファイルです。これは、デプロイされた後、サーバー・インスタンス内のすべてのデプロイ済みアプリケーションから使用することができます。



WebSphere Integration Developer を使用してアプリケーション用のプロジェクトの作成中は、アダプターのパッケージ方法 (EAR ファイルによってバンドルされるか、スタンドアロン RAR ファイルとして) を選択できます。この選択に応じて、アダプターをランタイム環境で使用する方法、および管理コンソールでのアダプターのプロパティの表示の仕方が異なります。

アダプターをアプリケーションに組み込むか、スタンドアロン・モジュールとしてデプロイするかのどちらを選択するかは、アダプターの管理の仕方によって決まります。アダプターの 1 つのコピーのみを保持して、アダプターのアップグレード時

に複数のアプリケーションが中断してもかまわない場合は、アダプターをスタンドアロン・モジュールとしてデプロイすることが多くなります。

複数のバージョンを稼働させる計画があるため、アダプターのアップグレード時に起こる可能性のある中断により配慮する場合は、アダプターをアプリケーションに組み込むことになります。アダプターをアプリケーションに組み込む場合、アダプターのバージョンをアプリケーションのバージョンに関連付けて、単一のモジュールとして管理することができます。

## アダプターのアプリケーションへの組み込みに関する考慮事項

アダプターをアプリケーションに組み込む計画がある場合は、以下の点を考慮してください。

- 組み込みアダプターには、クラス・ローダーの独立性があります。

クラス・ローダーは、アプリケーションのパッケージ化、およびランタイム環境にデプロイされたパッケージ済みアプリケーションの動作に影響を与えます。クラス・ローダーの分離とは、アダプターは別のアプリケーションまたはモジュールからクラスを読み込むことができないという意味です。クラス・ローダーの分離機能により、異なるアプリケーションで、類似した名前の付いた 2 つのクラスによる相互干渉が防止されます。

- アダプターが組み込まれた各アプリケーションを、別々に管理する必要があります。

## スタンドアロン・アダプターを使用する際の考慮事項

スタンドアロン・アダプターを使用する場合は、以下の点を考慮してください。

- スタンドアロン・アダプターには、クラス・ローダーの独立性がありません。

スタンドアロン・アダプターにはクラス・ローダーの分離が存在しないため、ある特定の Java 成果物の 1 つのバージョンのみが実行され、その成果物のバージョンや順序は特定されません。例えば、スタンドアロン・アダプターを使用する場合は、1 つのリソース・アダプター・バージョン、1 つのアダプター・ファウンデーション・クラス (AFC) バージョン、または 1 つのサード・パーティー JAR バージョンのみが存在します。スタンドアロン・アダプターとしてデプロイされたアダプターはすべて、単一の AFC バージョンを共有し、1 つのアダプターのすべてのインスタンスは同じコードのバージョンを共有します。1 つのサード・パーティー・ライブラリーを使用するアダプター・インスタンスはすべて、そのライブラリーを共有しなければなりません。

- これらの共有成果物のいずれかを更新する場合、その成果物を使用するすべてのアプリケーションが影響を受けることになります。

例えば、サーバー・バージョン X で動作しているアダプターを使用しているときに、クライアント・アプリケーションのバージョンをバージョン Y に更新すると、元のアプリケーションが動作しなくなることがあります。

- アダプター・ファウンデーション・クラス (AFC) には前のバージョンとの互換性がありますが、単体でデプロイされる各 RAR ファイルには、最新バージョンの AFC を入れておく必要があります。

スタンドアロン・アダプターのクラスパス内に、JAR ファイルの複数のコピーがある場合、使用される JAR ファイルはランダムになります。このため、すべてを最新バージョンにしておく必要があります。

---

## クラスター化された環境の WebSphere Adapters

モジュールをクラスター化されたサーバー環境にデプロイすることで、アダプターのパフォーマンスおよび可用性を向上させることができます。スタンドアロン・アダプター、または組み込みアダプターのどちらを使用してモジュールをデプロイする場合も、モジュールは、クラスター内のすべてのサーバー内に複製されます。

WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus、WebSphere Application Server Network Deployment、および WebSphere Extended Deployment は、クラスター化された環境をサポートします。クラスターとは、ワークロードの平衡を取り、高可用性とスケラビリティを提供するために、一緒に管理されるサーバー・グループのことです。サーバー・クラスターをセットアップするときには、デプロイメント・マネージャー・プロファイルを作成してください。デプロイメント・マネージャーのサブコンポーネントである HAManager により、アダプター・インスタンスを活動状態にするよう Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE) Connector Architecture (JCA) コンテナに通知されます。JCA コンテナにより、アダプター・インスタンスのランタイム環境が提供されます。クラスター環境の作成について詳しくは、リンク [http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/index.jsp?topic=/com.ibm.websphere.nd.doc/info/ae/ae/trun\\_wlm\\_cluster\\_v61.html](http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/index.jsp?topic=/com.ibm.websphere.nd.doc/info/ae/ae/trun_wlm_cluster_v61.html) を参照してください。

必要に応じて、WebSphere Extended Deployment を使用して、クラスター環境内のアダプター・インスタンスのパフォーマンスを向上させることができます。

WebSphere Extended Deployment は、WebSphere Application Server Network Deployment で使用される静的作業負荷マネージャーの代わりに、動的作業負荷マネージャーを使用することにより、WebSphere Application Server Network Deployment の機能を拡張します。動的作業負荷マネージャーは、要求による負荷の平衡化を動的に行うことによって、クラスター内のアダプター・インスタンスのパフォーマンスを最適化できます。これは、負荷の変動に応じて、アプリケーション・サーバー・インスタンスを自動的に停止したり始動したりできることを意味します。これにより、能力や構成が異なる複数のマシンが負荷の変動に一様に対処できるようになります。WebSphere Extended Deployment の利点について詳しくは、<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wxinfo/v6r1/index.jsp> のリンクを参照してください。

クラスター化された環境では、アダプター・インスタンスは、Inbound 処理および Outbound 処理の両方を処理することができます。

### Inbound 処理の高可用性

Inbound 処理は、PeopleSoft Enterprise サーバーのデータを更新した結果、起動するイベントに基づいています。WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise は、イベント・テーブルをポーリングすることで更新を検出するよう構成されます。その後、アダプターはイベントをそのエンドポイントにパブリッシュします。



モジュールをクラスターにデプロイすると、JCA コンテナにより、`enableHASupport` リソース・アダプター・プロパティーが検査されます。`enableHASupport` プロパティーの値が真である場合 (デフォルトの設定)、すべてのアダプター・インスタンスはポリシー N のうちの 1 つを持つ `HAManager` に登録されます。このポリシーは、アダプター・インスタンスのうちの 1 つのみがイベントのポーリングを開始することを意味します。クラスター内のその他のアダプター・インスタンスが開始していても、それらのインスタンスは、アクティブなアダプター・インスタンスがイベントの処理を完了するまで、アクティブ・イベントに関して休止のままとなります。ポーリング・スレッドが開始しているサーバーが何らかの理由でシャットダウンした場合は、バックアップ・サーバーのいずれかで稼働しているアダプター・インスタンスが活動状態になります。

**重要:** `enableHASupport` プロパティーの設定は変更しないでください。

## Outbound 処理の高可用性

クラスター化された環境では、Outbound 処理要求の実行に、複数のアダプター・インスタンスが使用可能です。そのため、Outbound 要求について `WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise` と対話するアプリケーションが、ご使用の環境に複数存在する場合は、クラスター化された環境にモジュールをデプロイすることにより、パフォーマンスが向上することがあります。クラスター化された環境では、複数の Outbound 要求が同じレコードを処理しようとしないう限り、複数の Outbound 要求を同時に処理することができます。

複数の Outbound 要求が、顧客の住所などの同じレコードを処理しようとした場合、`WebSphere Application Server Network Deployment` のワークロード管理機能により、その要求は、受信された順に使用可能なアダプター・インスタンスの間で分配されます。このため、クラスター化された環境では、この種の Outbound 要求は、単一サーバー環境内と同じように処理されます。つまり、1 つのアダプター・インスタンスが一度に処理するのは、1 つの Outbound 要求のみです。ワークロード管理について詳しくは、リンク [http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/index.jsp?topic=/com.ibm.websphere.nd.doc/info/ae/ae/trun\\_wlm.html](http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r1/index.jsp?topic=/com.ibm.websphere.nd.doc/info/ae/ae/trun_wlm.html) を参照してください。

---

## バージョン 6.2 へのマイグレーション

バージョン 6.2 の `WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise` にマイグレーションすると、前のバージョンのアダプターから自動的にアップグレードされます。さらに、アダプターの前のバージョンを組み込んだアプリケーションをマイグレーションできるため、このアプリケーションは、バージョン 6.2 が備えている機能や処理能力を活用できます。

## マイグレーションに関する考慮事項

`WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise` バージョン 6.2 には、既存のアダプター・アプリケーションに影響を与える可能性のある更新が含まれています。

`WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise` を使用するアプリケーションのマイグレーションを行う前に、既存のアプリケーションに影響を与える可能性のある要因について考慮する必要があります。



## 前のバージョンとの互換性

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise バージョン 6.2 は、バージョン 6.0.2.x およびバージョン 6.1.x のアダプターと完全に互換性があり、カスタム・ビジネス・オブジェクト (XSD ファイル) およびデータ・バインディングを扱うことができます。

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise バージョン 6.2 は、バージョン 6.0.2.x およびバージョン 6.1.x と完全に互換性があるため、WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise バージョン 6.0.2.x またはバージョン 6.1.0.x を使用していたアプリケーションは、バージョン 6.2 へのアップグレード後も変わらずに稼働します。ただし、バージョン 6.2 のアダプターのフィーチャーと機能をアプリケーションで使用する場合は、マイグレーション・ウィザードを実行してください。

マイグレーション・ウィザードは、アダプターのバージョン 6.0.2.x またはバージョン 6.1.x をバージョン 6.2 で置き換え (アップグレードし)、バージョン 6.2 のフィーチャーと機能をアプリケーションで使用できるようにします。

**注:** マイグレーション・ウィザードは、バージョン 6.2 のアダプターで動作するマップパーやメディエーターなどのコンポーネントを作成したり、既存のコンポーネントを変更したりすることはありません。バージョン 6.2 にアップグレードする場合で、アプリケーションにバージョン 6.1.x 以前のアダプターが組み込まれていて、バージョン 6.2 の機能をアプリケーションで利用する場合は、これらのアプリケーションを変更しなければならない場合があります。

単一モジュール内の成果物でバージョン管理に関する不整合がある場合、そのモジュール全体にマークが付けられ、マイグレーションに選択できなくなります。バージョンの不整合は、プロジェクト破損の可能性があるため、ワークスペース・ログに記録されます。

WebSphere Integration Developer のバージョンが、WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise のバージョンに一致しない場合は、これらの製品を同時に実行することはできません。

以下の製品の組み合わせが使用される場合、外部サービス・ウィザードは実行できません。

表 3. サポートされない製品の組み合わせ

| WebSphere Integration Developer | WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise |
|---------------------------------|---|
| バージョン 6.2                       | バージョン 6.1.x                                 |
| バージョン 6.1.x                     | バージョン 6.0.2.x                               |
| バージョン 6.0.2.x                   | バージョン 6.2                                   |
| バージョン 6.0.2.x                   | バージョン 6.1.x                                 |

## アップグレードかアップグレード後にマイグレーションかの決定

デフォルトでは、マイグレーション・ウィザードは、アダプターのアップグレードを実行してから、アプリケーション成果物をマイグレーションし、アプリケーションがバージョン 6.2 のアダプターの機能を使用できるようにします。プロジェクト

を選択してアダプターをアップグレードするようにすると、それに関連付けられている成果物がマイグレーションの対象としてウィザードにより自動的に選択されます。

アダプターをバージョン 6.0.2.x または バージョン 6.1.x からバージョン 6.2 にアップグレードする場合で、アダプター成果物をマイグレーションしない場合は、マイグレーション・ウィザードの該当するページでアダプター成果物の選択を解除してください。

アダプター成果物を選択しないでマイグレーション・ウィザードを実行すると、アダプターのインストールおよびアップグレードが行われますが、成果物はマイグレーションされないため、アプリケーションは、バージョン 6.2 のアダプターの機能や処理能力の利点を活用できません。

## テスト環境でのマイグレーション・ウィザードの初期実行

アダプターのマイグレーションでは、WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise のバージョン 6.2 を使用するアプリケーションを変更しなければならない場合があるため、アプリケーションを実稼働環境にデプロイする前に、まずマイグレーションを開発環境で実行して、アプリケーションをテストする必要があります。

マイグレーション・ウィザードは、開発環境に完全に統合されています。

## 非推奨の機能

非推奨機能は、サポートされてはいても、使用することが推奨されず、廃止される可能性がある機能です。従来のバージョンの WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise の機能のうち、バージョン 6.1.x およびバージョン 6.2 で非推奨になったもので、アプリケーションの変更が必要になる可能性があるのは、次のとおりです。

- EnableCrossReferencing パラメーターは非推奨です。
- Delete 操作用にビジネス・オブジェクト属性レベルで維持されるアプリケーション固有の情報は非推奨です。現在はビジネス・オブジェクト・レベルで維持されます。

## マイグレーションの実行

アダプター・マイグレーション・ウィザードを使用すると、プロジェクトまたは EAR ファイルをバージョン 6.2 にマイグレーションすることができます。ツールが終了したらマイグレーションは完了するため、プロジェクトで作業したり、モジュールをデプロイしたりできます。

### 始める前に

『マイグレーションに関する考慮事項』の情報を見直します。

### このタスクを実行する理由および時期

WebSphere Integration Developer でマイグレーションを実行するには、以下のステップを完了してください。

注: マイグレーションが完了すると、このモジュールは以前のバージョンの WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus、または WebSphere Integration Developer とは互換性がなくなります。

注: 以下の手順では、WebSphere Integration Developer の Java EE パースペクティブでコネクタ・プロジェクトのコンテキスト・メニューからアダプター・マイグレーション・ウィザードを実行する方法について説明します。

### このタスクの手順

1. 既存のプロジェクトの場合は PI (プロジェクト交換) ファイルを、デプロイ済みアプリケーションの場合は EAR (エンタープライズ・アーカイブ) ファイルを、それぞれワークスペースにインポートします。
2. Java EE パースペクティブに切り替えます。
3. モジュールを右クリックして、「更新」 → 「コネクタ・プロジェクトの更新」を選択します。

注: また、アダプター・マイグレーション・ウィザードは以下の方法でも起動できます。

- Java EE パースペクティブで、プロジェクトを右クリックし、「更新」 → 「アダプター成果物のマイグレーション (Migrate Adapter Artifacts)」を選択します。
- 問題ビューで、マイグレーション固有のメッセージを右クリックし、「クイック・フィックス」を選択して問題を解消します。

Java EE パースペクティブで、コネクタ・プロジェクトのコンテキスト・メニューからマイグレーション・ウィザードを起動する場合、デフォルトでは、依存関係のある成果物がすべて選択されます。依存関係にある成果物プロジェクトを選択解除すると、そのプロジェクトはマイグレーションされません。後で選択解除するプロジェクトであっても、マイグレーションすることは許可されます。以前にマイグレーション済みのプロジェクト、現行バージョンのプロジェクト、エラーのあるプロジェクトはマイグレーションの対象外であり、選択されません。

4. 「ようこそ」ページに表示されたタスクおよび警告を確認して、「次へ」をクリックします。
5. 警告ウィンドウが開き、「ターゲット・アダプターのバージョンでサポートされていないプロパティは、マイグレーション中に除去されます。」という内容のメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、次のステップに進みます。
6. 「変更内容の確認」ウィンドウでは、+ 記号をクリックすると、マイグレーション中のそれぞれの成果物で発生したマイグレーション変更を確認できます。
7. 「終了」をクリックして、マイグレーションを実行します。

マイグレーション・プロセスを実行する前に、ウィザードは、マイグレーションによって影響を受けるすべてのプロジェクトをバックアップします。プロジェクトは、ワークスペース内の一時フォルダーにバックアップされます。何かの理由でマイグレーションが失敗した場合、または完了前にマイグレーションを取り消すことにした場合、ウィザードは、変更されたプロジェクトを削除し、一時フォルダーに保管されているプロジェクトで置き換えます。

マイグレーションが正常に完了すると、バックアップされたプロジェクトはすべて削除されます。

8. 問題ビューを参照して、マイグレーション・ウィザードからのメッセージ (先頭に CWPAD というストリングがあるメッセージ) の有無を確認します。
9. EAR ファイルをマイグレーションしている場合は、マイグレーション済みアダプターおよび成果物のある新規の EAR ファイルを作成して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にデプロイすることもできます。EAR ファイルのエクスポートおよびデプロイについて詳しくは、この資料で EAR ファイルについて説明しているトピックを参照してください。

## 結果

プロジェクトまたは EAR ファイルは、バージョン 6.2 へマイグレーションされます。アダプター・マイグレーション・ウィザードの終了後に外部サービス・ウィザードを実行する必要はありません。

## バージョン 6.0.2.x またはバージョン 6.1.x プロジェクトは更新するが、マイグレーションしない

アダプター・プロジェクト成果物をマイグレーションしないように選択している場合は、アダプターをバージョン 6.0.2.x またはバージョン 6.1.x からバージョン 6.2 にアップグレードできます。

### このタスクを実行する理由および時期

アダプターの内部名はバージョン 6.2 で変更されたため、WebSphere Integration Developer バージョン 6.2 でアダプター・ウィザードを使用するには、新しい名前を使用するように、バージョン 6.0.2.x またはバージョン 6.1.x プロジェクトの成果物を更新する必要があります。バージョン 6.0.2.x またはバージョン 6.1.x プロジェクトを更新するには、マイグレーション・ウィザードを使用します。次に、WebSphere Integration Developer のクイック・フィックス機能を使用して、プロジェクト成果物内のアダプター名を変更します。

### このタスクの手順

1. プロジェクト交換 (PI) ファイルをワークスペースにインポートします。
2. Java EE パースペクティブで、プロジェクト名を右クリックし、「更新」→「コネクター・プロジェクトの更新」をクリックします。アダプター・マイグレーション・ウィザードが開きます。
3. 「よろこそ」ページで、「次へ」をクリックします。
4. 「プロジェクトの選択」ウィンドウで、依存関係のある成果物プロジェクトの選択を解除し、「終了」をクリックします。
5. 警告ウィンドウが開き、「このバージョンのターゲット・アダプターでサポートされないプロパティは、マイグレーション中に除去されます。」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、次のステップに進みます。
6. 「クイック・フィックス」ウィンドウで、「参照しているアダプターの名前を変更する (Rename the referenced adapter)」というフィックスが選択されていることを確認し、「OK」をクリックします。

- エラーが表示されたままの場合は、「プロジェクト」 → 「クリーン」をクリックし、更新直後のプロジェクトを選択して「OK」をクリックします。

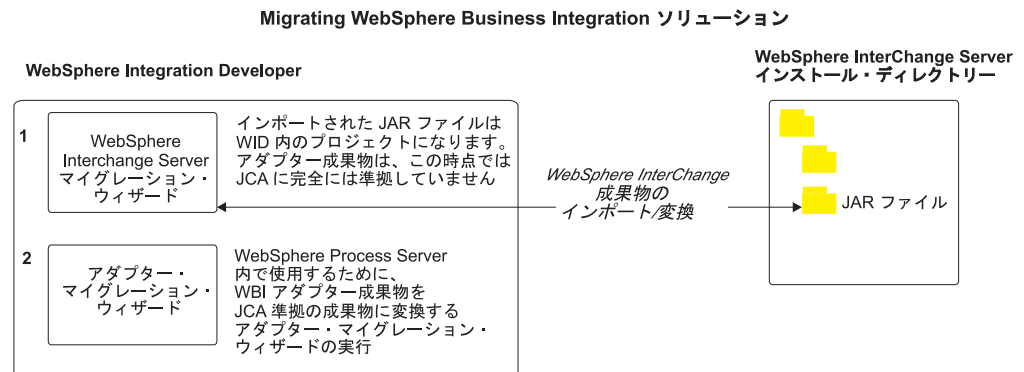
## 結果

これで、プロジェクトを WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise バージョン 6.2 で使用できるようになりました。

## バージョン 6.2 WebSphere Adapter で使用するための WebSphere ビジネス・インテグレーション・アプリケーションのマイグレーション

バージョン 6.2 の WebSphere Adapter で使用するための WebSphere ビジネス・インテグレーション・アプリケーションのマイグレーションは、複数ステップからなる処理です。最初のステップでは、成果物が WebSphere InterChange Server からマイグレーションおよび変換され、WebSphere Integration Developer でその成果物用のプロジェクトが作成されます。残りのステップでは、アダプター固有成果物がマイグレーションされ、バージョン 6.2 のアダプターでサポートされる JCA 準拠形式への成果物の変換が完了します。

以下の図は、WebSphere ビジネス・インテグレーション・ソリューションを、バージョン 6.2 のアダプターでできるように、WebSphere InterChange Server からマイグレーションするために使用されるウィザードを示しています。



## WebSphere InterChange Server からアプリケーションをマイグレーションするためのロードマップ

バージョン 6.2 の WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise を WebSphere InterChange Server からのアプリケーションで使用するには、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にデプロイして実行できるように、アプリケーション成果物をマイグレーションして、変換する必要があります。このタスクの概要を理解すれば、タスクを達成するのに必要な手順を実行できるようになります。

以下の図には、マイグレーション・タスクのフローを示しています。図の後に示す手順で、この作業の概要を説明します。これらの各ステップの実行方法の詳細については、このロードマップの後に記載するトピックを参照してください。

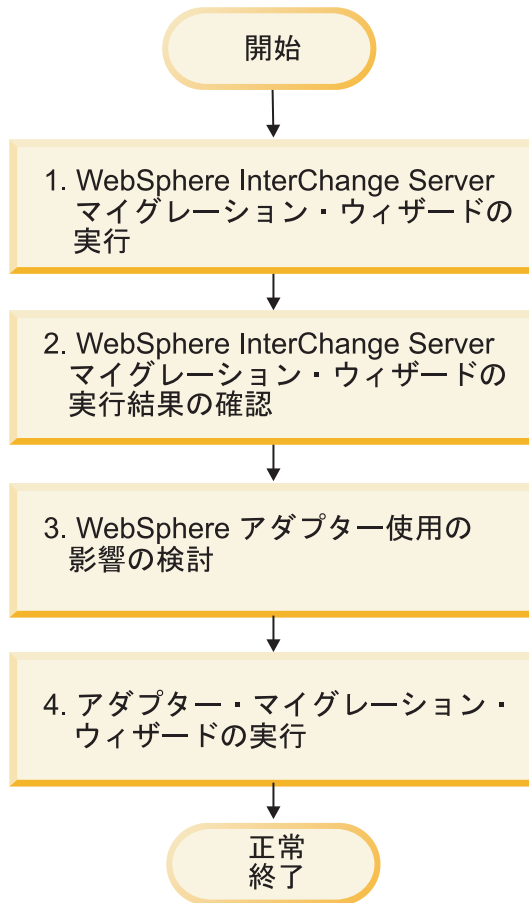


図1. WebSphere InterChange Server からアプリケーションをマイグレーションするためのロードマップ

## WebSphere InterChange Serverからのアプリケーションのマイグレーション

このタスクは、以下のステップからなります。

1. WebSphere InterChange Server マイグレーション・ウィザードを実行します。

WebSphere InterChange Server マイグレーション・ウィザードは、アプリケーション成果物を WebSphere Integration Developer に移動します。このタスクの完了時、マイグレーションされたアダプター成果物は、完全に JCA 準拠であるとは限りません。

2. WebSphere InterChange Server マイグレーションが成功したことを検証します。

「マイグレーション結果 (Migration results)」ウィンドウのすべてのメッセージを検討して、必要であれば処置を講じます。

3. バージョン 6.2 の WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseを使用する影響について考慮します。

WebSphere InterChange Server アプリケーションのマイグレーションに関する考慮事項のほかに、マイグレーションされたアプリケーションにバージョン 6.2 の WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseがどのように作用するかを考慮する



必要があります。WebSphere InterChange Server アプリケーションでサポートされる一部のアダプター操作は、バージョン 6.2のアダプターではサポートおよび実装の仕方が異なる場合があります。

#### 4. アダプター・マイグレーション・ウィザードを実行します。

アダプター・マイグレーション・ウィザードを実行して、スキーマやサービス定義ファイル (.import、.export、.wsdl) などのアダプター固有成果物を、バージョン 6.2のアダプターで使用するために更新します。

## WebSphere ビジネス・インテグレーション・アダプターのマイグレーションに関する考慮事項

マイグレーションを行うと、Java 2 Platform, Enterprise Edition (J2EE) Connector Architecture (JCA) に準拠し、サービス指向アーキテクチャー用に特に設計されたアダプターになります。

**注:** WebSphere ビジネス・インテグレーション・アダプターおよび JCA 準拠アダプターは、さまざまなイベント Component Interface を使用します。ユーザーは、マイグレーションの完了後、JCA 準拠アダプターでサポートされる新規イベント Component Interface に手動で変更する必要があります。

### 操作に関する考慮事項

いくつかの WebSphere ビジネス・インテグレーション・アダプター操作は、WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise バージョン 6.2 ではサポートの仕方が異なります。以下の操作を使用する計画の場合、追加の開発作業が必要になる可能性があります。

#### DeltaUpdate

DeltaUpdate は、WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseではサポートされていません。ApplyChanges 操作を使用して、コンポーネントのデルタ処理を実装する必要があります。

**Exists** Exists 操作は、WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseでは実装の仕方が異なります。

#### RetrieveByContent

RetrieveAll 操作は、WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise では RetrieveByContent 操作と同等のものとしてサポートされます。

## マイグレーション・ウィザード実行前の WebSphere Interchange Server マイグレーション・ウィザードの実行

アダプター・マイグレーション・ウィザードの実行前に、WebSphere Interchange Server マイグレーション・ウィザードを使用して、WebSphere ビジネス・インテグレーション・アダプター用のアプリケーション成果物 (ビジネス・オブジェクト、マップ、コラボレーションなど) を生成します。次にアダプター・マイグレーション・ウィザードを実行して、スキーマやサービス定義ファイル (.import、.export、.wsdl) などのアダプター固有成果物を更新して、これらが JCA に準拠する形式に適切に変換されるようにすることができます。

## テスト環境でのマイグレーション・ウィザードの初期実行

WebSphere ビジネス・インテグレーション・アダプターから WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseへのマイグレーションでは、バージョン 6.2 の WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseを使用するアプリケーションの変更が必要になる場合もあるので、必ずまず開発環境でのマイグレーションを実行して、アプリケーションをテストしてから、アプリケーションを実稼働環境にデプロイするようにしてください。

注: WebSphere ビジネス・インテグレーション・アダプターをマイグレーションして、J2EE コネクター・アーキテクチャー (JCA) に準拠するようにすると、新規のアプリケーション固有情報 (ASI) プロパティをビジネス・オブジェクト・エディター内のビジネス・オブジェクトに追加できなくなります。マイグレーション後に新規の ASI プロパティを追加するには、テキスト・エディターでビジネス・オブジェクトを開き、ASI プロパティを手動で追加します。

## WebSphere InterChange Server からのアプリケーション成果物のマイグレーション

アプリケーション成果物を WebSphere Integration Developer にマイグレーションするには、WebSphere InterChange Server マイグレーション・ウィザードを実行します。このウィザードは、ほとんどの成果物をインポートして、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus と互換性のある形式に変換します。

### 始める前に

WebSphere Integration Developer から WebSphere InterChange Server マイグレーション・ウィザードを起動し、アプリケーション成果物を WebSphere InterChange Server フォーマットから WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus と互換性のある成果物にマイグレーションします。

### このタスクを実行する理由および時期

WebSphere InterChange Server からの成果物のマイグレーションの準備方法、およびマイグレーション実行とマイグレーションが成功したかどうかの確認についての詳細な説明は、IBM WebSphere Business Process Management のインフォメーション・センターにアクセスし、WebSphere InterChange Server から WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus へのマイグレーションのトピックを参照してください。

WebSphere InterChange Server マイグレーション・ウィザードを実行しても、アダプター固有成果物 (サービス記述子、サービス定義、ビジネス・オブジェクトなど) が WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus 互換成果物に完全には変換されない場合があります。アダプター固有成果物のマイグレーションを完了するには、WebSphere InterChange Server マイグレーション・ウィザードを正常に実行した後で、アダプター・マイグレーション・ウィザードを実行します。

### 結果

プロジェクトおよびアプリケーション成果物がマイグレーションされ、WebSphere Process Server 互換成果物に変換されます。

### 次のタスク

アダプター・マイグレーション・ウィザードを実行して、アダプター固有成果物をマイグレーションします。

## アダプター固有成果物のマイグレーション

アダプター・マイグレーション・ウィザードを使用すると、プロジェクトをマイグレーションできます。アダプター・マイグレーション・ウィザードは、スキーマやサービス定義ファイル (.import、.export、.wsdl) などのアダプター固有成果物を、バージョン 6.2 のアダプターで使用できるように更新します。アダプター・マイグレーション・ウィザードの実行を完了したら、マイグレーションが完了するので、プロジェクトで作業したり、モジュールをデプロイしたりできます。

### 始める前に

アダプター・マイグレーション・ウィザードの実行前に、以下のことを行う必要があります。

- 『マイグレーションに関する考慮事項』のトピックの情報を検討します。
- WebSphere InterChange Server マイグレーション・ウィザードを実行して、プロジェクトをマイグレーションし、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus で使用できるようにデータ・オブジェクトを変換します。

### このタスクを実行する理由および時期

注: マイグレーションの完了後は、モジュールは、バージョン 6.2 のアダプターでのみ処理します。

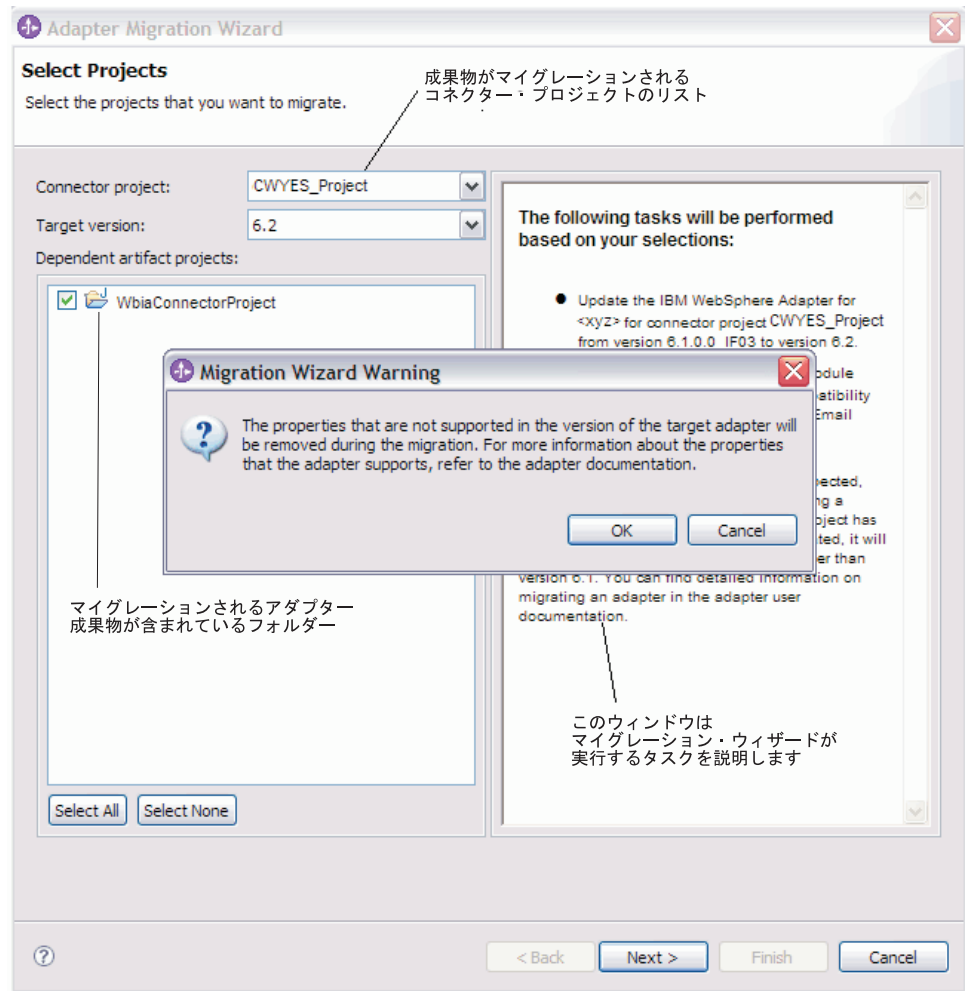
WebSphere Integration Developer でマイグレーションを実行するには、以下のステップを完了してください。

### このタスクの手順

1. Java EE パースペクティブで、コネクタ・プロジェクトを右クリックして、「更新」 → 「コネクタ・プロジェクトの更新」を選択します。

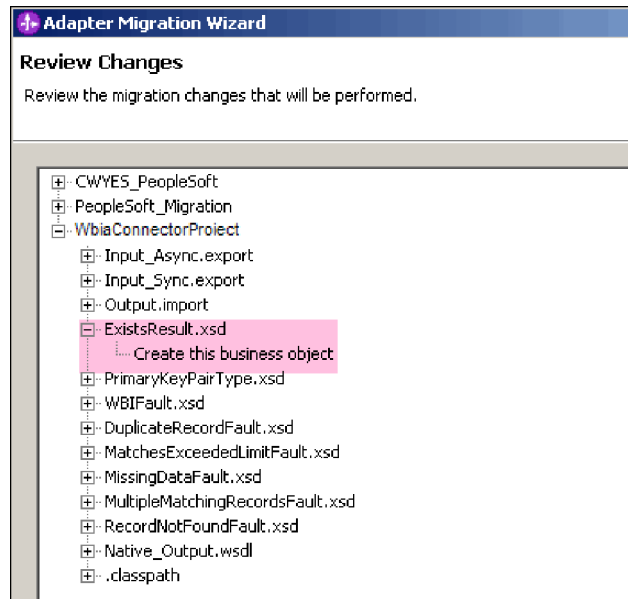
注: また、Java EE パースペクティブでモジュール・プロジェクトを右クリックして、「更新」 → 「アダプター成果物のマイグレーション」を選択すると、アダプター・マイグレーション・ウィザードを起動できます。

以下の図は、ウィザードの機能領域を示しています。



Java EE パースペクティブ中に、コネクタ・プロジェクトのコンテキスト・メニューでマイグレーション・ウィザードを起動すると、デフォルトで、依存関係にある成果物プロジェクトのすべてが選択されます。依存関係にある成果物プロジェクトを選択解除すると、そのプロジェクトはマイグレーションされません。

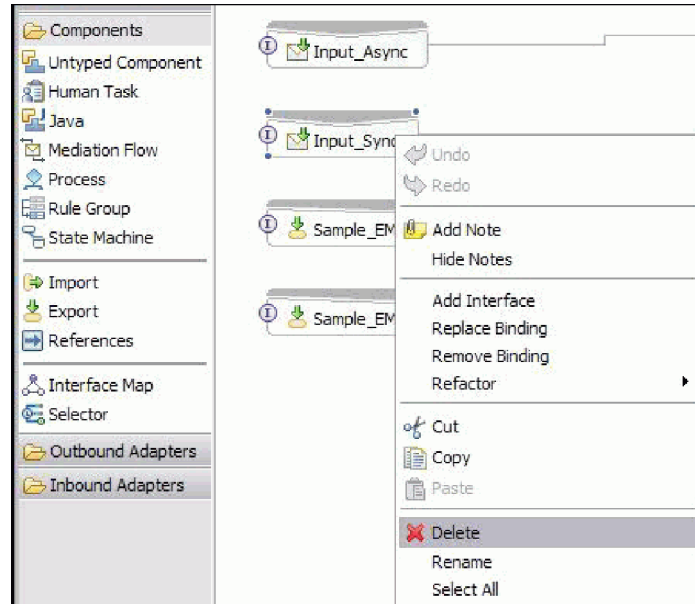
2. 「変更内容の確認」ウィンドウでは、+ 記号をクリックすると、マイグレーション中のそれぞれの成果物で発生したマイグレーション変更を確認できます。



3. 「終了」をクリックして、マイグレーションを実行します。

マイグレーション・プロセスの実行前に、ウィザードはマイグレーションの影響を受けるすべてのプロジェクトをバックアップします。プロジェクトは、ワークスペース内の一時フォルダーにバックアップされます。何かの理由でマイグレーションが失敗した場合、または完了前にマイグレーションを取り消すことにした場合、ウィザードは、変更されたプロジェクトを削除し、一時フォルダーに保管されているプロジェクトで置き換えます。

4. 「プロジェクト」>「クリーン」を選択すると、ワークスペースが最新表示されて再ビルドされ、変更が有効となります。
5. マイグレーションが正常に完了すると、バックアップされたプロジェクトはすべて削除されます。同期 Inbound フローは、アダプターで使用されないため、手動で除去してください。マイグレーションされたプロジェクトから、Input\_Sync Inbound フローを選択して右クリックし、「削除」を選択します。



6. EAR ファイルをマイグレーションしている場合は、マイグレーション済みアダプターおよび成果物のある新規の EAR ファイルを作成して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にデプロイします。EAR ファイルのエクスポートおよびデプロイについて詳しくは、70 ページの『実稼働用モジュールのデプロイ』を参照してください。

## 結果

プロジェクトは、バージョン 6.2にマイグレーションされます。アダプター・マイグレーション・ウィザードの終了後に外部サービス・ウィザードを実行する必要はありません。

## マイグレーション後のインポート・ファイル、エクスポート・ファイル、および WSDL ファイルの変更

WebSphere InterChange Server マイグレーション・ウィザードは、アプリケーション成果物を WebSphere Integration Developer に移動します。このタスクの完了時、マイグレーションされたアダプター成果物は、完全に JCA 準拠であるとは限りません。アダプター・マイグレーション・ウィザードを実行することによって、アダプター固有成果物 (サービス記述子、サービス定義、ビジネス・オブジェクトなど) の JCA 互換形式へのマイグレーションを完了させることができます。このマイグレーション・ウィザードによる変更は、サービス定義ファイル (.import、.export、および .wsdl) で反映されます。

### マイグレーション後のインポート・ファイルの変更

マイグレーション中、影響を受けるモジュール成果物がインポート・ファイルにマイグレーションされます。マイグレーション前の既存の JMS バインディング・プロパティは、インポート・ファイルでは EIS バインディング・プロパティに変更されます。インポート・ファイルに追加されたその他のプロパティ詳細情報には、データ・バインディング構成に関する情報、Managed Connection Factory プロ



パーティー内の接続情報の変更、およびいくつかの新規メソッド・バインディングが含まれます。

## マイグレーション後のエクスポート・ファイルの変更

マイグレーション中、影響を受けるモジュール成果物がエクスポート・ファイルにマイグレーションされます。マイグレーション前の既存の JMS バインディング・プロパティは、エクスポート・ファイルでは EIS バインディング・プロパティに変更されます。エクスポート・ファイルに追加されたその他のプロパティ詳細情報には、データ・バインディング構成に関する情報、Managed Connection Factory プロパティ内の接続情報の変更、およびいくつかの新規メソッド・バインディングが含まれます。

## マイグレーション後の WSDL ファイルの変更

マイグレーション中、影響を受けるモジュール成果物は、PeopleSoft 固有のサービス記述 WSDL 成果物を含む対応する WSDL ファイルにマイグレーションされます。サービス記述ファイルは JCA 互換となります。WSDL ファイルには、操作ごとに入力タイプと出力タイプがあります。Inbound 操作も Outbound 操作も、関連の特定入力タイプに機能し、操作の実行後に対応する出力タイプを作成します。

### 注:

- プロジェクト内の複数の inbound 最上位ビジネス・オブジェクトをマイグレーションする場合、最初の最上位ビジネス・オブジェクトの inbound フィーチャーのみが正常に機能します。その他の最上位ビジネス・オブジェクトの inbound を正常に機能させるには、正しい宛先サービスを呼び出されるように、Input\_Processing.java および Input\_Async\_Processing.java クラス内の「emit + [verbname] + afterimage + [business object name]」メソッドを手動で変更する必要があります。
- Inbound 処理中、動的メソッド emit が生成されます。ビジネス・オブジェクト名が emit に追加され、実際のメソッドが作成されます。emit メソッドに追加されるビジネス・オブジェクト名は、関数セクターによって決定されます。例えば、ビジネス・オブジェクト名が Customer である場合、実際のメソッド名は emitCustomer となります。Emit は、Inbound 処理時に使用可能な唯一の操作です。
- 無効または WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise でサポートされない WebSphere ビジネス・インテグレーション・アダプターのプロパティ (config など) は、マイグレーション後の成果物から除去されます。



---

## 第 3 章 サンプルおよびチュートリアル

ユーザーが、WebSphere Adapters を円滑に使用できるようにするため、「Business Process Management Samples and Tutorials」Web サイトからサンプルおよびチュートリアルが利用できます。

サンプルおよびチュートリアルには、以下のいずれかの方法でアクセスできます。

- WebSphere Integration Developer を始動すると表示される「ようこそ」ページ。WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise のサンプルおよびチュートリアルを表示するには、「取得」をクリックします。表示されたカテゴリーをブラウズして、選択を行います。
- Web 上の Business Process Management のサンプルおよびチュートリアル <http://publib.boulder.ibm.com/bpcsamp/index.html> のページ。



---

## 第 4 章 デプロイメントのためのモジュールの構成

アダプターを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus 上にデプロイできるように構成するには、WebSphere Integration Developer を使用して、アダプターをデプロイするときに EAR ファイルとしてエクスポートされるモジュールを作成します。次に、ディスカバーの対象となるビジネス・オブジェクトと、そのディスカバーを行うシステムを指定します。

---

### モジュールの構成のためのロードマップ

ランタイム環境で WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise を使用できるようにするには、まずモジュールを構成する必要があります。このタスクの概要を理解すれば、タスクを達成するのに必要な手順を実行できるようになります。

WebSphere Integration Developerを使ってアダプターのモジュールを構成して、使用できるようにします。以下の図は、構成作業の流れを示しています。また、図の後に示す手順で、この作業の概要を説明します。これらの各ステップの実行方法の詳細については、このロードマップの後に記載するトピックを参照してください。

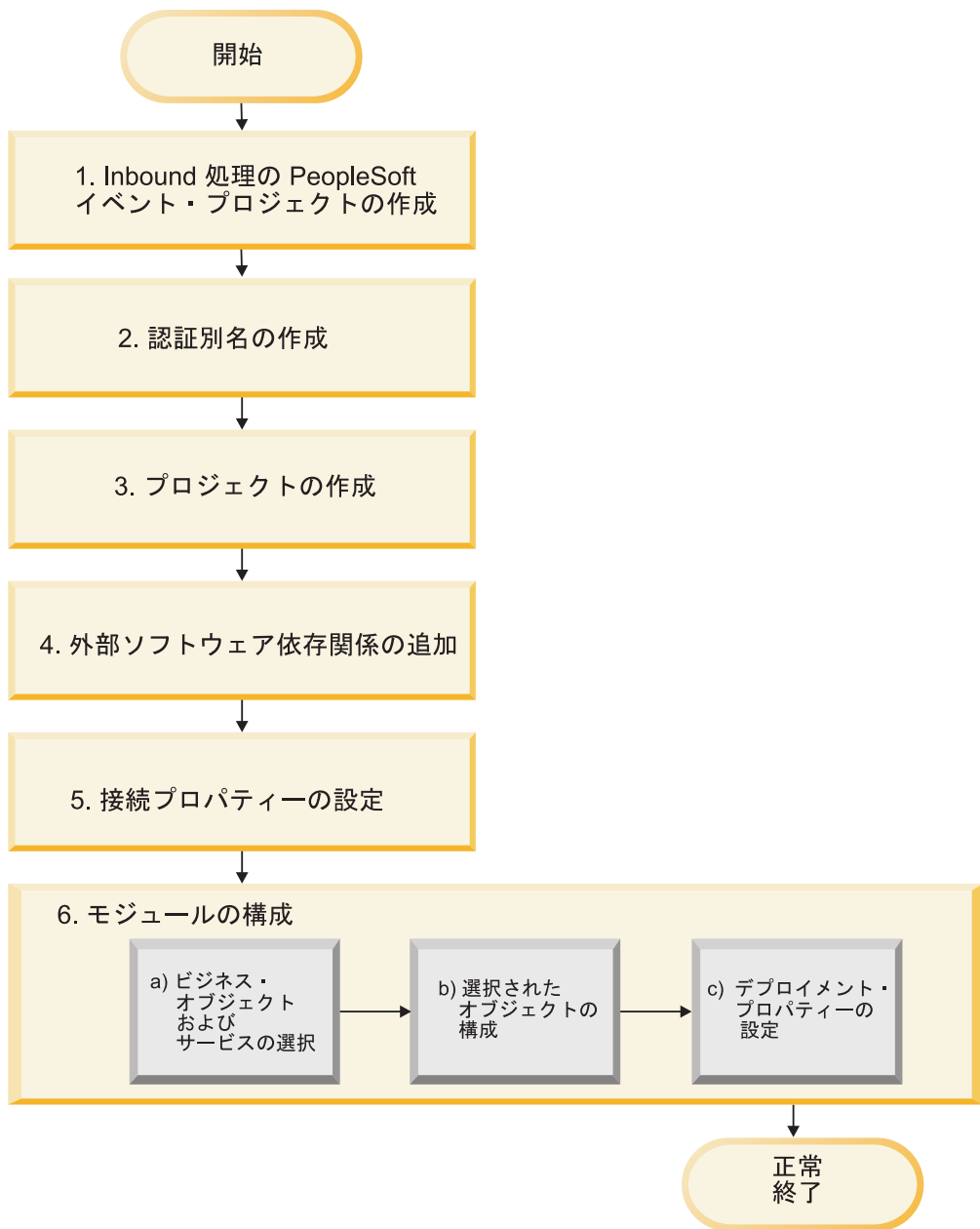


図2. モジュールの構成のためのロードマップ

### デプロイメント用のモジュールの構成

この作業は、次のステップから成ります。

1. Inbound 処理用の PeopleSoft イベント・プロジェクトを作成します。
2. 暗号化パスワードで PeopleSoft Enterprise サーバーにアクセスするための認証別名を作成します。この手順は、オプションです。パスワードおよび ID の扱いに関するポリシーに応じて実行してください。サーバーを使用して、この手順を実行してください。
3. プロジェクトを作成します。最初に外部サービス・ウィザードを WebSphere Integration Developer で始動して、モジュールの作成およびデプロイのプロセス



を開始してください。このウィザードはプロジェクトを作成します。これは、モジュールに関連付けられたファイルを編成するために使用されます。

4. WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseで必要な外部ソフトウェア依存関係をプロジェクトに追加します。モジュールを EAR ファイルとしてエクスポートし、その EAR ファイルをサーバーにデプロイする際にも、これらの依存性が必要になります。
5. 接続プロパティを設定します。これは、外部サービス・ウィザードが PeopleSoft Enterprise サーバー と接続して、オブジェクトおよびサービスをディスカバリーする際に必要となります。
6. Inbound 処理または Outbound 処理用のモジュールを外部サービス・ウィザードを使って構成し、ビジネス・オブジェクトおよびサービスを PeopleSoft Enterprise サーバーから探して選択し、ビジネス・オブジェクト定義および関連成果物を生成します。
  - a. 外部サービス・ウィザード によってディスカバリーされたビジネス・インテグレーション・コンポーネントから、Inbound 処理用または Outbound 処理用のビジネス・オブジェクトおよびサービスを選択します。
  - b. ビジネス・オブジェクトすべてに適用される操作およびその他のプロパティを指定して、選択したオブジェクトを構成します。
  - c. デプロイメント・プロパティを設定します。アダプターは、実行時にこれを使用して、PeopleSoft Enterprise サーバー に接続します。次に、サービスを生成します。外部サービス・ウィザードを使用して、新規モジュールを保存してください。ここでは、構成済みのビジネス・オブジェクト、インポート・ファイルまたはエクスポート・ファイル、およびサービス・インターフェースが含まれています。

---

## PeopleTools でのカスタム・イベント・プロジェクトの作成

非同期 Inbound イベント処理を実行する場合、アダプターは、PeopleSoft 内のイベント・プロジェクトを必要とします。カスタム・イベント・プロジェクトを作成するには、PeopleTools を使用します。

### このタスクを実行する理由および時期

環境に Inbound イベント・サポートが必要な場合、PeopleSoft のカスタム・イベント・プロジェクトを使用する必要があります。アダプターには、サンプル・イベント・プロジェクト、IBM\_EVENT\_V600 が用意されています。このサンプル・プロジェクトを変更して使用することも、PeopleTools を使用して独自のプロジェクトを作成することもできます。独自のプロジェクトを作成する場合、以下の手順で行います。

### このタスクの手順

1. PeopleTools Application Designer を使用して、新規プロジェクトを作成して命名します。

2. 以下の表で説明するような、新規プロジェクトのフィールドを作成します。

| フィールド名            | フィールドの説明  |
|-------------------|---|
| IBM_EVENT_ID      | IBM_FETCH_ID レコードから取得される数値。この値は、イベントの固有 ID です。  |
| IBM_OBJECT_NAME   | 対応するビジネス・グラフの名前。  |
| IBM_OBJECT_KEYS   | Component Interface 内の get key プロパティ名に続くキー値 (名前と値のペア)。この値は、エンタープライズ情報システム (EIS) からコンポーネントを取得するために使用されます。                  |
| IBM_EVENT_STATUS  | イベントの状況。イベントがポーリング開始可能になっている場合は、状況は 0 です。IBMPublishEvent 関数が呼び出されます。  |
| IBM_OBJECT_VERB   | 取得されたビジネス・オブジェクトを含むビジネス・オブジェクト・グラフで設定される verb。  |
| IBM_EVENT_DTTM    | イベントが作成された日付。将来の日付のイベントの場合、この値は発効日です。   |
| IBM_NEXT_EVENT_ID | レコード IBM_FETCH_ID の下で最新のイベント ID を持つフィールド。この値は、イベントが IBM_EVENT_TBL テーブルに追加されるたびに増加します。IBM_EVENT_ID フィールドは、そのテーブル内に取り込まれます。 |
| IBM_XID           | イベント送達を確実にするトランザクション ID。  |
| IBM_CONNECTOR_ID  | 特定のイベントを受け取るアダプター・インスタンスの固有 ID。   |

- IBM\_EVENT\_TBL という名前のレコードを作成し、IBM\_NEXT\_EVENT\_ID を除く作成したばかりのすべてのフィールドをこのレコードに追加します。
- IBM\_FETCH\_ID という名前のレコードを作成し、IBM\_NEXT\_EVENT\_ID フィールドのみをこのレコードに追加します。
- IBM\_FETCH\_ID レコードを開き、IBM\_NEXT\_EVENT\_ID フィールドを選択し、PeopleCode を表示して、「fieldformula」を選択します。
- 本書の「解説」セクションで見つけたカスタム・イベント・プロジェクトの PeopleCode を、作成中のプロジェクトにコピーします。
- IBM\_EVENT\_TBL レコードのレベル 0 にあるフィールドを含むプロジェクトの下にページを作成します。ページは任意の名前にできます。
- 作成したばかりのページを含むプロジェクトの下でコンポーネントを作成します。このコンポーネントは、任意の名前にできます。
- このコンポーネントに対して Component Interface を作成し、任意の名前を割り当てます。基礎となるコンポーネント定義に基づいてプロパティを使用することを確認します。
- すべての作成オプションを選択して、プロジェクト全体をビルドします。

11. Component Interface テスターを使用して、Component Interface が機能することをテストして、確認します。
12. Component Interface 用の Java API を生成し、生成されたクラスをアダプターのクラス・パスに追加します。 PeopleTools プロジェクトの作成および PeopleSoft Component Interface のテストについて詳しくは、PeopleSoft の資料を参照してください。

---

## 認証別名の作成

認証別名は、アダプターがPeopleSoft Enterprise サーバーへのアクセスに使用するパスワードを暗号化する機能です。アダプターは、アダプター・プロパティに保管されたユーザー ID とパスワードを使用する代わりに、この認証別名を使用して PeopleSoft Enterprise サーバーに接続することができます。

### 始める前に

認証別名を作成するには、管理コンソールへのアクセス権が必要です。以下の手順は、WebSphere Integration Developer を介して管理コンソールへのアクセス権を取得する方法を示しています。管理コンソールを (WebSphere Integration Developer を介さずに) 直接使用する場合は、管理コンソールにログインして、ステップ 2 に進みます。

### このタスクを実行する理由および時期

認証別名は、アダプターがPeopleSoft Enterprise サーバーへのアクセスに使用するパスワードを暗号化する機能です。認証別名を使用すると、他のユーザーから見える可能性があるアダプター構成プロパティに、パスワードを平文で格納する必要がなくなります。

認証別名を作成するには、以下の手順に従います。

### このタスクの手順

1. 管理コンソールを開始します。

WebSphere Integration Developer から 管理コンソール を開始するには、以下の手順を実行します。

- a. WebSphere Integration Developer の Business Integration パースペクティブで、「サーバー」タブをクリックします。
  - b. サーバーで「開始済み」という状況が表示されない場合は、サーバーの名前 (例えば、「WebSphere Process Server」) を右クリックして、「開始」をクリックします。
  - c. サーバーの名前を右クリックし、「管理」、さらに「管理コンソールの実行」とクリックします。
  - d. 管理コンソールにログオンします。管理コンソールにユーザー ID およびパスワードが必要な場合は、ID およびパスワードを入力して、「ログイン」をクリックします。ユーザー ID およびパスワードが不要な場合は、「ログイン」をクリックします。
2. 管理コンソールで、「セキュリティ」 → 「管理、アプリケーション、およびインフラストラクチャーの保護」をクリックします。

3. 「認証」の下の「Java 認証・承認サービス」を展開して、「J2C 認証データ」をクリックします。
4. 認証別名を作成します。
  - a. 表示された J2C 認証別名のリストで、「新規作成」をクリックします。
  - b. 「構成」タブで、「別名」フィールドに認証別名の名前を入力します。
  - c. PeopleSoft Enterprise サーバーへの接続の確立に必要なユーザー ID およびパスワードを入力します。
  - d. 別名の説明をオプションで入力します。
  - e. 「OK」をクリックします。

新規に作成された別名が表示されます。

別名のフルネームは、ノード名および指定した認証別名で構成されます。例えば、ノード widNode に ProductionServerAlias という名前で別名を作成する場合、フルネームは、widNode/ProductionServerAlias となります。このフルネームは、後続の構成ウィンドウで使用する名前です。

- f. 「保管」をクリックした後、再度「保管」をクリックします。

## 結果

アダプター・プロパティを構成する際に使用できる認証別名が作成されました。

---

## プロジェクトの作成

モジュールの作成とデプロイのプロセスを開始するには、WebSphere Integration Developer の外部サービス・ウィザードを開始します。次に、アダプターに関連したファイルの編成に使用するプロジェクトを作成します。

### 始める前に

PeopleSoft Enterprise サーバーへの接続の確立に必要な情報を収集済みであることを確認します。例えば、PeopleSoft Enterprise サーバーの名前（または IP アドレス）および PeopleSoft Enterprise サーバーへのアクセスに必要なユーザー ID およびパスワードが必要です。

### このタスクを実行する理由および時期

外部サービス・ウィザードを開始して、WebSphere Integration Developer でアダプター用のプロジェクトを作成します。既存プロジェクトが存在する場合、新規に作成するのではなく、それを選択することができます。

外部サービス・ウィザードを開始し、プロジェクトを作成するには、次の手順を実行します。

### このタスクの手順

1. 外部サービス・ウィザードを開始するには、WebSphere Integration Developer の Business Integration パースペクティブに進み、「ファイル」→「新規」→「外部サービス」の順にクリックします。

2. 「新規の外部サービス (New external service)」ウィンドウで、「**アダプター (Adapters)**」が選択済みであることを確認して、「**次へ**」をクリックします。
3. 「アダプターを選択 (Select an Adapter)」ウィンドウから、プロジェクトを作成するか、または既存プロジェクトを選択します。
  - プロジェクトを作成するには、以下の手順を実行します。
    - a. 「**IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise**」を選択し、「**次へ**」をクリックします。
    - b. 「アダプターのインポート」ウィンドウで、プロジェクトの別の名前を入力して (**CWYES\_PeopleSoft** 以外の名前を使用する場合)、サーバー (例えば **WebSphere Process Server v6.2**) を選択し、「**次へ**」をクリックします。
  - 既存のプロジェクトを選択するには、以下の手順を実行します。
    - a. 「**IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise**」を展開します。
    - b. プロジェクトを選択します。

例えば、CWYES\_PeopleSoftAdapter という名前の既存プロジェクトがある場合、「**IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise**」を展開して、そのプロジェクトを選択できます。
    - c. 「**終了**」をクリックします。

## 結果

新規プロジェクトが作成され、「ビジネス・インテグレーション」ウィンドウにリストされます。

## 次のタスク

psjoa.jar ファイルおよびその他の必須ファイルの場所を指定します。

---

## 外部ソフトウェア依存関係の追加

外部サービス・ウィザードが PeopleSoft Enterprise と通信できるようにするには、このアプリケーションから 2 つのファイルをコピーするか、または、生成する必要があります。外部サービス・ウィザードを使用して、JAR ファイルの場所を指定します。必要な JAR ファイルをプロジェクトに追加するには、ファイルがローカル・マシンにあることを確認してから、WebSphere Integration Developer を使用してファイルの場所を指定します。

### 始める前に

この作業を行うには、WebSphere Integration Developer で外部サービス・ウィザードを実行しておく必要があります。

### このタスクを実行する理由および時期

必要な 2 つの PeopleSoft 依存ファイルである PeopleSoft psjoa.jar ファイルと PeopleSoft Component Interface の JAR ファイルを追加するには、外部サービス・ウィザードの「必要なファイルおよびライブラリー (Required Files and Libraries)」ウィンドウを使用して、ファイルの場所を指定します。

### このタスクの手順

1. 「必要なファイルおよびライブラリー」ウィンドウから、「参照」をクリックしてファイルの場所を指定します。
2. 「次へ」をクリックします。

### 結果

ウィザードに、PeopleSoft サーバーとの通信に必要なファイルが用意されました。

---

## 外部サービス・ウィザードの接続プロパティの設定

外部サービス・ウィザードによる PeopleSoft Enterprise サーバーへのアクセスが可能になるように、このウィザードに接続プロパティを設定するには、SAP サーバーへのアクセスに使用するユーザー名とパスワード、およびサーバーの名前または IP アドレスなどの情報を指定します。

### 始める前に

外部依存ファイル (psjoa.jar ファイルおよび関連ファイル) を正常に追加したことを確認してください。

### このタスクを実行する理由および時期

外部サービス・ウィザードでの PeopleSoft Enterprise サーバーへの接続の確立、および関数またはデータのディスカバリーに必要な接続プロパティを指定します。

接続プロパティを指定するには、以下の手順を使用します。

### このタスクの手順

1. 「処理方向 (Processing Direction)」ウィンドウで、「**Inbound**」(データを PeopleSoft Enterprise サーバーから受信する場合) または「**Outbound**」(データを PeopleSoft Enterprise サーバーに送信する場合) を選択します。
2. 「ディスカバリー構成 (Discovery Configuration)」ウィンドウで、以下のようにして構成プロパティを指定します。
  - a. 「**ホスト名**」フィールドに、PeopleSoft Enterprise サーバーの名前 (または IP アドレス) を入力します。
  - b. 「**ポート番号**」フィールドで、PeopleSoft Enterprise サーバーにアクセスするためにアダプターが使用するポート番号を入力します。
  - c. PeopleSoft Enterprise サーバーへのアクセスに使用する名前とパスワードを入力します。

パスワードには大/小文字の区別があります。



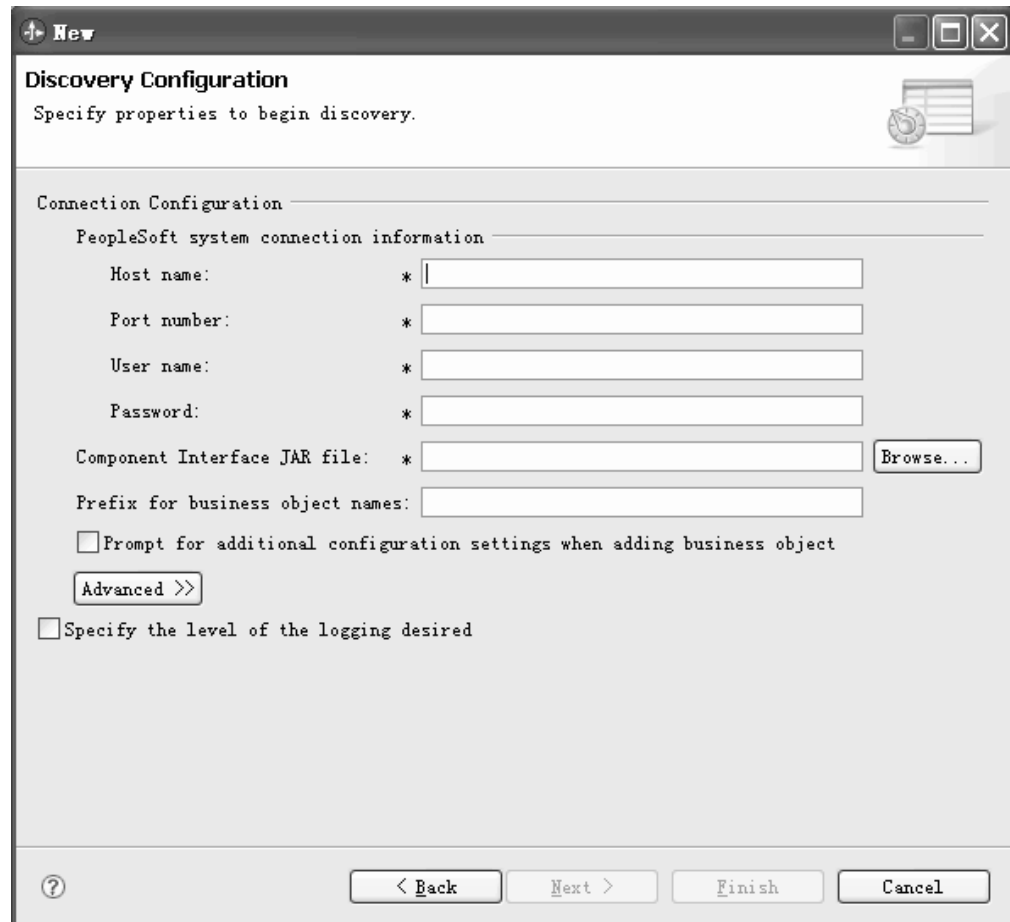


図3. 「ディスカバリー構成 (Discovery Configuration)」 ウィンドウ

- d. 「参照」をクリックして、依存ファイルとしてプロジェクトに追加した「**Component Interface JAR ファイル**」を選択します。
- e. オプションとして、このモジュールに関連付けられたすべてのオブジェクトの前に付ける接頭語を入力します。

接頭語を使用すると、同じ PeopleSoft の Component Interface に対して生成される各種のオブジェクト間で区別することができます。

- f. オプションとして、オブジェクトの生成時に、追加のメタデータを構成する場合は、「**ビジネス・オブジェクト追加時の追加の構成設定のプロンプト**」チェック・ボックスを選択します。Delete 操作および RetrieveAll 操作を使用する予定で、しかも操作で使用される有効な日付のフィールドおよび生成済みのキーがある場合、このオプションを使用します。
3. 追加の拡張プロパティ (双方向プロパティ) を設定するには、「**拡張**」をクリックします。

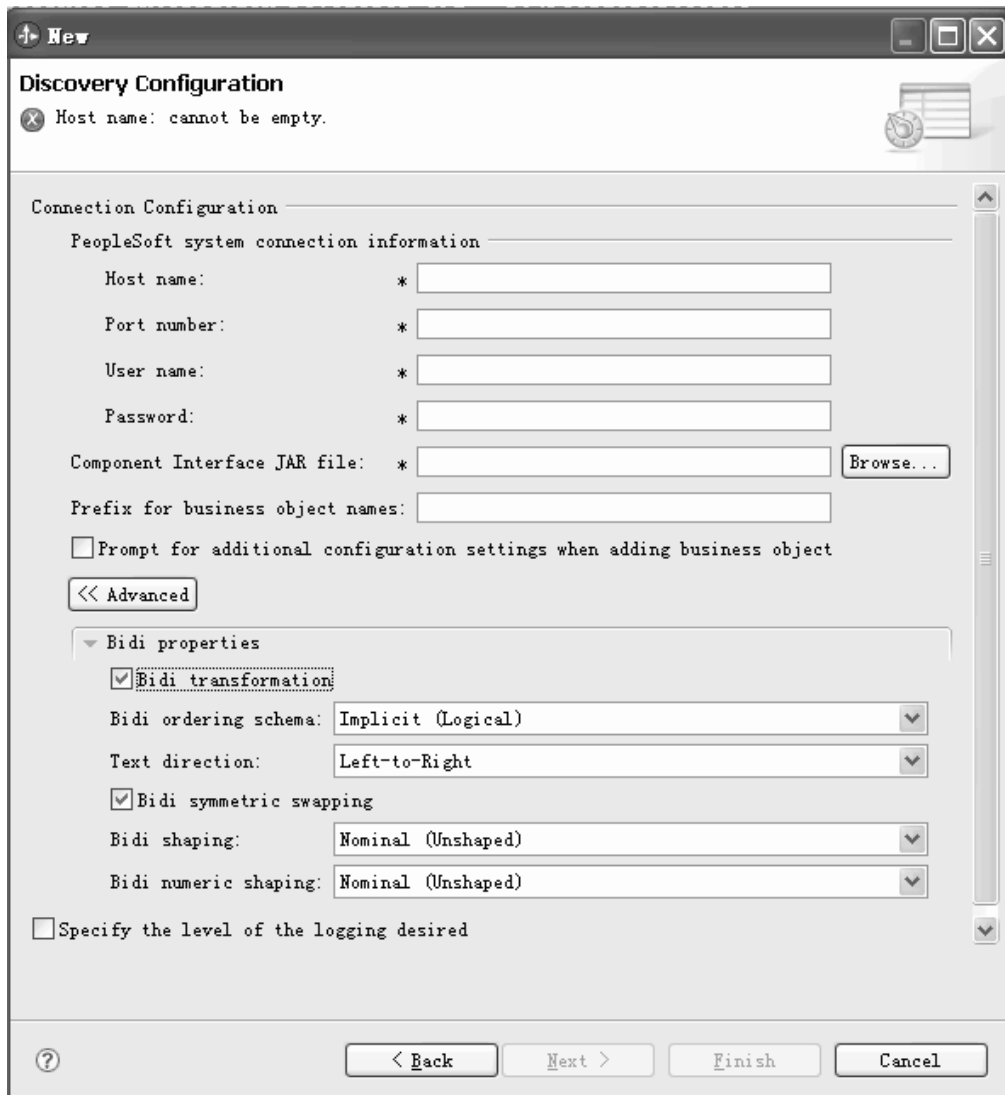


図4. 「拡張」ボタンをクリックした後の、追加の拡張プロパティ・セクションを表示する「ディスカバリー構成 (Discovery Configuration)」ウィンドウ

4. 双方向プロパティを設定する必要がある場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**BiDi プロパティ**」を展開して、「**BiDi 変換**」を選択します。
  - b. ご使用の環境のプロパティを設定します。
5. 外部サービス・ウィザード用のロギング・プロパティを設定するには、以下の手順を実行します。
  - a. 「**ウィザードのロギング・プロパティの変更 (Change logging properties for wizard)**」チェック・ボックスを選択します。
  - b. 「**参照**」をクリックして別の場所を選択することにより、ログ・ファイルの出力場所を変更します。
  - c. 「**ロギング・レベル (Logging Level)**」を設定します。

テスト環境では、「**極めて詳細 (FINEST)**」(最高レベルのロギングを実行)を選択します。実稼働環境では、ロギングのプロセスを最適化するために、「**極めて詳細 (FINEST)**」よりも低いレベルを選択します。

注: このログは、外部サービス・ウィザードだけを対象としており、アダプターの操作は対象外です。

6. 「次へ」をクリックします。

### 結果

外部サービス・ウィザードは、ログイン用に指定した情報 (ユーザー名やパスワードなど) を使用して、PeopleSoft Enterprise サーバーに接続します。「オブジェクトのディスカバリーおよび選択」ウィンドウが表示されます。

外部サービス・ウィザードによって PeopleSoft Enterprise サーバー上の関数またはデータのディスカバリーに使用される検索基準を指定します。

---

## Outbound 処理のモジュールの構成

アダプターを Outbound 処理に使用するようにモジュールを構成するには、WebSphere Integration Developer 内で外部サービス・ウィザードを使用して、PeopleSoft Enterprise サーバーからビジネス・オブジェクトおよびサービスを検出して選択し、ビジネス・オブジェクト定義および関連する成果物を生成します。

### ビジネス・オブジェクトおよびサービスの選択

インポートするオブジェクトを指定するには、外部サービス・ウィザードを使用します。

#### 始める前に

外部サービス・ウィザードの接続プロパティを設定したことを確認してください。

#### このタスクを実行する理由および時期

1 つ以上のオブジェクトを検索して、選択するには、以下の手順を使用します。

#### このタスクの手順

1. 「オブジェクトのディスカバリーおよび選択」ウィンドウで、処理するオブジェクトをクリックし、矢印をクリックしてそれを選択済みセットに移動します。

オブジェクトの子を表示するには、正符号をクリックします。

2. 「構成プロパティ (Configuration Properties)」ウィンドウで、オブジェクトの構成プロパティを指定します。(このウィンドウが使用可能なのは、「ディスカバリー構成 (Discovery Configuration)」ウィンドウで「**ビジネス・オブジェクト追加時の追加の構成設定のプロンプト (Prompt for additional configuration settings when adding business objects)**」チェック・ボックスを選択した場合のみです。)

a. 論理削除を実行するために使用するフィールド名を選択します。

b. 「**削除されたオブジェクトを示すために使用する値**」フィールドで、オブジェクトがもうアクティブでないことを示すために使用する状況値を入力します。

- c. オプション: RetrieveAll 操作時に代替キーを使用したい場合は、「追加」をクリックして、使用するキー・フィールドを選択します。
  3. オプション: 追加のパラメーターを設定するには、「拡張」をクリックします。
    - a. 「親の更新操作中にオブジェクトを保存」ボックスで、「追加」をクリックして、適用対象の子オブジェクトを選択します。
    - b. 「PeopleSoft で生成済みキーを表わすフィールド (Field that represents generated keys in PeopleSoft)」ボックスで、「追加」をクリックして、適用対象のフィールドを選択します。
    - c. 「発効日構成」セクションをクリックして、以下の発効日オプションから選択します。
      - 現在の発効日項目のみを取得: 対応する ASI は GetCurrentItem です。
      - 最も古い発効日の位置に挿入: 対応する ASI は InsAtOldestEffDtPos です。
      - 現在の発効日の位置に挿入: 対応する ASI は InsAtCurrentEffDtPos です。
      - 実効シーケンス番号を無視: 対応する ASI は IgnoreEffectiveSequence です。
      - 発効日の値を表すフィールド: 対応する ASI は EffectiveDate です。
      - 発効日シーケンスを表すフィールド: 対応する ASI は EffectiveSequence です。
- 発効日オプションについて詳しくは、103 ページの『アプリケーション固有情報』(ASI) を参照してください。
4. 「OK」をクリックして、インポートされるオブジェクトのリストにオブジェクトを追加します。
  5. すべてのオブジェクトを選択したら、「次へ」をクリックします。

## 結果

処理するオブジェクトを 1 つ以上選択しました。

## 次のタスク

「複合プロパティの構成 (Configure Composite Properties)」ウィンドウで、関連操作を追加または除去します。

## 選択されたオブジェクトの構成

ビジネス・オブジェクトを構成するには、そのオブジェクトに関する情報 (オブジェクトに関連付けられている操作など) を指定します。

### 始める前に

オブジェクトを選択してインポートしていることを確認してください。

### このタスクを実行する理由および時期

ビジネス・オブジェクトを構成するには、以下の手順を使用します。

### このタスクの手順

1. 「複合プロパティの構成 (Configure Composite Properties)」ウィンドウで、以下の情報を入力します。
  - a. サービス・インターフェースに追加されるオブジェクトに関する操作を追加または除去します。
  - b. 「**RetrieveAll 操作のレコードの最大数 (Maximum number of records for RetrieveAll operations)**」で、処理時に取得するレコードの最大数を指定します。デフォルト値は 100 です。
  - c. 名前空間を指定したくない場合は、「**ビジネス・オブジェクト Namespace**」フィールドをデフォルト値のままにしておきます。
  - d. ビジネス・オブジェクトをビジネス・グラフに含める場合は、このチェック・ボックスを選択状態にしておきます。
2. 「次へ」をクリックします。

## 結果

「オブジェクト構成プロパティのパブリッシュ (Publishing Object Configuration Properties)」ウィンドウが表示されます。

## 次のタスク

アダプターおよびビジネス・オブジェクトを組み込むモジュールを生成します。

# デプロイメント・プロパティの設定およびサービスの生成

モジュール用のビジネス・オブジェクトを選択して、構成したら、外部サービス・ウィザードを使用して、特定のエンタープライズ情報システムと接続するためにアダプターが使用するプロパティを構成できます。このウィザードは新規ビジネス・インテグレーション・モジュールを作成します。ここにすべての成果物およびプロパティ値が保管されます。

## 始める前に

ビジネス・オブジェクトが構成済みであることを確認してください。

## このタスクを実行する理由および時期

このタスクを実行するには、外部サービス・ウィザードの「サービスの生成およびデプロイメントの構成 (Service Generation and Deployment Configuration)」ウィンドウおよび「サービス・ロケーション・プロパティ (Service Location Properties)」ウィンドウを使用します。このタスクの接続プロパティは、エンタープライズ情報システムと接続するためにウィザードが使用した値に初期化されています。他の値を使用するようにモジュールを構成するには、ここで値を変更します。

## このタスクの手順

1. 名前を検討または変更するか、作成中のビジネス・オブジェクトに対し操作の説明を追加する場合、「サービスの生成およびデプロイメントの構成 (Service Generation and Deployment Configuration)」ウィンドウで「**操作の編集 (Edit Operations)**」をクリックします。以下の図は、「サービスの生成およびデプロイメントの構成 (Service Generation and Deployment Configuration)」ウィンドウ

を示しています。

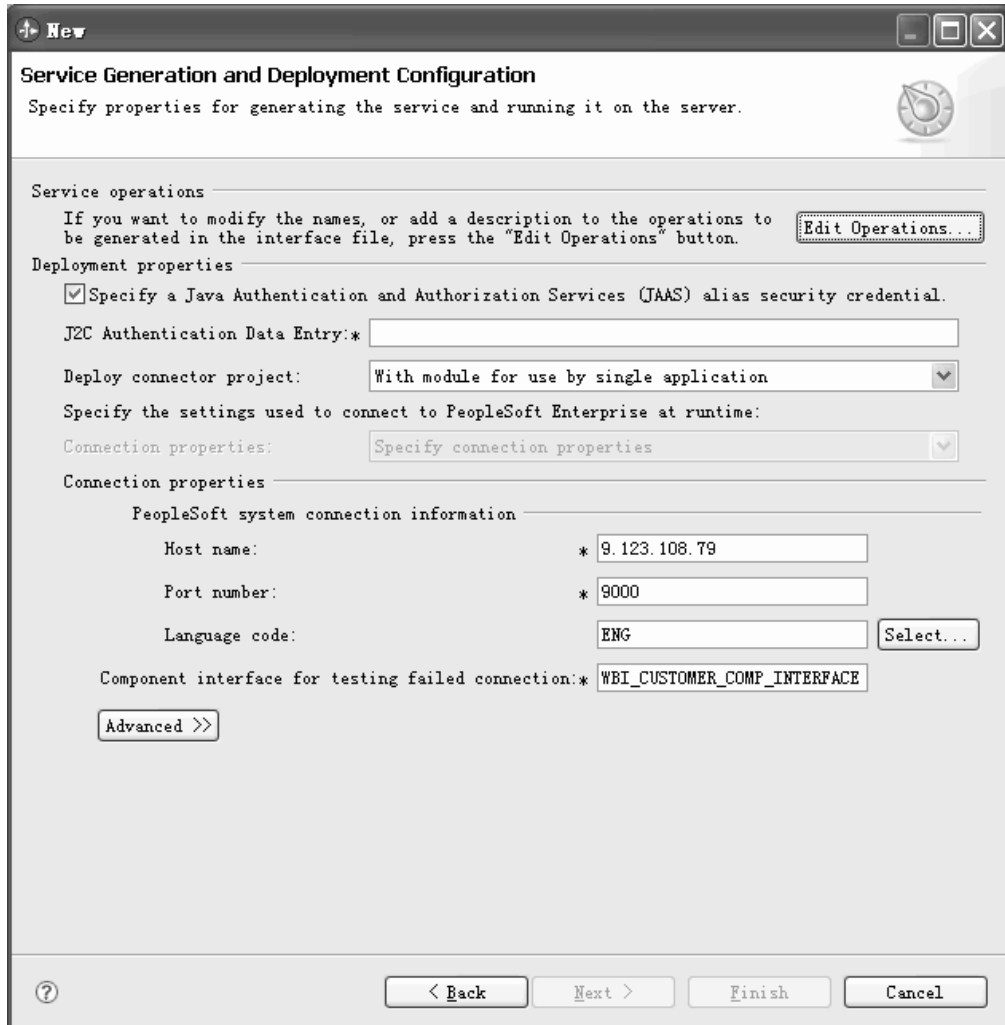


図5. 「サービスの生成およびデプロイメントの構成 (Service Generation and Deployment Configuration)」 ウィンドウ

- a. 「操作名の編集 (Edit Operations Name)」 ウィンドウで、編集する操作を選択して、「編集」をクリックします。
- b. 「プロパティの追加/編集 (Add/Edit properties)」 ウィンドウで、新しい操作名および説明を入力して、「終了」をクリックします。
2. 実行時にアダプターがユーザー名とパスワードを取得する方法を指定します。J2C 認証別名を使用するには、「Java 認証・承認サービス (JAAS) の別名のセキュリティ・クリデンシャルの指定 (Specify a Java Authentication and Authorization Services (JAAS) alias security credential)」を選択して、「J2C 認証データ項目 (J2C Authentication Data Entry)」に別名を入力します。既存の認証別名を指定するか、モジュールのデプロイ前であればいつでも認証別名を作成できます。名前は大/小文字の区別があり、ノード名を含みます。 認証別名を作成していない場合は、このフィールドを空白にしておきます。

3. 「コネクタ・プロジェクトのデプロイ」フィールドで、アダプター・ファイルをモジュールに組み込むかどうかを指定します。以下のいずれかの値を選択してください。
- 「単一アプリケーションが使用するモジュールとともにデプロイする」。アダプター・ファイルをモジュール内に組み込むと、モジュールをすべてのアプリケーション・サーバーにデプロイすることができます。組み込みアダプターを使用するのは、そのアダプターを使用するモジュールが 1 つある場合か、複数のモジュールでバージョンの異なるアダプターを実行する必要がある場合です。組み込みアダプターを使用すると、他のモジュールのアダプター・バージョンを変更することで、それらのモジュールを不安定にするリスクを生じることなく、1 つのモジュール内でアダプターをアップグレードできます。
  - 「複数アプリケーションが使用するサーバー上」。モジュール内にアダプター・ファイルを組み込まない場合は、このモジュールを実行するアプリケーション・サーバーごとにモジュールをスタンドアロン・アダプターとしてインストールする必要があります。複数のモジュールが同じバージョンのアダプターを使用可能で、アダプターを中央の場所で管理する場合は、スタンドアロン・アダプターを使用します。スタンドアロン・アダプターの場合も、複数のモジュールに対して単一のアダプター・インスタンスを実行することにより、必要なリソースが軽減されます。
4. 前のステップで「複数アプリケーションが使用するサーバー上」を選択した場合は、接続プロパティの指定方法を示します。
- サーバー上で Managed Connection Factory または活動化仕様を手動で作成して構成した場合、または同じ Managed Connection Factory または活動化仕様プロパティを使用して、同じエンタープライズ情報システムに接続するアプリケーションを既にデプロイ済みである場合、対応の Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースの名前を指定すると、Managed Connection Factory または活動化仕様を再利用できます。以下の図は、「JNDI ルックアップ名 (JNDI Lookup Name)」フィールドを示しています。
    - a. 「接続プロパティ」では、「定義済みの接続プロパティの使用 (Use predefined connection properties)」を選択します。
    - b. 「JNDI ルックアップ名 (JNDI Lookup Name)」では、既存の Managed Connection Factory または活動化仕様の JNDI データ・ソースの名前を入力します。
    - c. 「次へ」をクリックすると、このタスクが完了します。



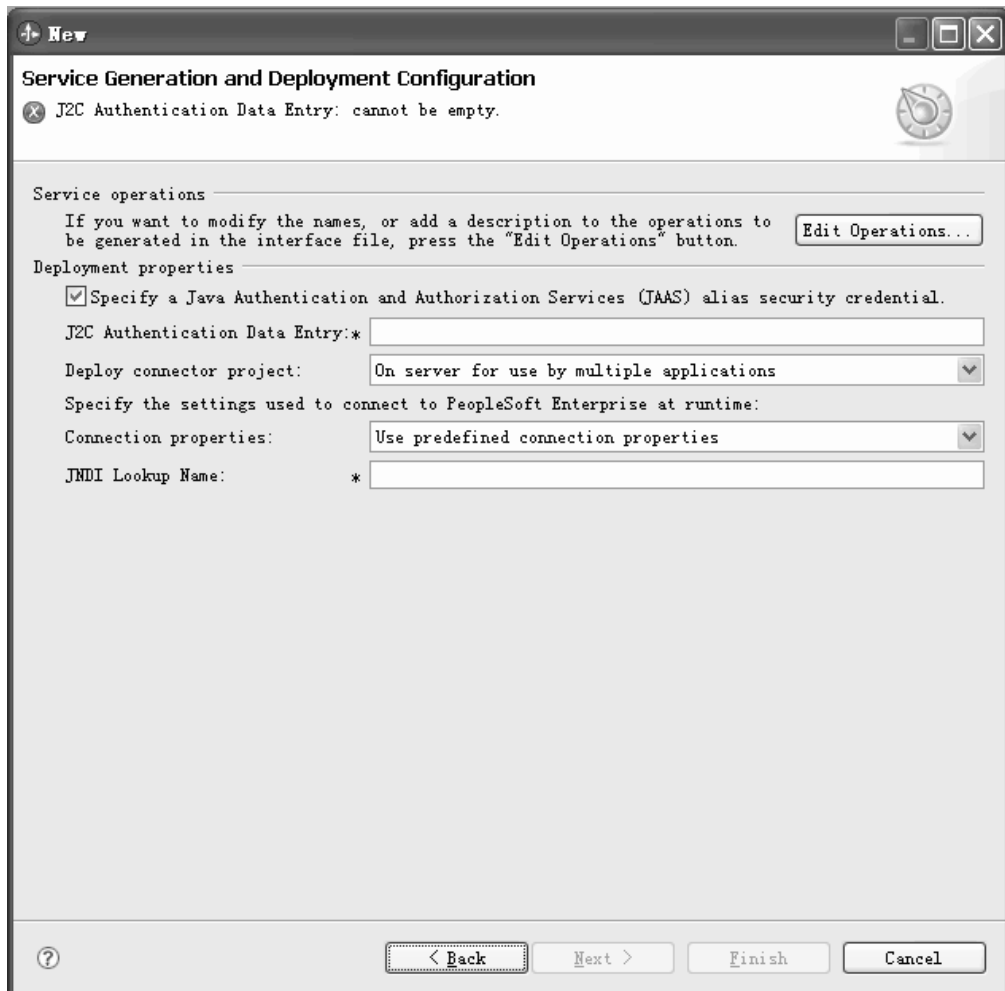


図6. JNDI ルックアップ名を指定します。

- このアプリケーションが特定のユーザー名とパスワードでエンタープライズ情報システムに接続する最初のアプリケーションである場合、またはユーザー名とパスワードをその他のアプリケーションから別個に管理する場合、「**接続プロパティの指定 (Specify connection properties)**」を選択します。
- 5. 検討し、必要であれば要求された接続プロパティの値を変更してください。「**ホスト名**」、「**ポート番号**」、および「**言語コード**」の各フィールドは、ウィザードの開始時に指定した接続情報によって初期化されています。代替のエンタープライズ情報システムに接続することもできます。ただしスキーマ名が両方で同じであることが条件です。接続プロパティの形式は、エンタープライズ情報システム固有です。プロパティについては、119 ページの『**Managed Connection Factory プロパティ**』を参照してください。
- 6. オプションとして、「**拡張**」をクリックして、該当のフィールドに新しい値を入力すると、実行時に別のユーザー名とパスワードを指定するように値を変更できます。「**ユーザー名**」フィールドと「**パスワード**」フィールドのラベルはイタリックになっています。以下の図は、「**拡張**」を選択した場合の画面を示しています。

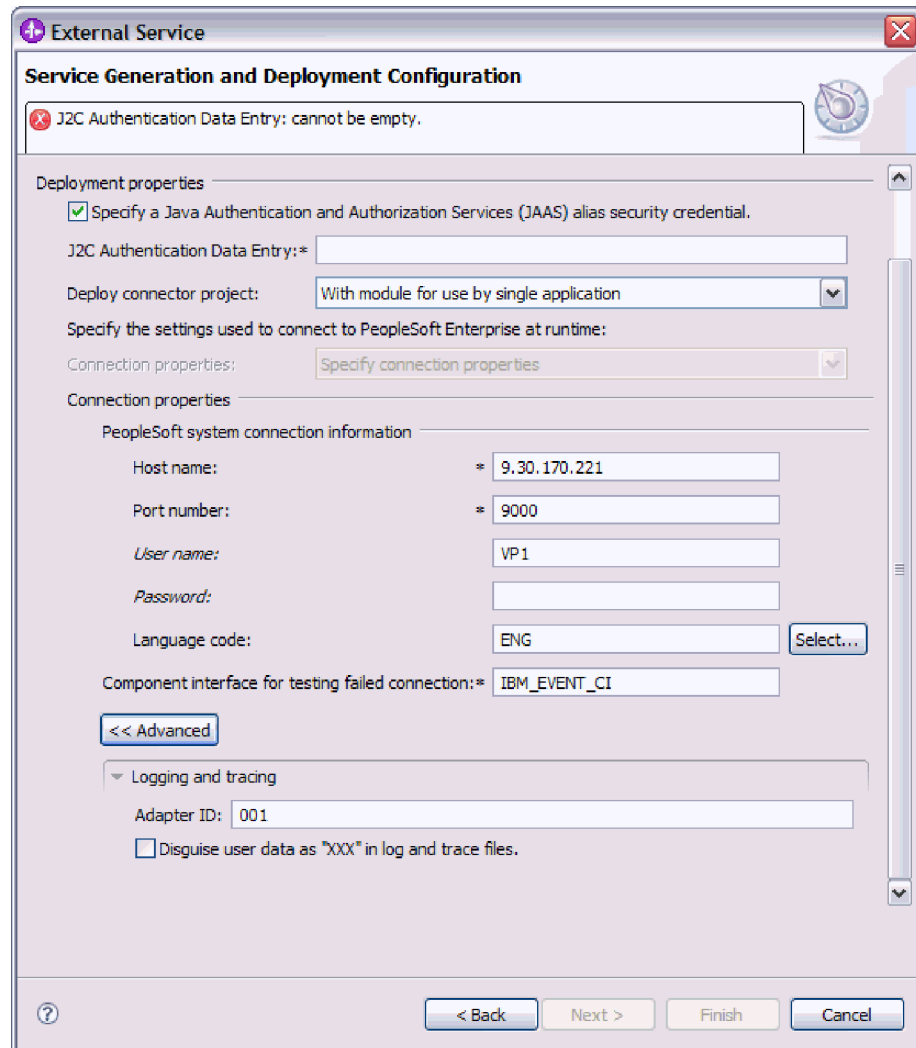


図7. 実行時に異なるユーザー名とパスワードの指定

7. 「失敗した接続をテストするための **Component Interface**」に名前を入力します。
8. 「拡張」をクリックしたら、「ロギングおよびトレース」領域に以下のように拡張オプションを指定できます。
  - アダプターの複数インスタンスがある場合、「アダプター ID」をこのインスタンスに固有な値に設定します。詳しくは、115 ページの『アダプター ID (AdapterID)』を参照してください。
  - 重要ユーザー・データがログ・ファイルおよびトレース・ファイルに書き込まれないようにする場合は、「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX...」と記述する」を選択できます。詳しくは、122 ページの『「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」と記述する」 (HideConfidentialTrace) プロパティー』を参照してください。
9. 「次へ」をクリックします。「サービス・ロケーション・プロパティー (Service Location Properties)」ウィンドウが表示されます。以下の図は、「サービス・ロケーション・プロパティー (Service Location Properties)」ウィンドウを

示しています。

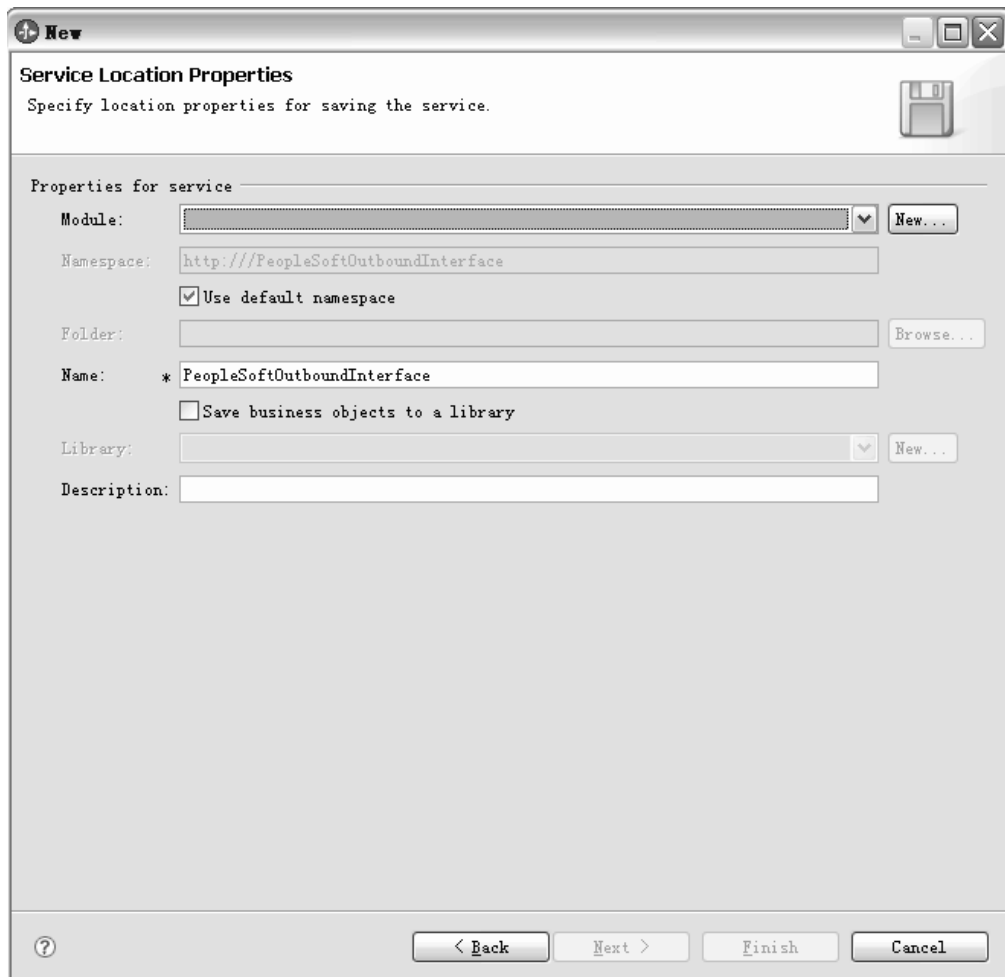


図8. 「サービス・ロケーション・プロパティ (Service Location Properties)」 ウィンドウ

10. 「サービス・ロケーション・プロパティ (Service Location Properties)」 ウィンドウで、作成するモジュールの名前を指定します。このモジュールは新規または既存のものとすることができます。

- モジュール名が「モジュール」リストに表示されている場合は、その名前を選択します。

**重要:** モジュールに現在構成中のものと同じ名前のインターフェースまたはビジネス・オブジェクトが含まれる場合、モジュール内の元のそのインターフェースまたはビジネス・オブジェクトは、新規バージョンに置き換えられます。

- それ以外は、「サービス・ロケーション・プロパティ (Service Location Properties)」で新規モジュールを作成します。
  - 「新規作成」をクリックします。
  - 「統合プロジェクト (Integration Project)」ウィンドウで、「モジュール・プロジェクトの作成 (Create a module project)」を選択し、「次へ」をクリックします。以下の図は、「統合プロジェクト (Integration Project)」

ウィンドウを示しています。

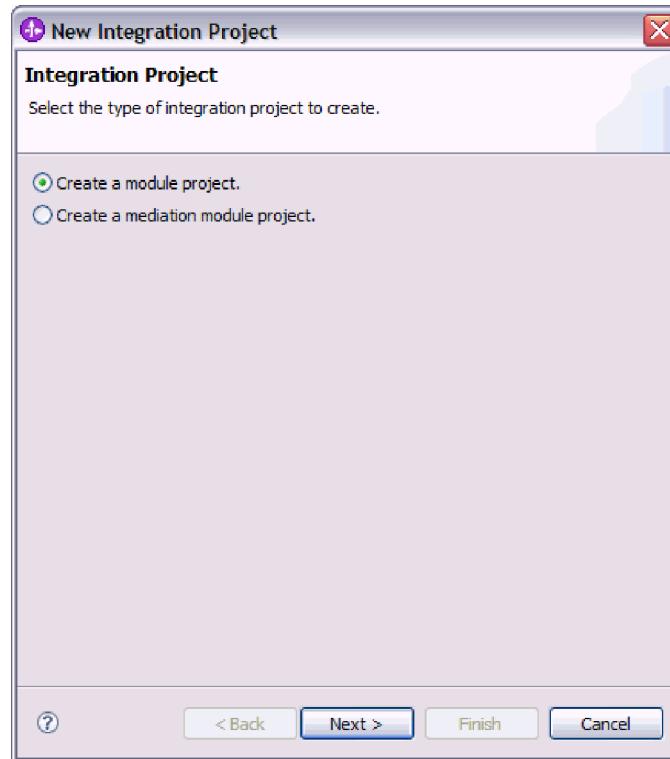


図9. 「統合プロジェクト (Integration Project)」ウィンドウでモジュール・プロジェクトを作成します。

- c. 「モジュール」ウィンドウで、モジュールの名前を入力します。例えば、PeopleSoftOutboundInterface。
  - d. サービス記述ファイル (.import ファイルおよび .wsdl ファイル) をモジュールのデフォルト・フォルダーにおく場合は、「**デフォルト・ロケーションを使用する (Use default location)**」を選択した状態のままにしておきます。モジュールの別のフォルダーを指定したい場合は、このオプションをクリアし、「参照」をクリックして別のフォルダーを「**ロケーション**」に指定します。
  - e. ウィザードを閉じる際に、モジュールを WebSphere Integration Developer のアセンブリー・ダイアグラムで自動的に開く場合、「**モジュールのアセンブリー・ダイアグラムを開く (Open module assembly diagram)**」を選択します。それ以外は、このオプションをクリアします。
  - f. 「終了」をクリックして、新規モジュールを作成します。
11. ビジネス・オブジェクトに使用する名前空間を指定します。
    - モジュール内のビジネス・オブジェクトにデフォルトの派生名前空間を使用させる場合、「**デフォルトの名前空間を使用する (Use default namespace)**」を選択状態のままにしておきます。
    - 別の名前空間を指定するには、このオプションをクリアして、「**名前空間**」に別の値を入力します。
  12. オプションとして、新規モジュール内でサービス記述が保管されるフォルダーを指定します。「**フォルダー**」で、フォルダー名を入力するか、既存のフォル

ダーを参照します。フォルダー名を指定しない場合、成果物 (インポート・ファイル、XSD ファイル、および WSDL ファイル) は、モジュールのルート・フォルダー (つまりモジュール名を持つフォルダー) に保管されます。

13. 「名前」で、デフォルトのインポート名をそのまま使用するか、別の名前を入力します。
14. オプションとして、ビジネス・オブジェクトを他のモジュールが使用できるライブラリーに保存する場合、「**ビジネス・オブジェクトをライブラリーに保存 (Save business objects to a library)**」を選択して、ライブラリーの場所を「**ライブラリー**」に指定できます。
15. オプションとして、モジュールに関する説明を「**説明**」に入力できます。
16. プロパティの設定を完了したら、「**終了**」をクリックします。
17. 「**変更されたモデル (Model Changed)**」ウィンドウが表示された場合は、「**はい**」をクリックします。

## 結果

ウィザードが終了します。モジュールがプロジェクトに作成され、成果物が生成されます。

## 次のタスク

場合によって、アセンブリ・エディターを使用して、構成を完了する必要があります。その後、モジュールをテストまたはデプロイできます。

---

## Inbound 処理のモジュールの構成

アダプターを Inbound 処理に使用するようにモジュールを構成するには、WebSphere Integration Developer 内で 外部サービス・ウィザードを使用して、PeopleSoft Enterprise サーバーからビジネス・オブジェクトおよびサービスを検出して選択し、ビジネス・オブジェクト定義および関連する成果物を生成します。

## ビジネス・オブジェクトおよびサービスの選択

処理するオブジェクトを指定するには、外部サービス・ウィザードを使用します。

### 始める前に

外部サービス・ウィザードの接続プロパティを設定したことを確認してください。

### このタスクを実行する理由および時期

1 つ以上のオブジェクトを検索して、選択するには、以下の手順を使用します。

### このタスクの手順

1. 「オブジェクトのディスカバリーおよび選択」ウィンドウで、処理するオブジェクトをクリックまたは展開します。
2. 「構成パラメーター (Configuration Parameters)」ウィンドウで、オブジェクトの構成プロパティを指定します。(このウィンドウが使用可能なのは、「ディスカバリー構成 (Discovery Configuration)」ウィンドウで「**ビジネス・オブジェク**

ト追加時の追加の構成設定のプロンプト (Prompt for additional configuration settings when adding business objects)」ボックスを選択した場合のみです。)

- a. 論理削除を実行するために使用するフィールド名を選択します。
  - b. 「削除されたオブジェクトを示すために使用する値」フィールドで、オブジェクトがもうアクティブでないことを示すために使用する状況値を入力します。
  - c. オプション: RetrieveAll 操作時に代替キーを使用したい場合は、「追加」をクリックして、使用するキー・フィールドを選択します。
3. オプション: 追加のパラメーターを設定するには、「拡張」をクリックします。
- a. 「親の更新操作中にオブジェクトを保存」ボックスで、「追加」をクリックして、適用対象の子オブジェクトを選択します。
  - b. 「PeopleSoft で生成済みキーを表わすフィールド (Fields that represents generated keys in PeopleSoft)」ボックスで、「追加」をクリックして、適用対象のフィールドを選択します。
  - c. 「発効日構成」セクションをクリックして、以下の発効日オプションから選択します。
    - 現在の発効日項目のみを取得: 対応する ASI は GetCurrentItem です。
    - 最も古い発効日の位置に挿入: 対応する ASI は InsAtOldestEffDtPos です。
    - 現在の発効日の位置に挿入: 対応する ASI は InsAtCurrentEffDtPos です。
    - 実効シーケンス番号を無視: 対応する ASI は IgnoreEffectiveSequence です。
    - 発効日の値を表すフィールド: 対応する ASI は EffectiveDate です。
    - 発効日シーケンスを表すフィールド: 対応する ASI は EffectiveSequence です。
- 発効日オプションについて詳しくは、103 ページの『アプリケーション固有情報』(ASI) を参照してください。
4. 「OK」をクリックします。
  5. 「次へ」をクリックします。

## 結果

処理するオブジェクトを 1 つ以上選択しました。

## 次のタスク

「構成オブジェクト (Configure Objects)」ウィンドウで、関連操作を追加または除去します。

## 選択されたオブジェクトの構成

ビジネス・オブジェクトを構成するには、そのオブジェクトに関する情報 (オブジェクトに関連付けられている操作など) を指定します。

## 始める前に

オブジェクトを選択してインポートしていることを確認してください。

## このタスクを実行する理由および時期

ビジネス・オブジェクトを構成するには、以下の手順を使用します。

### このタスクの手順

1. 「構成オブジェクト (Configure Objects)」ウィンドウで、以下の情報を入力します。
  - a. サービス・インターフェースに追加されるオブジェクトに関する操作を追加または除去します。
  - b. 名前空間を指定したくない場合は、「**ビジネス・オブジェクト Namespace**」フィールドをデフォルト値のままにしておきます。
  - c. 生成されたビジネス・オブジェクトが保管されるディレクトリー・ロケーションを入力します。
  - d. ビジネス・オブジェクトをビジネス・グラフに含める場合は、このチェック・ボックスを選択状態にしておきます。
2. 「次へ」をクリックします。

### 結果

「オブジェクト構成プロパティのパブリッシュ (Publishing Object Configuration Properties)」ウィンドウが表示されます。

### 次のタスク

アダプターおよびビジネス・オブジェクトを組み込むモジュールを生成します。

## デプロイメント・プロパティの設定およびサービスの生成

モジュール用のビジネス・オブジェクトを選択して、構成したら、外部サービス・ウィザードを使用して、特定のエンタープライズ情報システムと接続するためにアダプターが使用するプロパティを構成できます。このウィザードは新規ビジネス・インテグレーション・モジュールを作成します。ここにすべての成果物およびプロパティ値が保管されます。

### 始める前に

ビジネス・オブジェクトが構成済みであることを確認してください。

## このタスクを実行する理由および時期

このタスクを実行するには、外部サービス・ウィザードの「サービスの生成およびデプロイメントの構成 (Service Generation and Deployment Configuration)」ウィンドウおよび「サービス・ロケーション・プロパティ (Service Location Properties)」ウィンドウを使用します。このタスクの接続プロパティは、エンタープライズ情報システムと接続するためにウィザードが使用した値に初期化されています。他の値を使用するようにモジュールを構成するには、ここで値を変更します。

### このタスクの手順

1. 名前を検討または変更するか、作成中のビジネス・オブジェクトに対し操作の説明を追加する場合、「サービスの生成およびデプロイメントの構成 (Service



Generation and Deployment Configuration)」 ウィンドウで「操作の編集 (Edit Operations)」をクリックします。

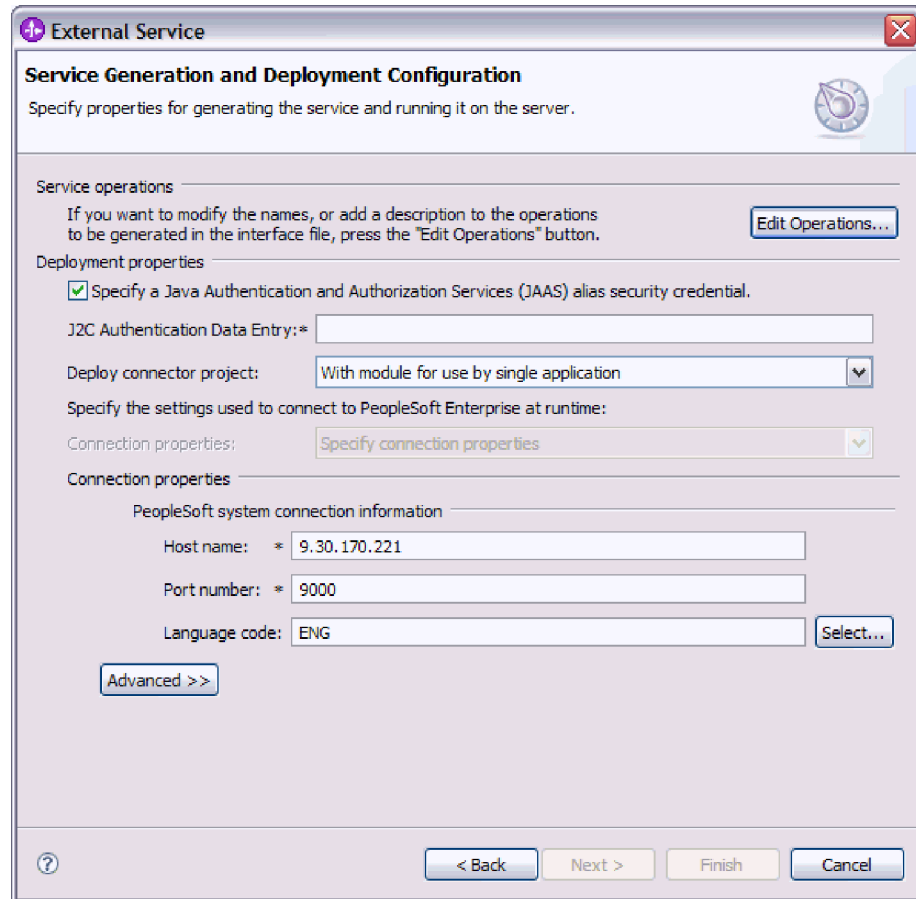


図 10. 「サービスの生成およびデプロイメントの構成 (Service Generation and Deployment Configuration)」 ウィンドウ

- a. 「操作名の編集 (Edit Operations Name)」 ウィンドウで、編集する操作を選択して、「編集」をクリックします。
- b. 「プロパティの追加/編集 (Add/Edit properties)」 ウィンドウで、新しい操作名および説明を入力して、「終了」をクリックします。
2. 実行時にアダプターがユーザー名とパスワードを取得する方法を指定します。J2C 認証別名を使用するには、「Java 認証・承認サービス (JAAS) の別名のセキュリティ・クリデンシャルの指定 (Specify a Java Authentication and Authorization Services (JAAS) alias security credential)」を選択して、「J2C 認証データ項目 (J2C Authentication Data Entry)」に別名を入力します。既存の認証別名を指定するか、モジュールのデプロイ前であればいつでも認証別名を作成できます。名前は大/小文字の区別があり、ノード名を含みます。認証別名を作成していない場合は、このフィールドを空白にしておきます。
3. 「コネクタ・プロジェクトのデプロイ」 フィールドで、アダプター・ファイルをモジュールに組み込むかどうかを指定します。以下のいずれかの値を選択してください。
  - 「単一アプリケーションが使用するモジュールとともにデプロイする」。アダプター・ファイルをモジュール内に組み込むと、モジュールをすべてのアプ

リケーション・サーバーにデプロイすることができます。組み込みアダプターを使用するのは、そのアダプターを使用するモジュールが 1 つある場合か、複数のモジュールでバージョンの異なるアダプターを実行する必要がある場合です。組み込みアダプターを使用すると、他のモジュールのアダプター・バージョンを変更することで、それらのモジュールを不安定にするリスクを生じることなく、1 つのモジュール内でアダプターをアップグレードできます。

- 「**複数アプリケーションが使用するサーバー上**」。モジュール内にアダプター・ファイルを組み込まない場合は、このモジュールを実行するアプリケーション・サーバーごとにモジュールをスタンドアロン・アダプターとしてインストールする必要があります。複数のモジュールが同じバージョンのアダプターを使用可能で、アダプターを中央の場所で管理する場合は、スタンドアロン・アダプターを使用します。スタンドアロン・アダプターの場合も、複数のモジュールに対して単一のアダプター・インスタンスを実行することにより、必要なリソースが軽減されます。
4. 前のステップで「**複数アプリケーションが使用するサーバー上**」を選択した場合は、接続プロパティの指定方法を示します。
- サーバー上で Managed Connection Factory または活動化仕様を手動で作成して構成した場合、または同じ Managed Connection Factory または活動化仕様プロパティを使用して、同じエンタープライズ情報システムに接続するアプリケーションを既にデプロイ済みである場合、対応の Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースの名前を指定すると、Managed Connection Factory または活動化仕様を再利用できます。以下の図は、「**JNDI ルックアップ名 (JNDI Lookup Name)**」フィールドを示しています。
    - a. 「**接続プロパティ**」では、「**定義済みの接続プロパティの使用 (Use predefined connection properties)**」を選択します。
    - b. 「**JNDI ルックアップ名 (JNDI Lookup Name)**」では、既存の Managed Connection Factory または活動化仕様の JNDI データ・ソースの名前を入力します。
    - c. 「**次へ**」をクリックすると、このタスクが完了します。
  - このアプリケーションが特定のユーザー名とパスワードでエンタープライズ情報システムに接続する最初のアプリケーションである場合、またはユーザー名とパスワードをその他のアプリケーションから別個に管理する場合、「**接続プロパティの指定 (Specify connection properties)**」を選択します。
5. 検討し、必要であれば要求された接続プロパティの値を変更してください。「**ホスト名**」、「**ポート番号**」、および「**言語コード**」の各フィールドは、ウィザードの開始時に指定した接続情報によって初期化されています。代替のエンタープライズ情報システムに接続することもできます。ただしスキーマ名が両方で同じであることが条件です。接続プロパティの形式は、エンタープライズ情報システム固有です。プロパティについて詳しくは、119 ページの『Managed Connection Factory プロパティ』を参照してください。
6. オプションとして、「**拡張**」をクリックして、該当のフィールドに新しい値を入力すると、実行時に別のユーザー名とパスワードが指定されるように値を変更できます。「**ユーザー名**」フィールドと「**パスワード**」フィールドのラベルはイタリックになっています。以下の図は、「**拡張**」を選択した場合の画面を示しています。

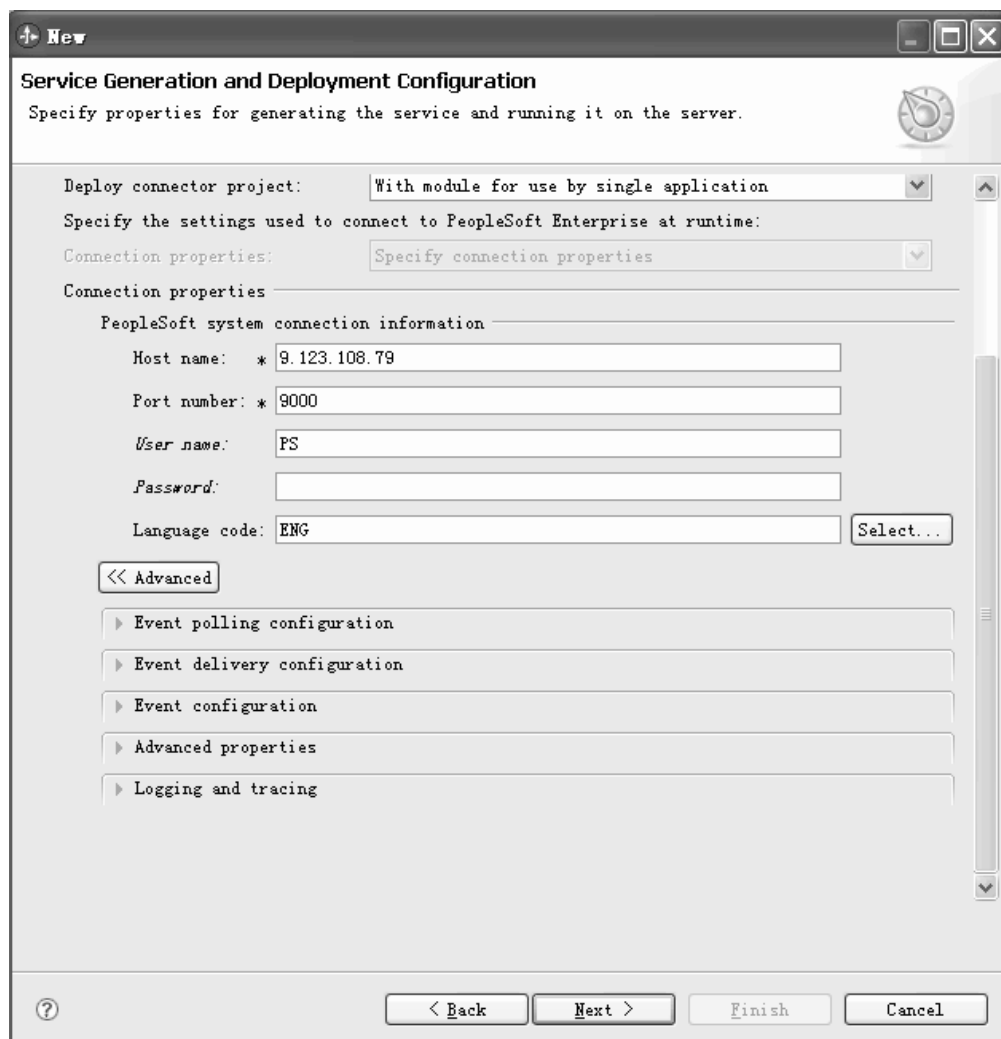


図 11. 実行時のユーザー名とパスワードの変更

7. 「拡張」の下の次の各領域を展開すると、追加フィールドを開くことができます。
- イベント・ポーリング構成
  - イベント送達構成
  - イベント構成
  - 拡張プロパティー
  - ログイングおよびトレース・プロパティー

図 12. Inbound 処理の拡張オプション

### ・ イベント・ポーリング構成

- a. 「ポーリング期間の間隔」では、ポーリング期間間でアダプターが待機するミリ秒数を入力します。詳しくは、141 ページの『ポーリング期間の間隔 (ポーリング間隔)』を参照してください。
- b. 「ポーリング期間内の最大イベント数」では、ポーリング期間ごとに送達するイベントの数を入力します。詳しくは、142 ページの『ポーリング期間内の最大イベント数 (ポーリング数量)』を参照してください。
- c. 「接続が失敗した場合の再試行間隔」では、ポーリング時に接続が失敗した後で、接続を試みるまで待機するミリ秒数を入力します。詳しくは、143 ページの『接続が失敗した場合の再試行間隔 (RetryInterval)』を参照してください。

- d. 「システム接続を再試行する回数」では、ポーリング・エラーを報告するまでに接続を再試行する回数を入力します。詳しくは、142 ページの『システム接続を再試行する回数 (RetryLimit)』を参照してください。
- e. ポーリング・エラーが発生した場合に、アダプターを停止したければ、「**ポーリング時にエラーが検出された場合にアダプターを停止する**」を選択します。このオプションを選択しないと、アダプターは例外をログに記録し、実行を続けます。詳しくは、143 ページの『ポーリング時にエラーが検出された場合はアダプターを停止する (StopPollingOnError)』を参照してください。
- f. オプションとして、開始時に失敗した接続をアダプターに再試行させたい場合に、「**開始時に EIS 接続を再試行する**」を選択できます。詳しくは、142 ページの『開始時に EIS 接続を再試行する (RetryConnectionOnStartup)』を参照してください。

- **イベント送達構成**

- a. 「**送達のタイプ**」では、送達方法を選択します。この方法については、138 ページの『送達のタイプ (DeliveryType)』を参照してください。
- b. イベントが 1 回のみ、1 つのエクスポートにのみ、確実に送達されるようにするには、「**送信は 1 回のみ (Ensure once-only delivery)**」を選択します。このオプションではパフォーマンスが低下する可能性があります、イベント送達の重複や欠落することはありません。詳しくは、136 ページの『イベント送達は 1 回のみ (AssuredOnceDelivery)』を参照してください。
- c. デフォルトでは、アダプターはポーリング時に検出したすべてのイベントを処理します。現在時刻より後のタイム・スタンプを持つイベントを処理しないようにする場合は、「**将来のタイム・スタンプを持つイベントを処理しない**」チェック・ボックスを選択します。詳しくは、139 ページの『将来のタイム・スタンプを持つイベントを処理しない (FilterFutureEvents)』を参照してください。
- d. 「**処理するイベント・タイプ**」では、送達されるイベントに関連するビジネス・オブジェクトのコンマで区切られたリストを入力します。すべてのビジネス・オブジェクト・タイプでイベントを受信する場合は、このフィールドを空白にしておきます。

例えば、他のテーブルではなく、Customer および Order テーブルがエンタープライズ情報システムで変更された場合にのみイベントを受信したい場合は、このフィールドを Customer,Order に設定します。

詳しくは、139 ページの『処理するイベント・タイプ (EventTypeFilter)』を参照してください。

- e. 「**イベント・フィルター用のアダプター・インスタンス**」では、このアダプター・インスタンスがイベント・ストア内の特定のイベントを処理するかどうかを決定するストリング値を入力します。詳しくは、135 ページの『イベント・フィルターのアダプター・インスタンス (AdapterInstanceEventFilter)』を参照してください。
- f. 「**イベントを送達するための接続数**」の下では、イベント送達のために使用する接続の最小数と最大数を指定します。詳しくは、141 ページの『最

小接続数 (Minimum connections) (MinimumConnections)』および 140 ページの『最大接続数 (Maximum connections) (MaximumConnections)』を参照してください。

- イベント構成

- a. 「イベント・ストアの **Component Interface 名**」では、イベント通知用にアダプターが使用する Component Interface を指定します。詳しくは、137 ページの『イベント通知用の Component Interface 名 (EventCIName)』を参照してください。
- b. 「イベント・ストアのキーの区切り文字」では、イベント・テーブル内のオブジェクト・キーの名前と値を指定します。詳しくは、138 ページの『イベント・ストアのキーの区切り文字 (EventKeyDelimiter)』を参照してください。
- c. 「イベント・タイム・スタンプの **Java 日付形式**」では、イベント・タイム・スタンプを作成するために使用される形式を指定します。詳しくは、140 ページの『イベント・タイム・スタンプ用の Java 日付形式 (DateFormat)』を参照してください。

- 拡張プロパティ

「失敗した接続をテストするための **Component Interface**」では、インターフェースの名前を入力します。詳しくは、137 ページの『失敗した接続をテストするための Component Interface (PingCompInterface)』を参照してください。

- ロギングおよびトレース・プロパティ

- a. アダプターの複数インスタンスがある場合、「アダプター ID」をこのインスタンスに固有な値に設定します。詳しくは、115 ページの『アダプター ID (AdapterID)』を参照してください。
  - b. 重要ユーザー・データがログ・ファイルおよびトレース・ファイルに書き込まないようにする場合は、「**ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX...」と記述する**」を選択します。詳しくは、122 ページの『「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」と記述する」 (HideConfidentialTrace) プロパティ』を参照してください。
8. 「次へ」をクリックします。「サービス・ロケーション・プロパティ (Service Location Properties)」ウィンドウが表示されます。
  9. 「サービス・ロケーション・プロパティ (Service Location Properties)」ウィンドウで、新規モジュールを作成します。
    - a. 「**モジュール (Module)**」フィールドで「**新規作成**」をクリックします。
    - b. 「**統合プロジェクト (Integration Project)**」ウィンドウで、「**モジュール・プロジェクトの作成 (Create a module project)**」または「**メディエーション・モジュール・プロジェクトの作成 (Create a mediation module project)**」を選択して、「次へ」をクリックします。
    - c. 「**新規モジュール (New Module)**」ウィンドウで、モジュールの名前を入力します。
    - d. アセンブリー・ダイアグラムでモジュールを開くか (モジュール・プロジェクトの場合)、またはメディエーション・フロー・コンポーネントを作成する

か (メディエーション・モジュール・プロジェクトの場合) を指定します。デフォルトでは、これらの選択項目は選択されています。

- e. 「終了」をクリックします。新しいモジュールが作成されます。作成プロセスが完了すると、「新規モジュール (New Module)」ウィンドウが閉じて、新規モジュールが「サービス・ロケーション・プロパティ (Service Location Properties)」ウィンドウの「モジュール」リストに表示されます。

## 結果

Business Integration パースペクティブに、新しいモジュールが追加されます。

## 次のタスク

配置のための EAR ファイルとしてモジュールをエクスポートします。





---

## 第 5 章 アセンブリー・エディターを使用した対話仕様プロパティの変更

サービスの生成後にアダプター・モジュールの対話仕様プロパティを変更するには、WebSphere Integration Developer のアセンブリー・エディターを使用します。

### 始める前に

アダプターに対してサービスを生成するには、あらかじめ外部サービス・ウィザードを使用しておく必要があります。

### このタスクを実行する理由および時期

アダプターのサービスを生成後に、対話仕様プロパティの変更が必要になる場合があります。対話仕様プロパティはオプションですが、特定のビジネス・オブジェクトの特定の操作に対して、メソッド・レベルで設定されます。指定した値は、外部サービス・ウィザードによって生成されるすべての親ビジネス・オブジェクトのデフォルトとして表示されます。これらのプロパティは、EAR ファイルをエクスポートする前に変更できます。アプリケーションをデプロイした後にこれらのプロパティを変更することはできません。

対話仕様プロパティを変更するには、以下の手順を実行します。

### このタスクの手順

1. WebSphere Integration Developerの Business Integration パースペクティブで、モジュール名を展開します。
2. 「アセンブリー・ダイアグラム」を展開して、インターフェースをダブルクリックします。
3. アセンブリー・エディターでインターフェースをクリックします。(追加のクリックをしない限り、モジュールのプロパティが表示されています。)
4. 「プロパティ」タブをクリックします。(ダイアグラム内でインターフェースを右クリックし、「プロパティを表示」をクリックすることもできます。)
5. 「バインディング」で、「メソッド・バインディング」をクリックします。インターフェースのメソッドが、ビジネス・オブジェクトと操作の組み合わせごとに 1 つずつ表示されます。
6. 変更する対話仕様プロパティを持つメソッドを選択します。
7. 「汎用」タブでプロパティを変更します。変更する対話仕様プロパティを持つメソッドごとにこの手順を繰り返します。

### 結果

アダプター・モジュールに関連付けられている対話仕様プロパティが変更されました。

### 次のタスク

モジュールをデプロイします。

---

## 第 6 章 モジュールのデプロイ

モジュールをデプロイし、モジュールおよびアダプターを構成するファイルを、実稼働またはテストのための動作環境に配置します。WebSphere Integration Developer では、統合テスト環境は、インストール時に選択したテスト環境プロファイルに応じて、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus、あるいはその両方に対する実行時サポート機能を備えています。

---

### デプロイメント環境

モジュールおよびアダプターのデプロイ先には、テスト環境と実稼働環境があります。

WebSphere Integration Developer では、モジュールをテスト環境内の 1 つ以上のサーバーにデプロイできます。通常は、これがビジネス・インテグレーション・モジュールの実行およびテストを行うための最も一般的な手法です。ただし、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus 上で管理コンソールまたはコマンド行ツールを使用して、サーバーへのデプロイメント用のモジュールを EAR ファイルとしてエクスポートすることもできます。

---

### テスト用のモジュールのデプロイ

WebSphere Integration Developer では、組み込みアダプターを内蔵するモジュールをテスト環境にデプロイし、サーバー構成の編集、サーバーの始動および停止、モジュール・コードのテストによるエラー有無の確認などの作業を実行できるサーバー・ツールと連携できます。テストは通常、コンポーネントのインターフェース操作について実行されますが、このテストを実行すると、コンポーネントが正しく実装され、参照先が正しく接続されているかどうかを判断できます。

このタスクを実行する理由および時期

#### 外部依存関係の追加

依存関係のある JAR は、ライブラリー・ディレクトリーに追加するか、または EAR にパッケージ化する必要があります。

このタスクを実行する理由および時期

JAR は、クラス・パスに設定され、これら依存関係のあるライブラリーは、モジュールのデプロイ時に、ランタイムに使用できるようにする必要があります。依存関係のあるライブラリーを使用可能にする方法には、スタンドアロン・デプロイメントまたは組み込みデプロイメントのいずれの場合にも対応する方法と、組み込みデプロイメントのみに対応する方法の 2 つの方法があります。

## サーバーでの外部ソフトウェア依存関係の追加

アダプターが PeopleSoft Enterprise サーバーと通信するには、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus サーバーに特定の JAR ファイルがインストールされている必要があります。

### このタスクを実行する理由および時期

PeopleSoft Enterprise サーバーが WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus と同じコンピューター・システム上にインストールされている場合は、この作業を実行する必要はありません。ファイルは、アダプターに既に使用可能になっています。

### このタスクの手順

1. PeopleSoft サーバーがインストールされているワークステーションから psjoa.jar 依存 JAR ファイルを取得し、PeopleSoft ツールを使用して Component Interface 用のその他の Java API JAR ファイルを生成します。使用する PeopleSoft Enterprise のバージョンによっては、ソフトウェア依存関係が異なります。

**注:** PeopleSoft ツールの使用について詳しくは、PeopleSoft の資料を参照してください。

2. ファイルをサーバーにコピーします。
  - WebSphere Integration Developer のテスト環境の場合は、ファイルを `${WAS_INSTALL_ROOT}/runtimes/bi_v62/lib/ext` ディレクトリーにコピーします。
  - 実稼働環境の場合は、ファイルを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus の `${WAS_INSTALL_ROOT}/lib/ext` ディレクトリーにコピーします。

## アダプターがバンドルされている場合の外部ソフトウェア依存関係の追加

アダプター・アプリケーションを実行するには、まず、依存関係にある JAR ファイルを EAR アプリケーションにコピーする必要があります。この方法を使用するのは、組み込みデプロイメントの場合に限られます。

### このタスクを実行する理由および時期

必要なファイルを手入して、それらを EAR アプリケーションにコピーするには、以下の手順に従います。

### このタスクの手順

1. 該当するモジュールから、ワークスペースに進み、JAR ファイルをディレクトリーにコピーします。例えば、モジュール名が「ModuleName」の場合、ワークスペースに進んで、JAR ファイルを `ModuleNameApp/EarContent` ディレクトリーにコピーします。
2. アダプター RAR のマニフェスト・ファイル、`manifest.mf` を、アダプターが必要とする JAR ファイルのリストで変更します。以下の書式で JAR ファイルを追加します: `Class-Path: dependantjar1.jar, dependantjar2.jar`

3. ネイティブ・ライブラリーをランタイム bin ディレクトリーにコピーし、アプリケーションをデプロイします。

## 結果

これでサード・パーティー・ライブラリーが、ご使用のランタイム環境に含まれるようになりました。

## Inbound 処理をテストするためのターゲット・コンポーネントの生成および接続

Inbound 処理用のアダプターが組み込まれているモジュールをテスト環境にデプロイする前に、まずターゲット・コンポーネントを生成して接続する必要があります。このターゲット・コンポーネントは、アダプターがイベントを送信する宛先として機能します。

### 始める前に

外部サービス・ウィザードを使用してエクスポート・モジュールを生成してあるはずですが。

### このタスクを実行する理由および時期

Inbound 処理のためにターゲット・コンポーネントを生成して接続する必要があるのは、テスト環境のみです。実稼働環境でアダプターを配置する際には必要ありません。

ターゲット・コンポーネントは、イベントを受信します。WebSphere Integration Developer のアセンブリー・エディターを使用して、エクスポート・コンポーネントを (2 つのコンポーネントを接続している) ターゲット・コンポーネントに接続します。アダプターはこのワイヤーを使用して、(エクスポート・コンポーネントからターゲット・コンポーネントへ) イベント・データを受け渡します。

### このタスクの手順

1. ターゲット・コンポーネントを作成します。
  - a. WebSphere Integration Developer の Business Integration パースペクティブで、「アセンブリー・ダイアグラム」を展開して、エクスポート・コンポーネントをダブルクリックします。デフォルト値を変更しなかった場合、エクスポート・コンポーネントの名前は、ご使用のアダプターの名前 + **InboundInterface** になります。

インターフェースにより、呼び出すことができる操作と渡されるデータ (入力引数、戻り値、例外など) が指定されます。**InboundInterface** コンポーネントには、Inbound 処理をサポートするためにアダプターが必要とする操作が格納されています。また、このコンポーネントは外部サービス・ウィザードを実行すると作成されます。

- b. 「コンポーネント」を展開して「型なしコンポーネント」を選択し、そのコンポーネントをアセンブリー・ダイアグラムまでドラッグして、新規コンポーネントを作成します。

カーソルが配置アイコンに変わります。

- c. コンポーネントをクリックして、そのコンポーネントをアセンブリー・ダイアグラムに表示します。
2. コンポーネントを接続します。
    - a. エクスポート・コンポーネントをクリックして、新規コンポーネントにドラッグします。 これにより、次の図に示すように、エクスポート・コンポーネントから新規コンポーネントへ線を引くことができます。
    - b. アセンブリー・ダイアグラムを保存します。「ファイル」→「保管」をクリックします。
  3. 新規コンポーネントの実装を生成します。
    - a. 新規コンポーネントを右クリックして、「実装の生成」を選択します。

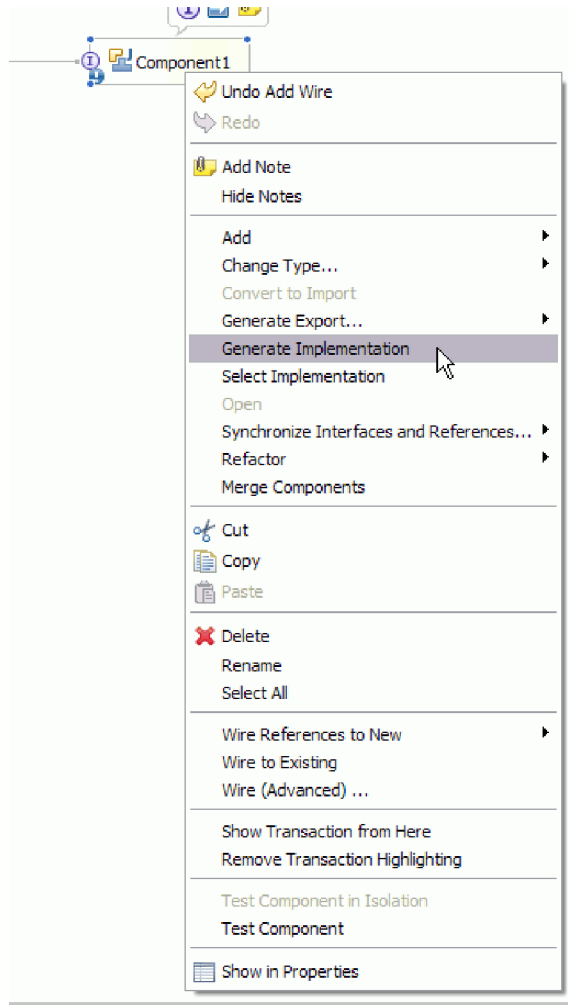


図 13. Java 実装環境の生成

- b. 「(デフォルト・パッケージ)」を選択して、「OK」をクリックします。これにより、Inbound モジュールのエンドポイントが作成されます。

別のタブに Java 実装環境が表示されます。

- c. オプション: print ステートメントを追加して、エンドポイント・メソッドのそれぞれのエンドポイントで受信したデータ・オブジェクトを出力します。



- d. 「ファイル」 → 「保管」をクリックして、変更内容を保存します。

#### 次のタスク

テストを行うモジュールのデプロイを続行します。

## サーバーへのモジュールの追加

WebSphere Integration Developerでは、テスト環境の 1 つ以上のサーバーにモジュールをデプロイすることができます。

#### 始める前に

テストしているモジュールがアダプターを使用して Inbound 処理を実行する場合は、アダプターによるイベント送信先となるターゲット・コンポーネント を生成して、そこに接続する必要があります。

#### このタスクを実行する理由および時期

モジュールおよび、そのアダプターの使用をテストするには、そのモジュールをサーバーに追加する必要があります。

#### このタスクの手順

1. 条件: 「サーバー・ビュー」にサーバーがない場合は、以下の手順を実行し、新規サーバーを追加して定義します。
  - a. カーソルを「サーバー・ビュー」の内側に置き、右クリックして、「新規」 → 「サーバー」を選択します。
  - b. 「新規サーバーの定義」ウィンドウで、サーバー・タイプを選択します。
  - c. サーバーの設定値を構成します。
  - d. 「終了」をクリックして、サーバーを公開します。
2. サーバーにモジュールを追加します。
  - a. 「サーバー・ビュー」に切り替えます。 WebSphere Integration Developer で、「ウィンドウ」 → 「ビューの表示」 → 「サーバー」を選択します。
  - a. サーバーを始動します。 WebSphere Integration Developer 画面の右下のペインにある「サーバー」タブで、サーバーを右クリックし、「開始」を選択します。
3. サーバーの状況が「開始済み」である場合は、サーバーを右クリックし、「プロジェクトの追加および除去」を選択します。
4. 「プロジェクトの追加および除去」画面で、対象のプロジェクトを選択して「追加」をクリックします。 プロジェクトは、「使用可能プロジェクト」のリストから「構成プロジェクト」のリストに移動します。
5. 「終了」をクリックします。 これにより、モジュールがサーバーにデプロイされます。

モジュールがサーバーに追加されている間に、右下のペインの「コンソール」タブに、ログが表示されます。

#### 次のタスク

モジュールおよびアダプターの機能をテストします。

## テスト・クライアントを使用した Outbound 処理用モジュールのテスト

Outbound 処理用のアセンブル済みモジュールおよびアダプターを、WebSphere Integration Developer の統合テスト・クライアントを使用してテストします。

### 始める前に

まずモジュールをサーバーに追加する必要があります。

### このタスクを実行する理由および時期

モジュールのテストは、通常、コンポーネントのインターフェース操作について実行されますが、このテストを実行すると、コンポーネントが正しく実装され、参照先が正しく接続されているかどうかを判断できます。

### このタスクの手順

1. テストするモジュールを選択し、右クリックして、「テスト」 → 「テスト・モジュール」を選択します。
2. テスト・クライアントを使用したモジュールのテストについて詳しくは、WebSphere Integration Developer インフォメーション・センターの『モジュールおよびコンポーネントのテスト』のトピックを参照してください。

### 次のタスク

ご使用のモジュールおよびアダプターのテスト結果に納得したら、モジュールおよびアダプターを実稼働環境にデプロイできます。

---

## 実稼働用モジュールのデプロイ

外部サービス・ウィザードを使用して作成したモジュールを、実稼働環境で WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にデプロイする処理は、2 段階構成になっています。最初に、WebSphere Integration Developer 内にモジュールをエンタープライズ・アーカイブ (EAR) ファイルの形でエクスポートします。次に、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus 管理コンソールを使用して、EAR ファイルをデプロイします。

### このタスクを実行する理由および時期

## サーバーでの外部ソフトウェア依存関係の追加

アダプターが PeopleSoft Enterprise サーバーと通信するには、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus サーバーに特定の JAR ファイルがインストールされている必要があります。

### このタスクを実行する理由および時期

PeopleSoft Enterprise サーバーが WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus と同じコンピューター・システム上にインストールされている場合は、この作業を実行する必要はありません。ファイルは、アダプターに既に使用可能になっています。

#### このタスクの手順

1. PeopleSoft サーバーがインストールされているワークステーションから psjoa.jar 依存 JAR ファイルを取得し、PeopleSoft ツールを使用して Component Interface 用のその他の Java API JAR ファイルを生成します。使用する PeopleSoft Enterprise のバージョンによっては、ソフトウェア依存関係が異なります。

**注:** PeopleSoft ツールの使用について詳しくは、PeopleSoft の資料を参照してください。

2. ファイルをサーバーにコピーします。
  - WebSphere Integration Developer のテスト環境の場合は、ファイルを `${WAS_INSTALL_ROOT}/runtimes/bi_v62/lib/ext` ディレクトリーにコピーします。
  - 実稼働環境の場合は、ファイルを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus の `${WAS_INSTALL_ROOT}/lib/ext` ディレクトリーにコピーします。

## RAR ファイルのインストール (スタンドアロン・アダプターを使用するモジュールの場合のみ)

アダプターをモジュールに組み込まないが、サーバー・インスタンス内にデプロイされているすべてのアプリケーションに対してアダプターを使用可能にする場合は、アダプターを RAR ファイルの形式でアプリケーション・サーバーにインストールすることが必要になります。RAR ファイルとは、Java 2 Connector (J2C) アーキテクチャーに合わせてリソース・アダプターを圧縮するときに使用する Java アーカイブ (JAR) ファイルのことです。

#### 始める前に

外部サービス・ウィザードの「サービス生成およびデプロイメント構成 (Service Generation and Deployment Configuration)」ウィンドウで、「コネクター・プロジェクトのデプロイ」を「複数アダプターが使用するサーバー上 (On server for use by multiple adapters)」に設定しておく必要があります。

#### このタスクを実行する理由および時期

アダプターを RAR ファイルの形式でインストールすると、そのアダプターは、サーバー・ランタイムで実行されているすべての J2EE アプリケーション・コンポーネントで使用可能になります。

#### このタスクの手順

1. 管理コンソールを始動します。
2. 「リソース」 → 「リソース・アダプター」 → 「リソース・アダプター」をクリックします。

3. 「リソース・アダプター」ページで、「RAR のインストール」をクリックします。

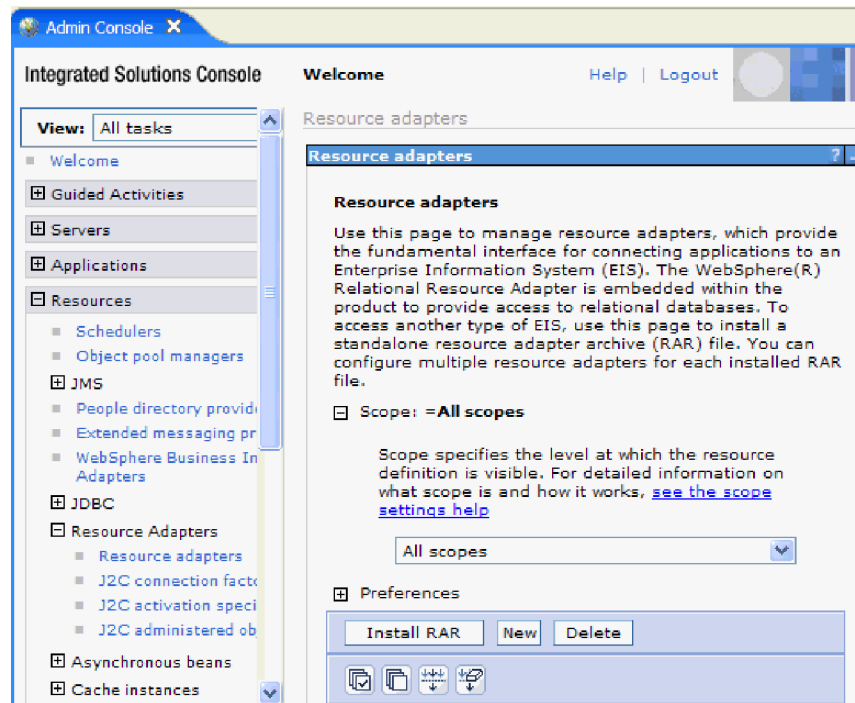


図 14. 「リソース・アダプター」ページの「RAR のインストール」ボタン

4. 「RAR ファイルのインストール」ページで、「参照」をクリックし、ご使用のアダプターの RAR ファイルへ移動します。

RAR ファイルは、通常、`WID_installation_directory/ResourceAdapters/adapter_name/deploy/adapter.rar` のパスにインストールされます。

5. 「次へ」をクリックします。
6. 「リソース・アダプター」ページで、必要に応じてアダプターの名前を変更し、説明を追加します。
7. 「OK」をクリックします。
8. ページの上部にある「メッセージ」ボックスで「保管」をクリックします。

#### 次のタスク

次の手順は、サーバーにデプロイできる EAR ファイルとしてモジュールをエクスポートすることです。

## EAR ファイルとしてのモジュールのエクスポート

WebSphere Integration Developer を使用して、モジュールを EAR ファイルとしてエクスポートします。EAR ファイルを作成することによって、モジュールのすべての内容を WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus に容易にデプロイできる形式で取り込みます。

#### 始める前に

モジュールを EAR ファイルとしてエクスポートするには、事前にサービスと通信するためのモジュールを作成しておく必要があります。このモジュールを、WebSphere Integration Developer ビジネス・インテグレーション・パースペクティブ内に表示する必要があります。

#### このタスクを実行する理由および時期

モジュールを EAR ファイルとしてエクスポートするには、以下の手順を実行します。

#### このタスクの手順

1. モジュールを右クリックして、「エクスポート」を選択します。
2. 「選択」ウィンドウで、「Java EE」を展開します。
3. 「EAR ファイル」を選択して、「次へ」をクリックします。
4. オプション: 正しい EAR アプリケーションを選択します。EAR アプリケーションにはモジュールと同じ名前が付けられますが、名前の末尾に「App」が追加されます。
5. EAR ファイルを格納するローカル・ファイル・システム上で、「参照」を選択してフォルダーを参照します。
6. 必要に応じて、ソース・ファイルをエクスポートする場合は、「ソース・ファイルのエクスポート」を選択します。このオプションは、EAR ファイルのほかにソース・ファイルをエクスポートする場合に表示されます。ソース・ファイルには、Java コンポーネント、データ・マップなどに関連付けられているファイルがあります。
7. 既存のファイルを上書きする場合は、「既存のファイルを上書き (Overwrite an existing file)」をクリックします。
8. 「終了」をクリックします。

#### 結果

モジュールの内容が EAR ファイルとしてエクスポートされます。

このモジュールを管理コンソールにインストールします。これにより、モジュールが WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にデプロイされます。

## EAR ファイルのインストール

EAR ファイルのインストールは、デプロイメント・プロセスの最終手順です。EAR ファイルをサーバーにインストールして実行すると、EAR ファイルの一部として組み込まれているアダプターが、インストール済みアプリケーションの一部として稼働します。

#### 始める前に

モジュールを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にインストールするには、事前にモジュールを EAR ファイルとしてエクスポートしておく必要があります。

#### このタスクを実行する理由および時期

EAR ファイルをインストールするには、次の手順を実行します。アダプター・モジュール・アプリケーションのクラスター化については、<http://www.ibm.com/software/webervers/appserv/was/library/> を参照してください。

### このタスクの手順

1. サーバー・インスタンスを右クリックし、「**管理コンソールの実行**」を選択して、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus 管理コンソールを開きます。
2. 「管理コンソール」ウィンドウで、「**アプリケーション**」 → 「**新規アプリケーションのインストール**」をクリックします。



図 15. 「アプリケーション・インストールの準備」ウィンドウ

3. 「**参照**」をクリックして、EAR ファイルを位置指定し、「**次へ**」をクリックします。EAR ファイル名は、モジュール名の後に「App」が付いたものです。
4. オプション: クラスター化された環境にデプロイする場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**ステップ 2: サーバーにモジュールをマップ**」ウィンドウで、モジュールを選択します。
  - b. サーバー・クラスターの名前を選択します。
  - c. 「**適用**」をクリックします。
5. 「**次へ**」をクリックして、「**要約**」を開きます。すべての設定が正しいことを確認して、「**終了**」をクリックします。
6. オプション: 認証別名を使用している場合は、以下の手順を実行します。
  - a. 「**セキュリティ**」を展開して、「**ビジネス・インテグレーションの認証別名 (Business Integration Authentication Aliases)**」を選択します。
  - b. 構成する認証別名を選択します。認証別名の構成を変更するための管理者権限またはオペレーター権限を持っている必要があります。
  - c. オプション: 「**ユーザー名**」を入力します (まだ入力されていない場合)。

- d. 「パスワード」を入力します (まだ入力されていない場合)。
- e. 「確認パスワード (Confirm Password)」フィールドに再度パスワードを入力します (まだ入力されていない場合)。
- f. 「OK」をクリックします。

### 結果

この時点で、プロジェクトがデプロイメントされ、「エンタープライズ・アプリケーション」ウィンドウが表示されます。

### 次のタスク

いずれかのプロパティを設定または再設定する場合、あるいは、アダプター・プロジェクトのアプリケーションをクラスター化したい場合は、トラブルシューティング・ツールを構成する前に、管理コンソールを使用して対応する変更を行ってください。





---

## 第 7 章 アダプター・モジュールの管理

アダプターをスタンドアロンのデプロイメントで稼働している場合は、アダプター・モジュールの開始、停止、モニター、およびトラブルシューティングには、サーバーの管理コンソールを使用します。組み込みアダプターを使用しているアプリケーションでは、アプリケーションの開始時または停止時にアダプター・モジュールが開始または停止します。

---

### 組み込みアダプターの構成プロパティーの変更

アダプターをモジュールの一部としてデプロイした後に構成プロパティーを変更するには、実行時環境の管理コンソールを使用します。リソース・アダプター・プロパティー (一般的なアダプター操作に使用)、Managed Connection Factory プロパティー (Outbound 処理に使用)、および活動化仕様プロパティー (Inbound 処理に使用) を更新できます。

### 組み込みアダプターのリソース・アダプター・プロパティーの設定

アダプターをモジュールの一部としてデプロイした後に、このアダプターのリソース・アダプター・プロパティーを設定するには、管理コンソールを使用します。構成するプロパティーの名前を選択してから、その値を変更または設定します。

#### 始める前に

アダプター・モジュールを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus 上にデプロイする必要があります。

#### このタスクを実行する理由および時期

カスタム・プロパティーとは、すべての WebSphere アダプターが共用するデフォルト構成プロパティーです。

管理コンソールを使用してプロパティーを構成するには、以下の手順を実行します。

#### このタスクの手順

1. 管理コンソールを開始します。
2. 「アプリケーション」の下で、「エンタープライズ・アプリケーション」を選択します。
3. 「エンタープライズ・アプリケーション」リストから、プロパティーを変更するアダプター・モジュールの名前をクリックします。「構成」ページが表示されます。

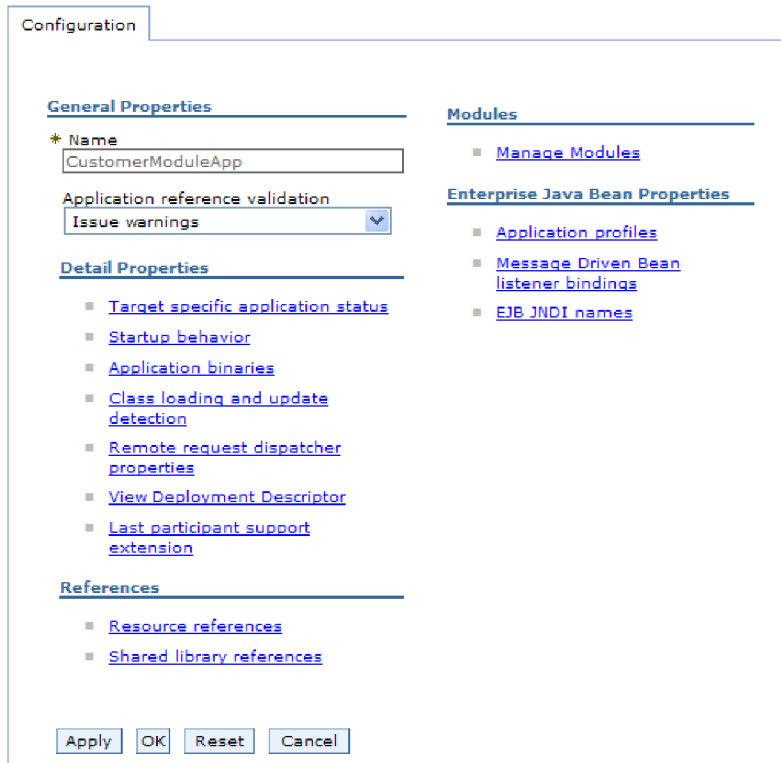


図 16. 「構成」タブでの「モジュールの管理」の選択

4. 「モジュール」の下で、「モジュールの管理」をクリックします。
5. 「IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise」をクリックします。
6. 「追加プロパティ」リストから、「リソース・アダプター」をクリックします。
7. 次のページで、「追加プロパティ」リストから、「カスタム・プロパティ」をクリックします。
8. 変更するプロパティごとに、以下の手順を実行します。

**注:** ここで示すプロパティについて詳しくは、114 ページの『リソース・アダプター・プロパティ』を参照してください。

- a. プロパティの名前をクリックします。選択したプロパティの「構成」ページが表示されます。例えば、「logNumberOfFiles」プロパティをクリックすると、下の図に示すページが表示されます。

Configuration

**General Properties**

\* Scope  
widNode

Required

Name  
logNumberOfFiles

Value  
1

Description

Type  
java.lang.String

Apply OK Reset Cancel

図 17. logNumberOfFiles プロパティの「構成」タブ

- b. 「値」フィールドの値の内容を変更するか、フィールドが空の場合は値を入力します。
  - 「値」フィールドの数値を変更して、プロパティの説明を追加できます。
  - c. 「OK」をクリックします。
9. ウィンドウの上部にある「メッセージ」ボックス内の「保管」リンクをクリックします。

#### 結果

アダプター・モジュールに関連付けられているリソース・アダプター・プロパティが変更されました。

## 組み込みアダプターの Managed (J2C) Connection Factory プロパティの設定

アダプターをモジュールの一部としてデプロイした後に、このアダプターの Managed Connection Factory プロパティを設定するには、管理コンソールを使用します。構成するプロパティの名前を選択してから、その値を変更または設定します。

#### 始める前に

アダプター・モジュールを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus 上にデプロイする必要があります。

#### このタスクを実行する理由および時期

Managed Connection Factory プロパティは、ターゲット・PeopleSoft Enterprise サーバーのインスタンスを構成する場合に使用します。

注: 管理コンソール内では、このプロパティを「J2C 接続ファクトリー・プロパティ」と呼びます。

管理コンソールを使用してプロパティを構成するには、以下の手順を実行します。

#### このタスクの手順

1. 管理コンソールを開始します。
2. 「アプリケーション」の下で、「エンタープライズ・アプリケーション」を選択します。
3. 「エンタープライズ・アプリケーション」リストで、プロパティを変更するアダプター・モジュールの名前をクリックします。
4. 「モジュール」の下で、「モジュールの管理」をクリックします。

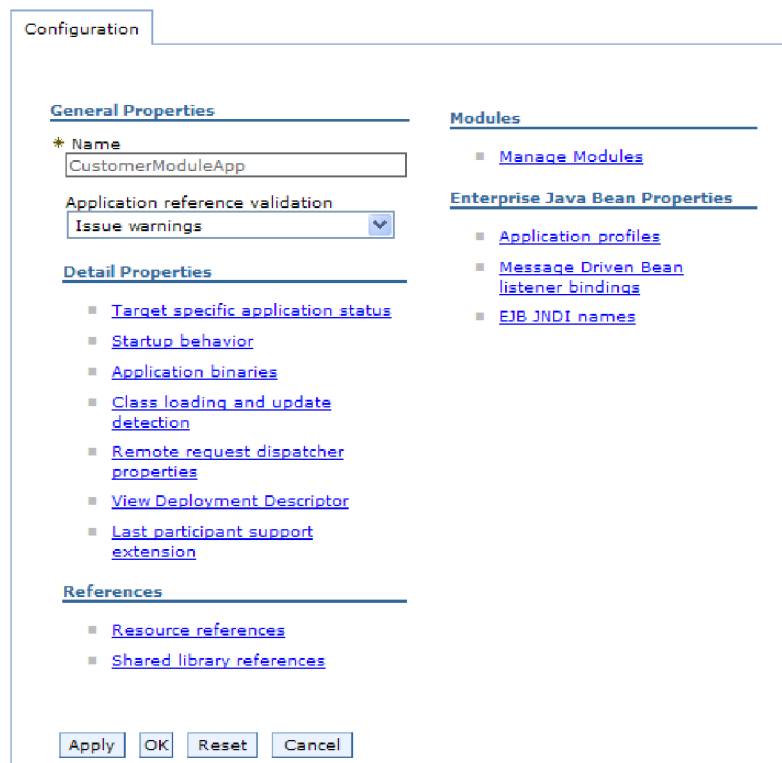


図 18. 「構成」タブでの「モジュールの管理」の選択

5. 「IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise」をクリックします。
6. 「追加プロパティ」リストで、「リソース・アダプター」をクリックします。
7. 次のページで、「追加プロパティ」リストから「J2C 接続ファクトリー」をクリックします。
8. アダプター・モジュールに関連付けられた接続ファクトリーの名前をクリックします。

9. 「追加プロパティ」リストで、「カスタム・プロパティ」をクリックします。

カスタム・プロパティは、Adapter for PeopleSoft Enterprise に特有の J2C 接続ファクトリー・プロパティです。接続プールおよび拡張接続ファクトリー・プロパティは、ユーザーが独自にアダプターを作成する場合に構成するプロパティです。

10. 変更するプロパティごとに、以下の手順を実行します。

**注:** ここで示すプロパティについて詳しくは、119 ページの『Managed Connection Factory プロパティ』を参照してください。

- a. プロパティの名前をクリックします。
  - b. 「値」フィールドの値の内容を変更するか、フィールドが空の場合は値を入力します。
  - c. 「OK」をクリックします。
11. ウィンドウの上部にある「メッセージ」ボックス内の「保管」リンクをクリックします。

## 結果

アダプター・モジュールに関連付けられた Managed Connection Factory プロパティが変更されます。

## 組み込みアダプターの活動化仕様プロパティの設定

アダプターをモジュールの一部としてデプロイした後に、そのアダプターの活動化仕様プロパティを設定するには、管理コンソールを使用します。構成するメッセージ・エンドポイント・プロパティの名前を選択してから、その値を変更または設定します。

### 始める前に

アダプター・モジュールを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus 上にデプロイする必要があります。

### このタスクを実行する理由および時期

活動化仕様プロパティは、エンドポイントを Inbound 処理用に構成する場合に使用します。

管理コンソールを使用してプロパティを構成するには、以下の手順を実行します。

### このタスクの手順

1. 管理コンソールを開始します。
2. 「アプリケーション」の下で、「エンタープライズ・アプリケーション」を選択します。
3. 「エンタープライズ・アプリケーション」リストから、プロパティを変更するアダプター・モジュールの名前をクリックします。

4. 「モジュール」の下で、「モジュールの管理」をクリックします。

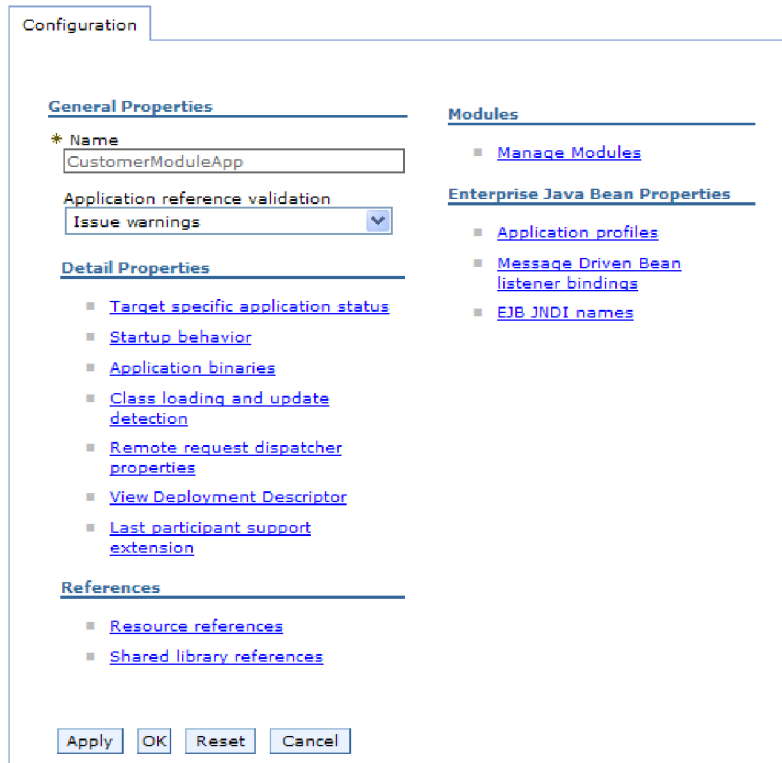


図 19. 「構成」タブでの「モジュールの管理」の選択

5. 「IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise」をクリックします。
6. 「追加プロパティ」リストから、「リソース・アダプター」をクリックします。
7. 次のページで、「追加プロパティ」リストから、「J2C 活動化仕様」をクリックします。
8. アダプター・モジュールに関連付けられている活動化仕様の名前をクリックします。
9. 「追加プロパティ」リストから、「J2C 活動化仕様のカスタム・プロパティ」をクリックします。
10. 変更するプロパティごとに、以下の手順を実行します。

注: ここで示すプロパティについて詳しくは、134 ページの『活動化仕様プロパティ』を参照してください。

- a. プロパティの名前をクリックします。
  - b. 「値」フィールドの値の内容を変更するか、フィールドが空の場合は値を入力します。
  - c. 「OK」をクリックします。
11. ウィンドウの上部にある「メッセージ」ボックス内の「保管」リンクをクリックします。

## 結果



アダプター・モジュールに関連付けられている活動化仕様プロパティーが変更されました。

---

## スタンドアロン・アダプターの構成プロパティーの変更

スタンドアロン・アダプターのインストール後に構成プロパティーを設定するには、実行時環境の管理コンソールを使用します。アダプターに関する一般的な情報を入力して、(汎用のアダプター操作に使用される) リソース・アダプター・プロパティーを設定します。アダプターを **Outbound** 操作に使用する場合は、接続ファクトリーを作成して、それに対してプロパティーを設定します。アダプターを **Inbound** 操作に使用する場合は、活動化仕様を作成して、それに対してプロパティーを設定します。

## スタンドアロン・アダプターのリソース・アダプター・プロパティーの設定

スタンドアロン・アダプターを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus> にインストールした後に、そのアダプターのリソース・アダプター・プロパティーを設定するには、管理コンソールを使用します。構成するプロパティーの名前を選択してから、その値を変更または設定します。

### 始める前に

アダプターを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にインストールしておく必要があります。

### このタスクを実行する理由および時期

カスタム・プロパティーとは、すべての WebSphere アダプターが共用するデフォルト構成プロパティーです。

管理コンソールを使用してプロパティーを構成するには、以下の手順を実行します。

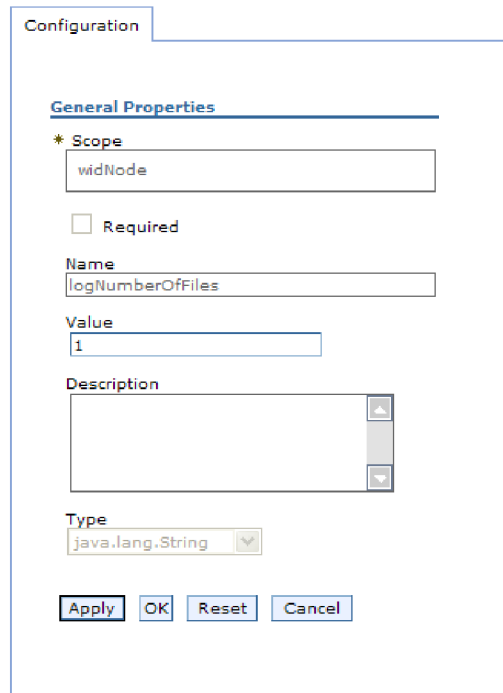
### このタスクの手順

1. 管理コンソールを開始します。
2. 「リソース」 → 「リソース・アダプター」 → 「リソース・アダプター」 をクリックします。
3. 「リソース・アダプター」 ページで、「**IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise**」 をクリックします。
4. 「追加プロパティー」 リストで、「**カスタム・プロパティー**」 をクリックします。
5. 変更するプロパティーごとに、以下の手順を実行します。

**注:** ここで示すプロパティーについて詳しくは、114 ページの『リソース・アダプター・プロパティー』を参照してください。

- a. プロパティーの名前をクリックします。
- b. 「**値**」 フィールドの値の内容を変更するか、フィールドが空の場合は値を入力します。

例えば、「logNumberOfFiles」をクリックすると、次のページが表示されます。



The image shows a configuration dialog box titled "Configuration" with a sub-tab "General Properties". The "Scope" field is set to "widNode". There is an unchecked "Required" checkbox. The "Name" field contains "logNumberOfFiles". The "Value" field contains "1". The "Description" field is an empty text area. The "Type" dropdown menu is set to "java.lang.String". At the bottom, there are four buttons: "Apply", "OK", "Reset", and "Cancel".

図 20. logNumberOfFiles プロパティの「構成」タブ

「値」フィールドの数値を変更して、プロパティの説明を追加できます。

- c. 「OK」をクリックします。
6. ページの上部にある「メッセージ」ボックスで「保管」をクリックします。

#### 結果

アダプターに関連付けられているリソース・アダプター・プロパティが変更されました。

## スタンドアロン・アダプターの Managed (J2C) Connection Factory プロパティの設定

スタンドアロン・アダプターを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus> にインストールした後に、そのアダプターの管理接続ファクトリー・プロパティを設定するには、管理コンソールを使用します。構成するプロパティの名前を選択してから、その値を変更または設定します。

#### 始める前に

アダプターを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にインストールしておく必要があります。

#### このタスクを実行する理由および時期

Managed Connection Factory プロパティは、ターゲット・PeopleSoft Enterprise サーバーのインスタンスを構成する場合に使用します。

**注:** 管理コンソール内では、このプロパティを「J2C 接続ファクトリー・プロパティ」と呼びます。

管理コンソールを使用してプロパティを構成するには、以下の手順を実行します。

#### このタスクの手順

1. 管理コンソールを開始します。
2. 「リソース」 → 「リソース・アダプター」 → 「リソース・アダプター」をクリックします。
3. 「リソース・アダプター」ページで、「**IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise**」をクリックします。
4. 「追加プロパティ」リストで、「**J2C 接続ファクトリー**」をクリックします。
5. 既存の接続ファクトリーを使用する場合は、既存の接続ファクトリーのリストから選択に進みます。

**注:** 外部サービス・ウィザードを使用してアダプター・モジュールを構成したときに「事前定義された接続プロパティを使用する」を選択していた場合は、接続ファクトリーを作成する必要はありません。

接続ファクトリーを作成する場合は、以下の手順を実行します。

- a. 「新規作成」をクリックします。
- b. 「構成」タブの「一般プロパティ」セクションで、接続ファクトリーの名前を入力します。例えば、AdapterCF と入力できます。
- c. 「JNDI 名」に値を入力します。例えば、com/eis/AdapterCF と入力できます。
- d. 「コンポーネント管理認証別名」リストから認証別名を選択します。
- e. 「OK」をクリックします。
- f. ページの上部にある「メッセージ」ボックスで「保管」をクリックします。

新規に作成された接続ファクトリーが表示されます。

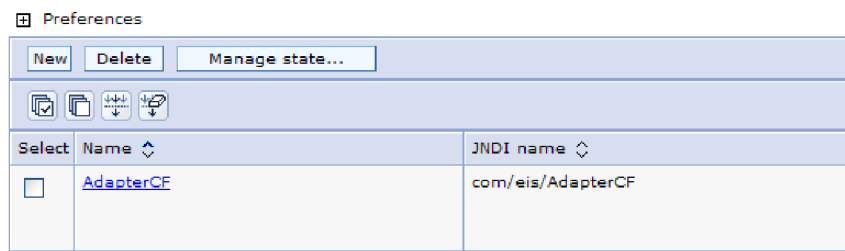


図 21. リソース・アダプターと併用するためのユーザー定義接続ファクトリー

6. 接続ファクトリーのリストで、使用するものをクリックします。

7. 「追加プロパティ」リストで、「カスタム・プロパティ」をクリックします。

カスタム・プロパティは、Adapter for PeopleSoft Enterprise に特有の J2C 接続ファクトリー・プロパティです。接続プールおよび拡張接続ファクトリー・プロパティは、ユーザーが独自にアダプターを作成する場合に構成するプロパティです。

8. 変更するプロパティごとに、以下の手順を実行します。

注: ここで示すプロパティについて詳しくは、119 ページの『Managed Connection Factory プロパティ』を参照してください。

- a. プロパティの名前をクリックします。
  - b. 「値」フィールドの値の内容を変更するか、フィールドが空の場合は値を入力します。
  - c. 「OK」をクリックします。
9. プロパティの設定が終了したら、「適用」をクリックします。
  10. ウィンドウの上部にある「メッセージ」ボックスで「保管」をクリックします。

## 結果

アダプターに関連付けられている Managed Connection Factory プロパティが設定されます。

## スタンドアロン・アダプターの活動化仕様プロパティの設定

スタンドアロン・アダプターを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus> にインストールした後に、そのアダプターのアクティベーション・スペック・プロパティを設定するには、管理コンソールを使用します。構成するメッセージ・エンドポイント・プロパティの名前を選択してから、その値を変更または設定します。

### 始める前に

アダプターを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にインストールしておく必要があります。

### このタスクを実行する理由および時期

活動化仕様プロパティは、エンドポイントを Inbound 処理用に構成する場合に使用します。

管理コンソールを使用してプロパティを構成するには、以下の手順を実行します。

### このタスクの手順

1. 管理コンソールを開始します。
2. 「リソース」 → 「リソース・アダプター」 → 「リソース・アダプター」をクリックします。

3. 「リソース・アダプター」ページで、「**IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise**」をクリックします。
4. 「追加プロパティ」リストで、「**J2C 活動化仕様**」をクリックします。
5. 既存の活動化仕様を使用する場合は、既存の活動化仕様のリストから選択に進みます。

注: 外部サービス・ウィザードを使用してアダプター・モジュールを構成したときに「事前定義された接続プロパティを使用する」を選択していた場合は、活動化仕様を作成する必要はありません。

活動化仕様を作成する場合は、以下の手順を実行します。

- a. 「**新規作成**」をクリックします。
- b. 「**構成**」タブの「**一般プロパティ**」セクションで、活動化仕様の名前を入力します。例えば、AdapterAS と入力できます。
- c. 「**JNDI 名**」に値を入力します。例えば、com/eis/AdapterAS と入力できません。
- d. 「**認証別名**」リストから認証別名を選択します。
- e. メッセージ・リスナー・タイプを選択します。
- f. 「**OK**」をクリックします。
- g. ページの上部にある「**メッセージ**」ボックスで「**保管**」をクリックします。

新規に作成された活動化仕様が表示されます。

6. 活動化仕様のリストで、使用するものをクリックします。
7. 「追加プロパティ」リストで、「**J2C 活動化仕様のカスタム・プロパティ**」をクリックします。
8. 設定するプロパティごとに、次の手順を実行します。

注: ここで示すプロパティについて詳しくは、134 ページの『活動化仕様プロパティ』を参照してください。

- a. プロパティの名前をクリックします。
  - b. 「**値**」フィールドの値の内容を変更するか、フィールドが空の場合は値を入力します。
  - c. 「**OK**」をクリックします。
9. プロパティの設定が終了したら、「**適用**」をクリックします。
  10. ページの上部にある「**メッセージ**」ボックスで「**保管**」をクリックします。

## 結果

アダプターに関連付けられた活動化仕様プロパティが設定されます。

---

## アダプターを使用するアプリケーションの開始

アダプターを使用するアプリケーションを開始するには、サーバーの管理コンソールを使用します。デフォルトでは、サーバーが始動すると、アプリケーションは自動的に開始します。

### このタスクを実行する理由および時期

アプリケーションが使用するのが組み込みアダプターであっても、スタンドアロン・アダプターであっても、アプリケーションを開始するには、以下の手順に従います。組み込みアダプターを使用するアプリケーションの場合、アダプターはアプリケーションの開始時に開始されます。スタンドアロン・アダプターを使用するアプリケーションの場合、アダプターはアプリケーション・サーバーの始動時に開始されます。

### このタスクの手順

1. 管理コンソールで、「アプリケーション」 → 「エンタープライズ・アプリケーション」をクリックします。

**注:** 管理コンソールには、「Integrated Solutions Console」というラベルが付いています。

2. 開始するアプリケーションのチェック・ボックスを選択します。アプリケーション名は、インストールした EAR ファイルの名前からファイル拡張子 .EAR を除いたものです。
3. 「開始 (Start)」をクリックします。

### 結果

アプリケーションの状況が「開始済み」に変化し、アプリケーションが開始されたことを示すメッセージが管理コンソールの上部に表示されます。

---

## アダプターを使用するアプリケーションの停止

アダプターを使用するアプリケーションを停止するには、サーバーの管理コンソールを使用します。デフォルトでは、サーバーが停止すると、アプリケーションは自動的に停止します。

### このタスクを実行する理由および時期

アプリケーションが使用するのが組み込みアダプターであっても、スタンドアロン・アダプターであっても、アプリケーションを停止するには、以下の手順に従います。アプリケーションと組み込みアダプターの組み合わせの場合、アダプターはアプリケーションの停止時に停止します。スタンドアロン・アダプターを使用するアプリケーションの場合、アダプターはアプリケーション・サーバーの停止時に停止します。

### このタスクの手順

1. 管理コンソールで、「アプリケーション」 → 「エンタープライズ・アプリケーション」をクリックします。

注: 管理コンソールには、「Integrated Solutions Console」というラベルが付いています。

2. 停止するアプリケーションのチェック・ボックスを選択します。アプリケーション名は、インストールした EAR ファイルの名前からファイル拡張子 .EAR を除いたものです。
3. 「停止 (Stop)」をクリックします。

### 結果

アプリケーションの状況が「停止」に変化し、アプリケーションが停止したことを示すメッセージが管理コンソールの上部に表示されます。

---

## Performance Monitoring Infrastructure を使用したパフォーマンスのモニター

Performance Monitoring Infrastructure (PMI) は、管理コンソールの機能の 1 つで、これを使用すると、実稼働環境内で Adapter for PeopleSoft Enterprise を含む、コンポーネントのパフォーマンスを動的にモニターすることができます。PMI は、サーバー内のさまざまなコンポーネントから、平均応答時間や要求の総数などのアダプターのパフォーマンス・データを収集して、そのデータをツリー構造に編成します。このデータは、Tivoli® Performance Viewer (WebSphere Process Server の管理コンソールに統合されているグラフィカル・モニター・ツール) を通して表示することができます。

### このタスクを実行する理由および時期

PMI により、以下の時点のデータを収集することによって、アダプターのパフォーマンスをモニターすることができます。

- Outbound 処理時。Outbound 要求をモニターします。
- Inbound イベントの取り出し時。イベント・テーブルからのイベントの取り出しをモニターします。
- Inbound イベントの送達時。エンドポイント (1 つまたは複数の) へのイベントの送達をモニターします。

使用するアダプター用に PMI を使用可能に設定し、構成するためには、まず、トレース機能の詳細レベルを設定し、パフォーマンス・データの収集元となるいくつかのイベントを実行する必要があります。

ご使用のアダプター環境の全体的なパフォーマンスをモニターし、それを向上させるために PMI を役立てる方法については、WebSphere Application Server の Web サイト (<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/was/library/>) で PMI を検索してください。

## Performance Monitoring Infrastructure の構成

Performance Monitoring Infrastructure (PMI) を、アダプターのパフォーマンス・データ (平均応答時間や要求の総数など) を収集するように構成することができます。使用するアダプター用に PMI を構成した後、Tivoli Performance Viewer を使用してアダプターのパフォーマンスをモニターすることができます。



## 始める前に

アダプター用に PMI を構成するためには、まずトレースの詳細レベルを設定し、パフォーマンス・データの収集元となるいくつかのイベントを実行する必要があります。

1. トレース機能を使用可能にしてイベント・データを受け取るためには、トレース・レベルを `fine`、`finer`、`finest`、または `all` のいずれかに設定する必要があります。`*=info` の後に、コロンとストリングを追加します。例えば、次のように入力します。

```
*=info: WBILocationMonitor.CEI.ResourceAdapter.  
*=finest: WBILocationMonitor.LOG.ResourceAdapter.*=finest:
```

トレース・レベルの設定方法については、93 ページの『Common Event Infrastructure (CEI) を使用したトレースの使用可能化』を参照してください。

2. 1 つ以上の Outbound 要求または Inbound イベントを生成して、構成可能なパフォーマンス・データを生成します。

## このタスクの手順

1. アダプターに対して PMI を使用可能にします。
  - a. 管理コンソールで、「**モニターおよびチューニング**」を展開してから、「**Performance Monitoring Infrastructure (PMI)**」を選択します。
  - b. サーバーのリストから、ご使用のサーバーの名前をクリックします。
  - c. 「**構成**」タブを選択してから、「**Performance Monitoring (PMI) を使用可能にする (Enable Performance Monitoring (PMI))**」チェック・ボックスを選択します。
  - d. 「**カスタム**」を選択して、選択的に統計を使用可能または使用不可に設定します。

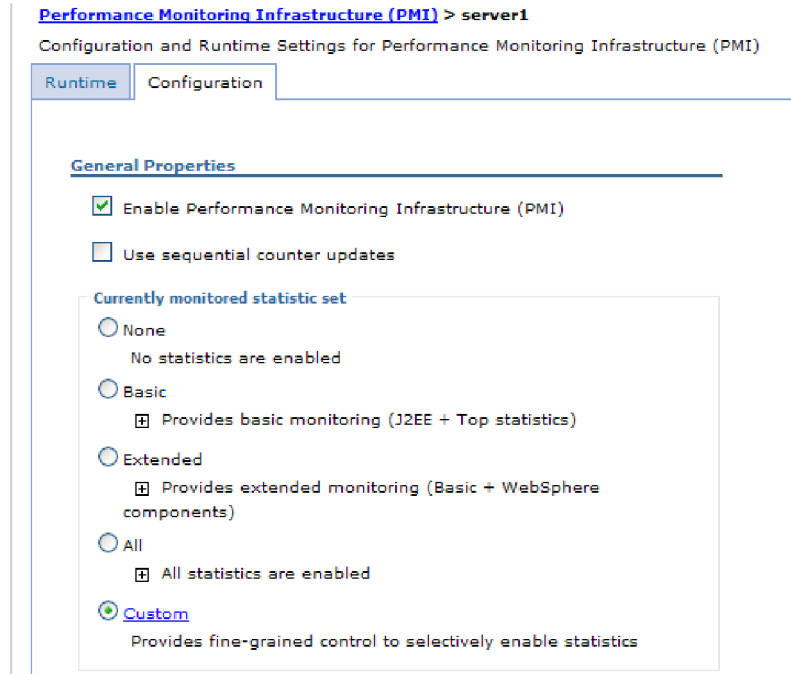


図 22. Performance Monitoring Infrastructure の使用可能化

- e. 「適用」または「OK」をクリックします。
  - f. 「保管」をクリックします。これで、PMI が使用可能になりました。
2. アダプター用に PMI を構成します。
- a. 管理コンソールで、「モニターおよびチューニング」を展開してから、「Performance Monitoring Infrastructure (PMI)」を選択します。
  - b. サーバーのリストから、ご使用のサーバーの名前をクリックします。
  - c. 「カスタム」を選択します。
  - d. 「ランタイム」タブを選択します。以下の図は、「ランタイム」タブを示しています。

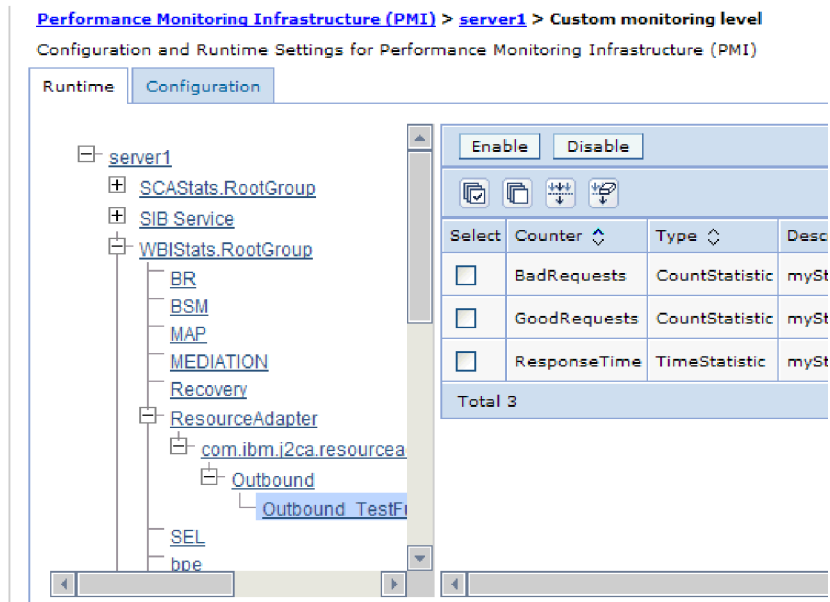


図 23. PMI の構成に使用される「ランタイム」タブ

- e. 「WBISStats.RootGroup」をクリックします。これは、ルート・グループで収集されるデータ用の PMI サブモジュールです。この例では、ルート・グループに WBISStats という名前を使用しています。
- f. 「ResourceAdapter」をクリックします。これは、JCA アダプターについて収集されるデータ用のサブモジュールです。
- g. アダプターの名前をクリックして、モニターするプロセスを選択します。
- h. 右側のペインで、収集する統計のチェック・ボックスを選択してから、「使用可能」をクリックします。

## 結果

PMI がアダプター用に構成されます。

## 次のタスク

これで、アダプターのパフォーマンス統計を表示することができるようになりました。

## パフォーマンスに関する統計の表示

アダプターのパフォーマンス・データは、グラフィカル・モニター・ツール Tivoli Performance Viewer を使用して表示することができます。Tivoli Performance Viewer は、WebSphere Process Server の管理コンソールに組み込まれています。

### 始める前に

アダプター用に Performance Monitoring Infrastructure を構成します。

### このタスクの手順

1. 管理コンソールで、「モニターおよびチューニング」を展開し、「Performance Viewer」を展開した後、「現行アクティビティ」を選択します。

2. サーバーのリストにて、ご使用のサーバーの名前をクリックします。
3. サーバー名の下で、「パフォーマンス・モジュール」を展開します。
4. 「WBISStatsRootGroup」をクリックします。
5. 「ResourceAdapter」およびアダプター・モジュールの名前をクリックします。
6. 複数のプロセスがある場合は、統計を表示させるプロセスのチェック・ボックスを選択します。

## 結果

右側のパネルに統計が表示されます。「グラフの表示」をクリックして、データのグラフを表示するか、または「表の表示」をクリックして、統計を表形式で表示することができます。以下の図では、アダプターのパフォーマンス統計をグラフの形で表示しています。

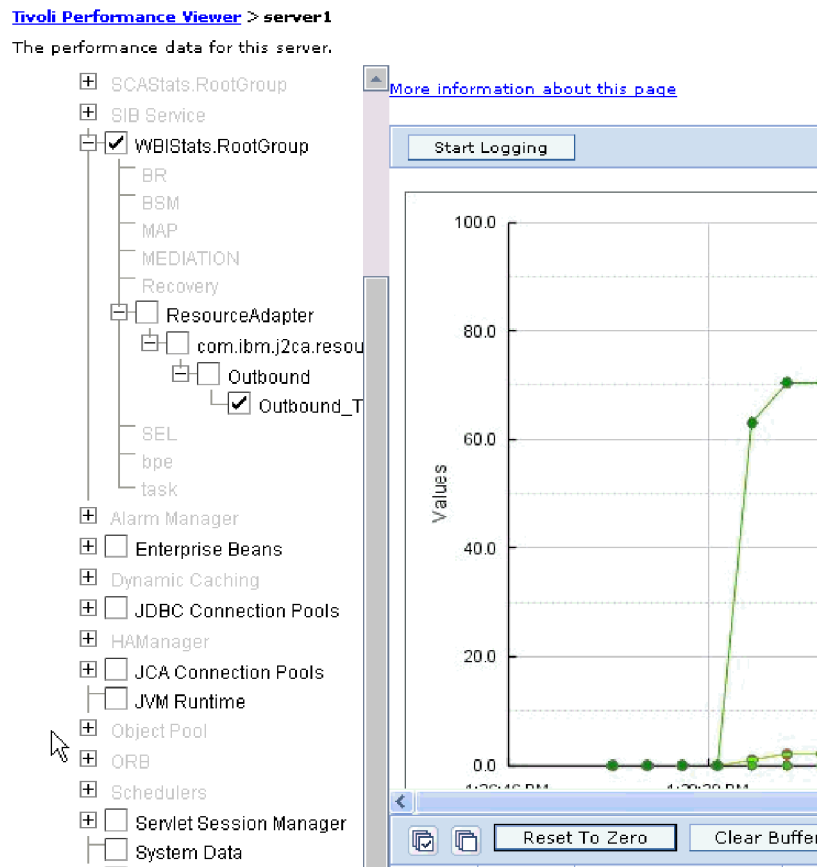


図 24. グラフ表示によるアダプターのパフォーマンス統計

## Common Event Infrastructure (CEI) を使用したトレースの使用可能化

アダプターは、サーバー内に組み込まれたコンポーネントである Common Event Infrastructure を使用して、ポーリング周期の開始または停止などの重要なビジネス・イベントに関するデータを通知できます。 イベント・データの書き込み先は、構成設定に応じてデータベースまたはトレース・ログ・ファイルになります。

### このタスクを実行する理由および時期

### このタスクの手順

1. 管理コンソールにて、「トラブルシューティング」をクリックします。
2. 「ログおよびトレース」を選択します。
3. サーバーのリストにて、ご使用のサーバーの名前をクリックします。
4. 「ログ詳細レベルの変更」ボックスで、アダプターによるイベント・データの書き込み先にする CEI データベースの名前 (例えば、`WBIEventMonitor.CEI.ResourceAdapter.*`) またはトレース・ログ・ファイルの名前 (例えば、`WBIEventMonitor.LOG.ResourceAdapter.*`) をクリックします。
5. アダプターを使用してデータベースまたはトレース・ログ・ファイルに書き込むビジネス・イベントの詳細レベルを選択し、(必要に応じて) メッセージおよびトレースに関連付けられている詳細レベルの細分度を調整します。
  - **ロギングなし。** イベント・ロギングをオフにします。
  - **メッセージのみ。** アダプターはイベントを通知します。
  - **すべてのメッセージおよびトレース。** アダプターは、イベントの詳細を通知します。
  - **メッセージとトレースのレベル。** イベントに関連付けられているビジネス・オブジェクト・ペイロードについてアダプターが通知する詳細度を制御するための設定です。詳細度を調整する場合は、以下のいずれかを選択してください。
    - 詳細 - 中。アダプターはイベントを通知しますが、ビジネス・オブジェクト・ペイロードについては通知しません。
    - 詳細 - 高。アダプターは、イベントおよびビジネス・オブジェクト・ペイロードの説明を通知します。
    - 詳細 - 最高。アダプターは、イベント、およびビジネス・オブジェクト・ペイロード全体を通知します。
6. 「OK」をクリックします。

### 結果

イベント・ロギングが使用可能になります。CEI 項目は、トレース・ログ・ファイル内で参照できます。または、管理コンソール内で **Common Base Event Browser** を使用して表示することもできます。

---

## 第 8 章 トラブルシューティングおよびサポート

一般的なトラブルシューティング技術やセルフ・ヘルプ情報は、問題の確認および早期解決に役立ちます。

---

### Log and Trace Analyzerのサポート

アダプターが作成するログ・ファイルおよびトレース・ファイルは、Log and Trace Analyzerで表示できます。

Log and Trace Analyzerは、ログ・ファイルおよびトレース・ファイルをフィルターに掛けて、アダプター用のメッセージおよびトレース情報を分離することができます。またログ・ビューアーを使用した場合、アダプターのメッセージおよびトレース情報を強調表示することもできます。

フィルターおよび強調表示用のアダプターのコンポーネント ID は、文字列 PSFTRA とアダプター ID プロパティの値からなるストリングです。例えば、アダプター ID プロパティが、001 に設定されている場合、コンポーネント ID は、PSFTRA001 となります。

同じアダプターを複数インスタンス実行する場合、アダプター ID プロパティの最初の 7 文字は、必ずインスタンスごとに固有にし、ログおよびトレース情報を特定のアダプター・インスタンスに相互に関連付けられるようにしてください。アダプター ID プロパティの最初の 7 文字を固有にすることにより、そのアダプターの複数インスタンスのコンポーネント ID も固有になり、アダプターの特定インスタンスにログおよびトレース情報を相互に関連付けることができます。アダプター ID プロパティの長さが、ログおよびトレース・ファイルのフィルター処理にどのように関係するかを示すため、2 つのインスタンスの WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise のアダプター ID プロパティを 001 と 002 に設定するとします。これらのインスタンスのコンポーネント ID、PSFTRA001 および PSFTRA002 は、短いので固有性を保つことができ、別のアダプター・インスタンスとして区別することができます。しかし、もっと長いアダプター ID プロパティのインスタンスの場合、互いを区別できなくなります。例えば、2 つのインスタンスのアダプター ID プロパティを、Instance01 および Instance02 に設定するとします。この場合、各アダプター・インスタンスのログおよびトレース情報を個別に調べることはできなくなります。これは、両方のインスタンスのコンポーネント ID が PSFTRAIInstanc に切り詰められるためです。

Outbound 処理については、アダプター ID プロパティは、リソース・アダプターおよび Managed Connection Factory プロパティ・グループの両方にあります。外部サービス・ウィザードを使用して、Outbound 処理用にアダプターを構成後、アダプター ID プロパティを更新する場合、リソース・アダプター・プロパティと Managed Connection Factory プロパティを矛盾がないように必ず設定し、ログおよびトレース・エントリーのマーキングが不整合にならないようにしてください。Inbound 処理については、アダプター ID プロパティは、リソース・アダプター・プロパティのみに設定されますので、このような配慮は不要です。

アダプター ID プロパティーについて詳しくは、以下を参照してください。115 ページの『アダプター ID (AdapterID)』。Log and Trace Analyzerについて詳しくは、<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wasinfo/v6r0/topic/org.eclipse.hyades.log.ui.doc.user/concepts/cltviews.htm>を参照してください。

---

## ロギングおよびトレースの構成

要件に合うようロギングおよびトレースを構成します。アダプターのロギングを使用可能にし、イベント処理の状況を制御します。アダプターのログ・ファイル名およびトレース・ファイル名を変更して、ほかのログ・ファイルおよびトレース・ファイルと区別します。

このタスクを実行する理由および時期

### ロギング・プロパティーの構成

管理コンソールを使用して、ロギングを使用可能にして、ログの出力プロパティー (ログの場所、詳細レベル、および出力フォーマットなど) を設定します。

このタスクを実行する理由および時期

アダプターでモニター対象イベントをログに記録できるようにするには、モニターしたいサービス・コンポーネントのイベント・ポイント、イベントごとに必要となる詳細レベル、およびイベントをログにパブリッシュするのに使用する出力のフォーマットを指定する必要があります。管理コンソールを使用して、次のタスクを実行します。

- 特定のイベント・ログを使用可能または使用不可に設定する
- ログの詳細レベルを指定する
- ログ・ファイルの保管場所および保有数を指定する
- ログ出力のフォーマットを指定する

ログ・アナライザー出力のフォーマットを設定する場合、ログ・アナライザー・ツールを使用してトレース出力を開くことができます。ログ・アナライザー・ツールは、プロセス・サーバーに組み込まれたアプリケーションです。このツールは、ログ・アナライザーのマージ機能を使用できるため、異なる 2 つのサーバー・プロセスのトレースを相関させる場合に便利です。

サービス・コンポーネントやイベント・ポイントなどのプロセス・サーバー上でのモニターについて詳しくは、プロセス・サーバーの資料を参照してください。

ログ構成は、静的または動的に変更できます。アプリケーション・サーバーを開始または再始動すると、静的構成が有効になります。動的構成変更 (またはランタイム構成変更) は、即時適用されます。

ログが作成されると、そのログの詳細レベルが構成データから設定されます。特定のログ名に対して、構成データが使用可能でない場合、そのログのレベルは、ログの親から取得されます。親ログに構成データが存在しない場合、そのログの親が確認される、という具合に、ヌル以外のレベル値があるログが見つかるまでツリーを上昇します。ログのレベルを変更すると、その変更はログの子に伝搬されます。また、必要に応じて、ログの子からその子へと変更が再帰的に伝搬されます。



ロギングを使用可能にし、ログの出力プロパティを設定するには、次の手順を実行します。

#### このタスクの手順

1. 管理コンソールのナビゲーション・ペインで、「サーバー」 → 「アプリケーション・サーバー」をクリックします。
2. 作業したいサーバーの名前をクリックします。
3. 「トラブルシューティング」で「ログおよびトレース」をクリックします。
4. 「ログ詳細レベルの変更」をクリックします。
5. 変更を有効にするには、以下を行います。
  - 構成を静的に変更する場合は、「構成」タブをクリックします。
  - 構成を動的に変更する場合は、「ランタイム」タブをクリックします。
6. 変更したいロギング・レベルのパッケージの名前をクリックします。  
WebSphere Adapters 用のパッケージ名は、**com.ibm.j2ca.\***で始まります。
  - アダプター基本コンポーネントの場合、**com.ibm.j2ca.base.\***を選択します。
  - アダプター基本コンポーネントおよびデプロイされたすべてのアダプターの場合、**com.ibm.j2ca.\***を選択します。
  - Adapter for PeopleSoft Enterprise の場合のみ、**com.ibm.j2ca.peoplesoft.\*** パッケージを選択します。
7. ロギング・レベルを選択します。

| ロギング・レベル | 説明   |
|----------|--|
| 致命的      | タスクを続行できない。または、コンポーネントが機能しない。  |
| 重大       | タスクを続行できないが、コンポーネントは機能する。このロギング・レベルには、差し迫った致命的エラーを示す (すなわち、リソースが枯渇寸前であることを強く示唆する) 状況も含まれる。 |
| 警告       | 潜在的なエラーが発生したか、重大エラーが差し迫っている。このロギング・レベルには、例えばリソース・リークの可能性など、進行性のフォールトを示す状況も含まれる。            |
| 監査       | サーバーの状態やリソースに影響を与える重大なイベントが発生した。   |
| 情報       | タスクが稼働中である。このロギング・レベルには、タスクの全体的な進行を概説する一般情報が含まれる。  |
| 構成       | 構成の状況が報告されるか、構成変更が発生した。  |
| 詳細       | サブタスクが稼働中である。このロギング・レベルには、サブタスクの進行を詳細に説明した一般情報が含まれる。                                       |

8. 「適用」をクリックします。
9. 「OK」をクリックします。
10. 静的な構成変更を有効にするには、プロセス・サーバーを停止し、再始動します。

#### 結果

これ以降、ログ項目には、選択したアダプター・コンポーネントについての指定したレベルの情報が格納されます。

## ログ・ファイル名およびトレース・ファイル名の変更

アダプター・ログおよびトレース情報を他のプロセスとは分離して保持するには、管理コンソールを使用してファイル名を変更します。デフォルトでは、プロセス・サーバー上にあるすべてのプロセスおよびアプリケーションのログ情報およびトレース情報は、それぞれ `SystemOut.log` ファイルおよび `trace.log` ファイルに書き込まれます。

### 始める前に

アダプター・モジュールをアプリケーション・サーバーにデプロイした後は、ログ・ファイル名およびトレース・ファイル名はいつでも変更できます。

### このタスクを実行する理由および時期

ログ・ファイルおよびトレース・ファイルは、静的または動的に変更できます。アプリケーション・サーバーを開始または再始動すると、静的変更が有効になります。動的変更またはランタイム構成変更は、即座に適用されます。

ログ・ファイルおよびトレース・ファイルは、`install_root/profiles/profile_name/logs/server_name` フォルダーにあります。

ログ・ファイル名およびトレース・ファイル名を設定または変更するには、以下の手順を使用します。

### このタスクの手順

1. 管理コンソールのナビゲーション・ペインで、「アプリケーション」>「エンタープライズ・アプリケーション」を選択します。
2. 「エンタープライズ・アプリケーション」リストから、アダプター・アプリケーションの名前をクリックします。これは、アダプターの EAR ファイルの名前から `.ear` ファイル拡張子を除いたものです。例えば、EAR ファイルの名前が `Accounting_OutboundApp.ear` である場合は、**Accounting\_OutboundApp** をクリックします。
3. 「構成」タブの「モジュール」リストから、「モジュールの管理」をクリックします。
4. モジュールのリストで、IBM WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise をクリックします。
5. 「構成」タブの「追加プロパティ」の下で、「リソース・アダプター」をクリックします。
6. 「構成」タブの「追加プロパティ」の下で、「カスタム・プロパティ」をクリックします。
7. 「カスタム・プロパティ」テーブル内で、ファイル名を変更します。
  - a. 「**logFilename**」をクリックして、ログ・ファイルの名前を変更します。あるいは、「**traceFilename**」をクリックして、トレース・ファイルの名前を変更します。
  - b. 「構成」タブで、「値」フィールドに新しい名前を入力します。デフォルトでは、ログ・ファイルの名前は `SystemOut.log`、トレース・ファイルの名前は `trace.log` になります。

- c. 「適用」または「OK」をクリックします。変更内容がローカル・マシン上に保存されます。
- d. 変更内容をサーバー上のマスター構成に保存するには、次のいずれかの手順を実行します。
  - **静的変更:** サーバーを停止してから再始動します。この方法では、変更を行うことは可能ですが、サーバーを停止してから始動するまで、行った変更は有効になりません。
  - **動的変更:** 「カスタム・プロパティ」テーブルの上にあるメッセージ・ボックス内にある「保管」リンクをクリックします。プロンプトが出されたら、再度「保管」をクリックします。この方法では、行った変更をすぐに有効にすることができます。

---

## First Failure Data Capture (FFDC) サポート

アダプターは、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus の実行時に発生する障害や重大なソフトウェアの問題の永続的な記録を提供する First Failure Data Capture (FFDC) をサポートしています。

FFDC 機能はバックグラウンドで実行され、実行時に発生するイベントやエラーを収集します。この機能はさまざまな障害を相互に関連付ける手段を提供するため、この機能を利用すると、ソフトウェアは、ある 1 つの障害の影響をその原因に結びつけ、その結果、障害の根本原因を素早く突き止めることが容易になります。取り込まれたデータは、アダプターの実行時に発生した例外処理を識別するときに使用できます。

問題が発生すると、例外メッセージおよびコンテキスト・データがアダプターによってログ・ファイルに書き込まれます。このログ・ファイルは `install_root/profiles/profile/logs/ffdc` ディレクトリーに置かれます。

First Failure Data Capture (FFDC) について詳しくは、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus の資料を参照してください。

---

## ビジネス・フォールト

アダプターは、予想される例外で Outbound サービス記述で宣言されている例外であるビジネス・フォールトか、インポートをサポートします。ビジネス・フォールトは、ビジネス・ルールの違反または制約違反が原因で、ビジネス・プロセスの予測可能なポイントに発生します。

WebSphere Process Server と WebSphere Enterprise Service Bus は、他のタイプのフォールトをサポートしますが、アダプターが生成するのはビジネス・フォールトのみです。本書では、これらを単にフォールトと呼びます。すべての例外がフォールトになるわけではありません。フォールトは、アクション可能なエラー、つまり、アプリケーションの終了を必要としないリカバリー・アクションが可能なエラーに対して生成されます。例えば、アダプターで必要なデータが含まれていない Outbound 処理のビジネス・オブジェクトを受け取るか、あるいはアダプターで Outbound 処理中にエラーが発生した場合に、アダプターによってフォールトが生成されます。

## フォールト・ビジネス・オブジェクト

外部サービス・ウィザードは、アダプターが生成できる各フォールト用のビジネス・オブジェクトを作成します。さらに、このウィザードは `WBIFault` スーパーセット・ビジネス・オブジェクトを作成します。このオブジェクトには、図 25 に示されているとおり、すべてのフォールトに共通の `message`、`errorCode`、および `primarySetKey` 属性など情報が含まれています。

| WBIFault      |                       |
|---------------|-----------------------|
| message       | string                |
| errorCode     | string                |
| primaryKeySet | PrimaryKeyPairType [] |

図 25. `WBIFault` ビジネス・オブジェクトの構造

一部のフォールトには、エラーについて追加情報を示す `matchCount` 属性が含まれます。その他の場合、`WBIFault` にフォールトを扱うためのすべての情報が含まれません。

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterpriseは、すべてのフォールトを使用可能にします。フォールトの手動構成は不要です。アダプターは、ウィザードが作成する以下のフォールト・ビジネス・オブジェクトを提供します。

- `DuplicateRecordFault`

`Create` 操作の処理時に、重複したレコードが検出されると、アダプターはこのフォールトをスローします。

- `MatchesExceededLimitFault`

`RetrieveAll` 操作を処理する場合に、データベース照会から返されたレコード数が、対話仕様内のレコードの `MaxRecords` プロパティの値を超えると、アダプターはこのフォールトをスローします。

返されるレコード数を増やすには、`RetrieveAll` 操作の対話仕様プロパティ内の `MaxRecords` プロパティの値を増やします。

このフォールトのビジネス・オブジェクトには 1 つのプロパティ `matchCount` があり、このプロパティは一致した数が含まれるストリングです。

- `MissingDataFault`

`Outbound` 操作に渡されたビジネス・オブジェクトに必要なすべての属性がない場合、アダプターはこのフォールトをスローします。このフォールトは、`Create`、`Delete`、`Update`、`Retrieve`、`ApplyChanges` および `Exists` の各操作に対して発生する可能性があります。

- `MultipleMatchingRecordsFault`

`Retrieve` または `Update` 操作の処理時に、照会が、指定されたキーのレコードを複数返した場合に、アダプターがこのフォールトをスローします。このフォールト

トのビジネス・オブジェクトには 1 つのプロパティ `matchCount` があり、このプロパティは一致した数が含まれるストリングです。

- **RecordNotFoundFault**

データ検索時に、指定されたキーのレコードがデータベース内に見つからなかった場合に、アダプターはこのフォールトをスローします。このフォールトは、Delete、Update、Retrieve および RetrieveAll の各操作に対して発生する可能性があります。

---

## Outbound 処理中のメモリー限界例外の解決

Outbound 処理中に発生するメモリー限界例外は、JVM 最大ヒープ・メモリー・サイズを増やすと解決できます。

### このタスクを実行する理由および時期

50 個の Outbound 要求を並行処理していると、アダプターはメモリー不足エラーを生成する場合があります。このエラーを回避または解決するには、JVM 最大ヒープのデフォルト値を増やします。

### このタスクの手順

1. 管理コンソールで、サーバーの名前をクリックします。
2. 「サーバー・インフラストラクチャー (Server Infrastructure)」の下の「構成」タブで、「Java およびプロセス定義 (Java and Process Definition)」>「プロセス定義 (Process Definition)」をクリックします。
3. 「Java 仮想マシン」をクリックします。
4. 「最大ヒープ・サイズ (maximum heap size)」フィールドで、1024 を入力します。
5. 「OK」をクリックします。
6. 「保管」をクリックします。
7. ログアウトしてから、サーバーを再始動します。

### 結果

最大ヒープ・サイズのデフォルト値が増えます。

---

## セルフ・ヘルプ・リソース

IBM ソフトウェア・サポートのリソースは、最新のサポート情報やテクニカル文書を手入手したり、サポート・ツールやフィックスをダウンロードしたり、WebSphere Adapters の問題を回避したりするために使用することができます。また、セルフ・ヘルプ・リソースは、アダプターに関連する問題を診断するのに役立ち、IBM ソフトウェア・サポートへの連絡方法についての情報を提供します。

## サポート Web サイト

WebSphere Adapters ソフトウェアのサポート Web サイト (<http://www.ibm.com/software/integration/wbiadapters/support/>) では、WebSphere Adapters の学習、使用、およびトラブルシューティングに役立つ多数のリソースへのリンクを提供しています。以下の種類のリソースがあります。

- フラッシュ (製品に関する警告)
- 製品のインフォメーション・センター、マニュアル、IBM Redbooks<sup>®</sup>、およびホワイト・ペーパーなどの技術情報
- 研修関連
- テクニカル・ノート

## 推奨フィックス

適用することが望ましい推奨フィックスのリストは、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?fdoc=aimadp&rs=695&uid=swg27010397> にあります。

## テクニカル・ノート

テクニカル・ノートは、Adapter for PeopleSoft Enterprise に関する最新の資料を提供します。以下のトピックがあります。

- 問題とそれに対する現在使用可能な解決策
- よくある質問に対する答え
- アダプターのインストール、構成、使用法、トラブルシューティングに関する手引きとなる情報
- *IBM* ソフトウェア・サポート・ハンドブック

WebSphere Adapters のテクニカル・ノートのリストについては、以下のアドレスにアクセスしてください。

<http://www.ibm.com/support/search.wss?tc=SSMKUK&rs=695&rank=8&dc=DB520+D800+D900+DA900+DA800+DB560&dtm>

## IBM Support Assistant のプラグイン

Adapter for PeopleSoft Enterprise では、IBM Support Assistant のプラグインを提供します。これは、無料の保守容易性ローカル・ソフトウェア・ワークベンチです。プラグインは、動的トレース・フィーチャーをサポートします。IBM Support Assistant のインストールおよび使用については、以下のアドレスにアクセスしてください。

<http://www.ibm.com/software/support/isa/>



## 第 9 章 参照情報

ユーザーの作業をサポートするための参照情報として、外部サービス・ウィザードによって生成されるビジネス・オブジェクトに関する詳細情報や、アダプター・プロパティに関する情報（双方向変換をサポートするアダプター・プロパティなど）を提供しています。また、アダプターのメッセージや関連製品情報についても示しています。

### ビジネス・オブジェクト情報

ビジネス・オブジェクトとは、アダプターがビジネス・オブジェクトを処理する方法やビジネス・オブジェクトに関して実行される操作に関するアプリケーション固有の情報を含む構造です。ビジネス・オブジェクトの名前は、アダプターの命名規則に従って、外部サービス・ウィザードによって生成されます。

### アプリケーション固有情報

アプリケーション固有の情報 (ASI) とは、Adapter for PeopleSoft Enterprise 用のビジネス・オブジェクトの処理方法を指定するメタデータです。

外部サービス・ウィザードがビジネス・オブジェクトを生成すると、ビジネス・オブジェクト定義が自動的に生成され、XSD (XML スキーマ定義) ファイルとして保存されます。ビジネス・オブジェクト定義には、そのビジネス・オブジェクトに関するアプリケーション固有の情報が含まれています。生成済みの ASI を変更する場合、メタデータ値を WebSphere Integration Developer の「Business Integration」パースペクティブの「プロパティ」タブから変更するか、またはビジネス・オブジェクト・エディターを使用して変更できます。

Adapter for PeopleSoft Enterprise は、アプリケーション固有情報 (ASI) を使用して、Create、Retrieve、Update、Delete の各操作のための照会を作成します。

### ビジネス・オブジェクト・レベルのメタデータ

ビジネス・オブジェクト・レベルのメタデータは、ビジネス・オブジェクトの最上位ラッパーを定義します。以下の表では、ビジネス・オブジェクト・メタデータの各エレメントについて説明します。

表 4. ビジネス・オブジェクト用メタデータ

| メタデータ・エレメント    | 説明   |
|----------------|--|
| ObjectName     | PeopleSoft アプリケーション内の対応するオブジェクト (すなわち PeopleTools で定義された Component Interface 名)。これは、最上位のビジネス・オブジェクトの場合のみ設定します。 |
| GetCurrentItem | true に設定されていると、有効な日付の項目のみが操作中に取得されます。  |



表 4. ビジネス・オブジェクト用メタデータ (続き)

| メタデータ・エレメント             | 説明   |
|-------------------------|--|
| IgnoreEffectiveSequence | true に設定されていると、実効シーケンス番号は無視され、レコードが最低の索引 (現在の発効日を持つ) か、最高の索引 (最も古い発効日を持つ) に挿入されます。このパラメーターを設定する場合、InsAtCurrentEffDtPos か InsAtOldestEffDtPos のいずれかも設定する必要があります。このパラメーターが使用されるのは、有効な日付の項目の場合のみです。 |
| InsAtOldestEffDtPos     | true に設定された場合、正しくない索引 (負数) が PeopleTools API の getEffectiveItemNum() によって返されると、アダプターは、最高の索引 (最も古い発効日を持つ) で行を挿入します。このパラメーターを設定した場合、InsAtCurrentEffDtPos を設定しないでください。                              |
| InsAtCurrentEffDtPos    | true に設定された場合、正しくない索引 (負数) が PeopleTools API の getEffectiveItemNum() によって戻されると、アダプターは、最低の索引 (ゼロ) (現在の発効日を持つ) で行を挿入します。このパラメーターを設定した場合、InsAtOldestEffDtPos を設定しないでください。                           |
| StatusColumnName        | 削除を実行するために使用されるプロパティ。これは、最上位のビジネス・オブジェクトの場合のみ設定します。  |
| StatusValue             | 非アクティブまたは削除済みであるビジネス・オブジェクトを識別します。これは、最上位のビジネス・オブジェクトの場合のみ設定します。   |

## プロパティ・レベルのメタデータ

プロパティ・レベルのメタデータは、ビジネス・オブジェクトのプロパティを定義します。プロパティは、単純なストリング型とすることも、子オブジェクトまたは子オブジェクトの配列を表わす複合タイプのプロパティとすることもできます。以下の表では、複合プロパティ (子) または構造/テーブル・プロパティ (子オブジェクトの配列) のメタデータ・エレメントについて説明します。

表 5. プロパティのメタデータ

| メタデータ・エレメント       | 説明   |
|-------------------|--|
| PrimaryKey        | Component Interface の GetKey/CreateKey 属性または子コレクション内のキー。   |
| FindKey           | Component Interface 内の FindKey 属性。   |
| EffectiveDate     | Component Interface 内の EffectiveDate 属性  |
| EffectiveSequence | Component Interface 内の EffectiveSequence 属性  |
| KeepRelations     | アダプターが更新操作を実行する際に、子オブジェクトの処理に影響します。このパラメーターが有効で、操作中にアダプターが親の欠落した子オブジェクトを検出した場合、その子オブジェクトは削除されず、オブジェクト間の関係が保たれます。 |
| UID               | ビジネス・オブジェクト内のキー属性にアダプターが値を設定するかどうかを決定します。true に設定されている場合、アダプターはこうしたキーに値を設定しませんが、PeopleCode にキーの値を自動的に生成させます。     |
| Getter            | プロパティの値の読み取りに使用された get メソッドの名前。  |
| Setter            | プロパティの値の設定に使用された set メソッドの名前。  |

## サポートされる操作

操作とは、Outbound 処理中に PeopleSoft Enterprise サーバーに対してアダプターが実行できるアクションのことです。操作の名前は通常、アダプターが実行するアクションのタイプ (*create* または *update* など) を示します。

以下の表では、アダプターがサポートする操作を定義してあります。

表 6. ビジネス・オブジェクトのサポートされる操作

| 操作            | 定義   |
|---------------|--|
| Create        | アダプターは、PeopleSoft コンポーネントにアクセスして、基本キーのアプリケーション固有情報セットを持つ属性から値を取得します。次に、ObjectName アプリケーション固有情報に指定された値を使用して、対応する Component Interface のインスタンスを作成します。さらに Component Interface の対応する Create Keys に属性値を設定します。空の Component Interface が作成され、作成されたその Component Interface にアダプターがすべてのビジネス・オブジェクト・データをマップします。またデータのマッピング時、アダプターは、階層内の単純属性のすべてのデータを送信して、階層内のそれぞれの子オブジェクトに対応する項目 (有効な日付の有効な順序の子レコードを含む) も作成します。 |
| Retrieve      | アダプターは、PeopleSoft コンポーネントにアクセスして、基本キーのアプリケーション固有情報セットを持つ属性から値を取得します。次に、ObjectName アプリケーション固有情報に指定された値を使用して、対応する Component Interface のインスタンスを作成します。さらに Component Interface の対応する Get Keys に属性値を設定します。次にアダプターは、コンポーネント・データをビジネス・オブジェクト階層にマップします。データ・マッピングには子オブジェクトが組み込まれます。  |
| RetrieveAll   | これは、Retrieve 操作として機能しますが、同じ PeopleSoft コンポーネントの複数インスタンスを取得できるという点が異なります。   |
| Update        | アダプターは、PeopleSoft からオブジェクトを取得し、ターゲットのビジネス・オブジェクトと比較します。オブジェクトの処理は次のように行われます。比較において PeopleSoft に余分の子オブジェクトが検出されると、その子オブジェクトは削除されません。比較において PeopleSoft に欠落した子が検出されると、その子が作成されます。比較において PeopleSoft で更新された子オブジェクトが検出されると、それらが更新されます。   |
| Exists        | アダプターは Exist 操作を Retrieve 操作の場合と同様に処理しますが、取得されたデータがビジネス・オブジェクトに取り込まれない点が異なります。PeopleSoft でのオブジェクトの存在がチェックされるだけです。  |
| Delete        | アプリケーション固有メタデータ・エレメント StatusColumnName および StatusValue に設定された値に基づいて、アダプターはビジネス・オブジェクトを非アクティブに更新します。Delete 操作は、最上位オブジェクトに対してのみ実行できます。PeopleSoft ではオブジェクトが物理的に削除されることがないので、非アクティブのオブジェクトは PeopleSoft データベースに残ります。  |
| Apply Changes | Apply Changes では、PeopleSoft コンポーネントに実行された操作に基づいてそのコンポーネントが更新されます。サポートされる操作は Create、Update、および Delete です。   |

## カスタム・イベント・プロジェクト用 PeopleCode

Inbound 処理をサポートするには、2 つの PeopleCode 関数が必要です。Inbound サポート用に PeopleTools でカスタム・イベント・プロジェクトを作成する場合、これらの PeopleCode 関数をこのプロジェクトに追加します。

以下の PeopleCode には、イベントをイベント・テーブルにパブリッシュするため  
 に使用される IBMPublishEvent 関数と IBMPublishFutureDatedEvent 関数が含まれま  
 す。これらの関数の呼び出しは、目的の PeopleSoft コンポーネントの  
 SavePostChange という PeopleCode 関数を使用して行います。

```

/* IBM event notification */
Component string &KEYSTRING;
Component string &KEYNAME;
Component array of string &KEYARRAY;
Component string &KEYDELIM;
Component string &IBMVERB;
Local Record &IBMREC;

Function IBMPublishFutureDatedEvent(&BO, &KEYS, &EFFDATE)
; /* == create a new record object for cw_event_tbl == */
  &IBMREC = CreateRecord(Record.IBM_EVENT_TBL);
  /* ===== KEYS ===== */
  /* composing keys and values in name value format */
  &KEYSTRING = "";
  &KEYDELIM = ".";
  &KEYARRAY = Split(&KEYS, &KEYDELIM);
  &LEN = &KEYARRAY.Len;
  For &I = 1 To &LEN;
  /* get keys and values */
  /* get rid of record name */
    &POS1 = Find(".", &KEYARRAY [&I]);
    &L1 = Len(&KEYARRAY [&I]);
    &POS2 = &L1 - &POS1;
    &KEYNAME = Right(&KEYARRAY [&I], &POS2);
  /*****The code below will remove special characters and****/
  /*****adjust the characters' case to ensure it is same as the*****/
  /*****attribute name in the business object definition****/
  /*****Start*****/
    &LLen = Len(&KEYNAME);
    &sOrigString = &KEYNAME;
    &sNewString = "";
    &lCtr2 = 1;
    &isSpecialChar = "true";
    For &lCtr = 1 To &LLen;
      &sChar = Substring(&sOrigString, &lCtr, 1);
      If (&sChar = "A" Or
          &sChar = "a" Or
          &sChar = "B" Or
          &sChar = "b" Or
          &sChar = "C" Or
          &sChar = "c" Or
          &sChar = "D" Or
          &sChar = "d" Or
          &sChar = "E" Or
          &sChar = "e" Or
          &sChar = "F" Or
          &sChar = "f" Or
          &sChar = "G" Or
          &sChar = "g" Or
          &sChar = "H" Or
          &sChar = "h" Or
          &sChar = "I" Or
          &sChar = "i" Or
          &sChar = "J" Or
          &sChar = "j" Or
          &sChar = "K" Or
          &sChar = "k" Or
          &sChar = "L" Or
          &sChar = "l" Or
          &sChar = "M" Or
          &sChar = "m" Or
          &sChar = "N" Or
          &sChar = "n" Or
          &sChar = "O" Or
          &sChar = "o" Or
          &sChar = "P" Or
          &sChar = "p" Or
          &sChar = "Q" Or
          &sChar = "q" Or
          &sChar = "R" Or
          &sChar = "r" Or
          &sChar = "S" Or
          &sChar = "s" Or
          &sChar = "T" Or
          &sChar = "t" Or
          &sChar = "U" Or
          &sChar = "u" Or
          &sChar = "V" Or
          &sChar = "v" Or
          &sChar = "W" Or
          &sChar = "w" Or
          &sChar = "X" Or
          &sChar = "x" Or

```

```

        &sChar = "y" Or
        &sChar = "Y" Or
        &sChar = "z" Or
        &sChar = "Z" Or
        &sChar = "1" Or
        &sChar = "2" Or
        &sChar = "3" Or
        &sChar = "4" Or
        &sChar = "5" Or
        &sChar = "6" Or
        &sChar = "7" Or
        &sChar = "8" Or
        &sChar = "9" Or
        &sChar = "0") Then
    If (&isSpecialChar = "true") Then
        &sNewString = &sNewString | Upper(&sChar);
        &isSpecialChar = "false";
    Else
        &sNewString = &sNewString | Lower(&sChar);
    End-If;
Else
    &isSpecialChar = "true";
End-If;
End-For;
&KEYNAME = &sNewString;
/*****End*****/
&KEYSTRING = &KEYSTRING | &KEYNAME | "=" | @&KEYARRAY [&I] | &KEYDELIM
End-For;
&KEYSTRING = RTrim(&KEYSTRING, ":");
&IBMREC.IBM_OBJECT_KEYS.Value = &KEYSTRING;
/*****==== VERB *****/
/* verb determination uses variable &IBMVERB */
Evaluate %Mode
When = "A"
    &IBMVERB = "Create";
    Break;
When = "U"
    &IBMVERB = "Update";
    Break;
When = "L"
    &IBMVERB = "Update";
    Break;
When = "C"
    &IBMVERB = "Update";
    Break;
When-Other
    &IBMVERB = "Retrieve";
End-Evaluate;
&IBMREC.IBM_OBJECT_VERB.Value = &IBMVERB;
/* ===== EVENT_ID GEN ===== */
/* create event id */
&NEWNUM = GetNextNumber(IBM_FETCH_ID.IBM_NEXT_EVENT_ID, 99999);
/* only use newnum if no error generating next number */
If &NEWNUM > 0 Then
    &IBMREC.IBM_EVENT_ID.Value = &NEWNUM;
Else
    &IBMREC.IBM_EVENT_ID.Value = %Datetime;
End-If; /*Support for Future Effective Date - The adapter will poll such events when the date arrives*/
If &EFFDATE > %Datetime Then
    &IBMREC.IBM_EVENT_DTTM.Value = &EFFDATE;
    &IBMREC.IBM_EVENT_STATUS.Value = "99";
Else
    &IBMREC.IBM_EVENT_DTTM.Value = %Datetime;
    &IBMREC.IBM_EVENT_STATUS.Value = "0";
End-If; /*===== INSERT EVENT INTO IBM_EVENT_TBL =====*/
/* insert row into table using record object*/
&IBMREC.IBM_OBJECT_NAME.Value = &BO;
&IBMREC.Insert();
End-Function;

Function IBMPublishEvent(&BO, &KEYS);
    /* == create a new record object for cw_event_tbl == */
    &IBMREC = CreateRecord(Record.IBM_EVENT_TBL);

    /* ===== KEYS ===== */
    /* composing keys and values in name value format */
    &KEYSTRING = "";
    &KEYDELIM = ":";
    &KEYARRAY = Split(&KEYS, &KEYDELIM);
    &LEN = &KEYARRAY.Len;

    For &I = 1 To &LEN;
        /* get keys and values */
        /* get rid of record name */

```

```

&POS1 = Find(".", &KEYARRAY [&I]);
&L1 = Len(&KEYARRAY [&I]);
&POS2 = &L1 - &POS1;
&KEYNAME = Right(&KEYARRAY [&I], &POS2);

/****The code below will remove special characters and
****adjust the characters' case to ensure it is same as the
****attribute name in the business object definition****/
/****Start****/
&lLen = Len(&KEYNAME);
&sOrigString = &KEYNAME;
&sNewString = "";
&lCtr2 = 1;
&isSpecialChar = "true";
For &lCtr = 1 To &lLen;
    &sChar = Substring(&sOrigString, &lCtr, 1);
    If (&sChar = "A" Or
        &sChar = "a" Or
        &sChar = "B" Or
        &sChar = "b" Or
        &sChar = "C" Or
        &sChar = "c" Or
        &sChar = "D" Or
        &sChar = "d" Or
        &sChar = "E" Or
        &sChar = "e" Or
        &sChar = "F" Or
        &sChar = "f" Or
        &sChar = "G" Or
        &sChar = "g" Or
        &sChar = "H" Or
        &sChar = "h" Or
        &sChar = "I" Or
        &sChar = "i" Or
        &sChar = "J" Or
        &sChar = "j" Or
        &sChar = "K" Or
        &sChar = "k" Or
        &sChar = "L" Or
        &sChar = "l" Or
        &sChar = "M" Or
        &sChar = "m" Or
        &sChar = "N" Or
        &sChar = "n" Or
        &sChar = "O" Or
        &sChar = "o" Or
        &sChar = "P" Or
        &sChar = "p" Or
        &sChar = "Q" Or
        &sChar = "q" Or
        &sChar = "R" Or
        &sChar = "r" Or
        &sChar = "S" Or
        &sChar = "s" Or
        &sChar = "T" Or
        &sChar = "t" Or
        &sChar = "U" Or
        &sChar = "u" Or
        &sChar = "V" Or
        &sChar = "v" Or
        &sChar = "W" Or
        &sChar = "w" Or
        &sChar = "X" Or
        &sChar = "x" Or

```

```

        &sChar = "Y" Or
        &sChar = "y" Or
        &sChar = "Z" Or
        &sChar = "z" Or
        &sChar = "1" Or
        &sChar = "2" Or
        &sChar = "3" Or
        &sChar = "4" Or
        &sChar = "5" Or
        &sChar = "6" Or
        &sChar = "7" Or
        &sChar = "8" Or
        &sChar = "9" Or
        &sChar = "0") Then
    If (&isSpecialChar = "true") Then
        &sNewString = &sNewString | Upper(&sChar);
        &isSpecialChar = "false";
    Else
        &sNewString = &sNewString | Lower(&sChar);
    End-If;
Else
    &isSpecialChar = "true";
End-If;
End-For;
&KEYNAME = &sNewString;

    /*****End*****/
    &KEYSTRING = &KEYSTRING | &KEYNAME | "=" | @&KEYARRAY [&I] | &KEYDELIM
End-For;
&KEYSTRING = RTrim(&KEYSTRING, ":");

&IBMREC.IBM_OBJECT_KEYS.Value = &KEYSTRING;

/*===== VERB =====*/
/* verb determination uses variable &IBMVERB */
Evaluate %Mode
When = "A"
    &IBMVERB = "Create";
    Break;
When = "U"
    &IBMVERB = "Update";
    Break;
When = "L"
    &IBMVERB = "Update";
    Break;
When = "C"
    &IBMVERB = "Update";
    Break;
When-Other
    &IBMVERB = "Retrieve";
End-Evaluate;

&IBMREC.IBM_OBJECT_VERB.Value = &IBMVERB;

/* ===== EVENT_ID GEN ===== */
/* create event_id */

&NEWNUM = GetNextNumber(IBM_FETCH_ID.IBM_NEXT_EVENT_ID, 99999);

/* only use newnum if no error generating next number */

If &NEWNUM > 0 Then
    &IBMREC.IBM_EVENT_ID.Value = &NEWNUM;
Else

```

```

        &IBMREC.IBM_EVENT_ID.Value = %Datetime;
End-If;

&IBMREC.IBM_EVENT_DTTM.Value = %Datetime;

/* ===== EVENT_STATUS ===== */
/* Validate and set event status &IBMSTATUS - list values if date is ok */
&IBMREC.IBM_EVENT_STATUS.Value = "0";

/* ===== INSERT EVENT INTO IBM_EVENT_TBL ===== */
/* insert row into table using record object */

&IBMREC.IBM_OBJECT_NAME.Value = &B0;

&IBMREC.Insert();

End-Function;

```

---

## Outbound 構成プロパティ

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise には、オブジェクトやサービスを生成したり作成したりするときに、外部サービス・ウィザードを使用して設定する、いくつかの種類の Outbound 接続構成プロパティがあります。リソース・アダプターおよび管理接続ファクトリーのプロパティは、WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus にモジュールをデプロイした後に、WebSphere Integration Developer または管理コンソールを使用して変更できますが、外部サービス・ウィザードの接続プロパティは、デプロイメント後に変更することはできません。

### プロパティの詳細についてのガイド

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise を構成するときに使用されるプロパティは、リソース・アダプター・プロパティや Managed Connection Factory プロパティなど、それぞれの構成プロパティのトピックに記載されている表で詳細に説明されています。これらの表を使用しやすくするため、参照する各行の情報を以下に説明します。

次の表では、構成プロパティの表に表示される場合がある各行の意味を説明します。



| 行         | 説明  |
|-----------|---|
| 必須        | <p>アダプターが動作するためには、必須フィールド (プロパティ) に値が必要です。必須プロパティに対しては、外部サービス・ウィザードがデフォルト値を提供する場合があります。</p> <p>外部サービス・ウィザードの必須フィールドからデフォルト値を除去しても、デフォルト値は変更されません。必須フィールドに値がまったく入っていないと、外部サービス・ウィザードは、その割り当て済みのデフォルト値を使用してフィールドを処理し、そのデフォルト値は管理コンソールにも表示されます。</p> <p>可能な値は「はい」および「いいえ」です。</p> <p>プロパティは、他のプロパティが特定の値の場合のみ必須となることがあります。その場合は、表にこの依存関係が記載されます。以下に例を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• EventQueryType プロパティが Dynamic に設定された場合は「はい」</li> <li>• Oracle データベースの場合は「はい」</li> </ul>  |
| 使用可能な値    | プロパティで選択可能な値をリストして説明します。  |
| デフォルト     | <p>外部サービス・ウィザードによって設定される事前定義値。プロパティが必須の場合は、デフォルト値を受け入れるか、ユーザーが値を指定する必要があります。プロパティにデフォルト値がない場合、表には「デフォルト値なし」と記載されます。</p> <p>None という語は、受け入れ可能なデフォルト値です。デフォルト値がないという意味ではありません。</p>  |
| 計測単位      | プロパティの計測単位を指定します (例: キロバイト、秒)。  |
| プロパティ・タイプ | <p>プロパティ・タイプを示します。有効なプロパティ・タイプとしては、以下のものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Boolean</li> <li>• String</li> <li>• Integer</li> </ul>   |
| 使用法       | <p>プロパティに適用される場合がある使用の条件または制限について記述します。制限の記載例を以下に示します。</p> <p>Rational® Application Developer for WebSphere Software バージョン 6.40 以前では、パスワードに以下の制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 大文字である必要があります</li> <li>• 長さが 8 文字である必要があります</li> </ul> <p>Rational Application Developer for WebSphere Software バージョン 6.40 よりも後のバージョンでは、パスワードの制限が以下のように変更されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 大文字小文字を区別しません</li> <li>• 長さが 40 文字まで可能です</li> </ul> <p>このセクションでは、このプロパティに影響を及ぼす他のプロパティ、またはこのプロパティによって影響を受ける他のプロパティをリストし、その条件付き関係の内容を説明します。</p> |
| 例         | <p>プロパティ値のサンプルを示します。例:</p> <p>「言語が JA (日本語) に設定された場合、コード・ページ番号は 8000 に設定されます。」</p>  |

| 行       | 説明   |
|---------|--|
| グローバル化  | グローバル化されたプロパティには各国語サポートが備わっているので、値を各国語で設定できます。<br><br>有効な値は「はい」および「いいえ」です。   |
| BIDI 対応 | プロパティが双方向 (bidi) 処理でサポートされるかどうかを示します。双方向処理とは、1 つのファイルに左から右 (ヘブライ語やアラビア語など) と右から左 (URL やファイル・パスなど) の両方の意味内容を含むデータを処理するタスクを指します。<br><br>有効な値は「はい」および「いいえ」です。 |

## 外部サービス・ウィザード用の接続プロパティ

外部サービス・ウィザード用の接続プロパティは、外部サービス・ウィザードと、ウィザードによるメタデータの取得元のアプリケーションとの間の接続を確立するために使用されます。こうしたプロパティは、接続構成、双方向 (bidi) プロパティ、ロギング・オプションなどを指定します。

**注:** 双方向スクリプトを使用する接続プロパティを設定する場合は、そのプロパティのために入力する双方向スクリプトの形式を示す値を設定する必要があります。

外部サービス接続プロパティと各プロパティの目的を以下の表にまとめます。各プロパティの完全な説明は、表に続くセクションで説明します。

表7. の外部サービス接続プロパティ

| プロパティ名                         | 説明  |
|--------------------------------|---|
| 『Component Interface JAR ファイル』 | 統合トランザクションのターゲットとなる PeopleSoft コンポーネントとの接続を確立するために、アダプターが使用する PeopleSoft Enterprise Component Interface を指定します。 |
| 113 ページの『ホスト名』                 | PeopleSoft Enterprise をホストするサーバーの名前またはアドレスを指定します。   |
| 113 ページの『パスワード』                | PeopleSoft Enterprise サーバー上のアダプターのユーザー・アカウントのパスワードを指定します。   |
| 113 ページの『ポート番号』                | PeopleSoft Enterprise がクライアント要求を listen するように構成されているポート番号。  |
| 114 ページの『ビジネス・オブジェクト名の接頭語』     | 生成されたビジネス・オブジェクトに追加される接頭語を指定します。  |
| 114 ページの『ユーザー名』                | PeopleSoft Enterprise サーバー上でアダプターが使用するユーザー・アカウントの名前。  |

### Component Interface JAR ファイル

このプロパティは、統合トランザクションのターゲットとなる PeopleSoft コンポーネントとの接続を確立するために、アダプターが使用する PeopleSoft Enterprise Component Interface を指定します。

表 8. Component Interface JAR ファイルの詳細

|            |  |
|------------|--|
| 必須         | はい   |
| デフォルト      | デフォルトなし  |
| プロパティー・タイプ | String   |
| 使用法        | 目的の PeopleSoft Enterprise コンポーネントと接続するためにアダプターが使用する JAR ファイルの名前。 |
| 例          | CWYES_PeopleSoft¥connectorModule¥WbiEvent.jar                    |
| グローバル化     | いいえ  |
| BIDI 対応    | いいえ  |

## ホスト名

このプロパティーは、PeopleSoft Enterprise をホストするサーバーの名前またはアドレスを指定します。

表 9. 「ホスト名」の詳細

|            |  |
|------------|--|
| 必須         | はい   |
| デフォルト      | デフォルト値なし   |
| プロパティー・タイプ | String   |
| 使用法        | PeopleSoft Enterprise をホストするサーバーを名前か IP アドレスのいずれかで識別します。 |
| 例          | 9.26.248.202   |
| グローバル化     | いいえ  |
| BIDI 対応    | いいえ  |

## パスワード

このプロパティーは、PeopleSoft Enterprise サーバー上のアダプターのユーザー・アカウントのパスワードを指定します。

表 10. パスワードの詳細

|            |  |
|------------|--|
| 必須         | はい   |
| デフォルト      | デフォルト値なし   |
| プロパティー・タイプ | String   |
| 使用法        | 制限 (大/小文字、長さ、および文字) は、PeopleSoft Enterprise のバージョンによって決まります。 |
| グローバル化     | はい   |
| BIDI 対応    | はい   |

## ポート番号

PeopleSoft Enterprise がクライアント要求を listen するように構成されているポート番号。

表 11. ポート番号の詳細

|          |                             |
|----------|-----------------------------|
| 必須       | はい                          |
| デフォルト    | 外部サービス・ウィザードの実行時に入力したポート番号。 |
| プロパティタイプ | Integer                     |
| 例        | 9000                        |
| グローバル化   | いいえ                         |
| BIDI 対応  | いいえ                         |

## ビジネス・オブジェクト名の接頭語

このプロパティは、生成されたビジネス・オブジェクトに追加される接頭語を指定します。

表 12. 接頭語の詳細

|          |  |
|----------|--|
| 必須       | いいえ  |
| デフォルト    | デフォルトなし  |
| プロパティタイプ | String   |
| 使用法      | このプロパティにより、同じ PeopleSoft Component Interface に対して生成される各種のビジネス・オブジェクト間で区別することができます。 |
| 例        | 接頭語として IB を使用した場合、このサービスによって生成されるビジネス・オブジェクトはすべて、この接頭語を使用して命名されます。                 |
| グローバル化   | はい   |
| BIDI 対応  | いいえ  |

## ユーザー名

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise サーバー上でアダプターが使用するユーザー・アカウントの名前を指定します。

表 13. ユーザー名の詳細

|          |  |
|----------|--|
| 必須       | はい   |
| デフォルト    | デフォルト値なし   |
| プロパティタイプ | String   |
| 使用法      | 制限 (大/小文字、長さ、および文字) は、PeopleSoft Enterprise のバージョンによって決まります。 |
| 例        | DV1  |
| グローバル化   | はい   |
| BIDI 対応  | はい   |

## リソース・アダプター・プロパティ

リソース・アダプター・プロパティでは、アダプターの一般的な操作を制御します。アダプターの構成時にリソース・アダプター・プロパティを設定する場合

は、外部サービス・ウィザードを使用します。アダプターのデプロイ後にこれらのプロパティを変更する場合は、管理コンソールを使用します。

ロギングおよびトレースに関する次のプロパティは、非推奨になっています。

- ログ・ファイル最大サイズ
- ログ・ファイル名
- ログ・ファイル数
- トレース・ファイル最大サイズ
- トレース・ファイル名
- トレース・ファイル数

以下の表には、リソース・アダプター・プロパティおよびその目的がリストしてあります。各プロパティの完全な説明は、表に続くセクションで説明します。

表 14. Adapter for PeopleSoft Enterpriseのリソース・アダプター・プロパティ

| 名前   |                       | 説明   |
|--|-----------------------|--|
| ウィザード内                                     | 管理コンソール内              |  |
| アダプター ID                                   | AdapterID             | PMI イベントのアダプター・インスタンス、ロギングおよびトレースのアダプター・インスタンスを識別する場合に使用します。               |
| ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」として記述する | HideConfidentialTrace | ログおよびトレース・ファイルへの書き込み時に、ユーザー・データを「X」のストリングで記述し、潜在的な機密データを隠すようにするかどうかを指定します。 |
| (なし)                                       | enableHASupport       | このプロパティは変更しないでください。  |
| (なし)                                       | ログ・ファイル最大サイズ          | 非推奨  |
| (なし)                                       | LogFilename           | 非推奨  |
| (なし)                                       | ログ・ファイル数              | 非推奨  |
| (なし)                                       | トレース・ファイル最大サイズ        | 非推奨  |
| (なし)                                       | トレース・ファイル名            | 非推奨  |
| (なし)                                       | トレース・ファイル数            | 非推奨  |

## アダプター ID (AdapterID)

このプロパティは、アダプターの特定のデプロイメント (インスタンス) を識別します。

表 15. 「アダプター ID」の詳細

|           |        |
|-----------|--------|
| 必須        | はい     |
| デフォルト     | 001    |
| プロパティ・タイプ | String |

表 15. 「アダプター ID」の詳細 (続き)

|                |  |
|----------------|--|
| <p>使用法</p>     | <p>このプロパティは、ログおよびトレース・ファイル内のアダプター・インスタンスを識別し、また、アダプターのモニター時にアダプター・インスタンスを識別する場合に役立ちます。アダプター ID は、アダプター固有の ID、PSFTRA と共に使用され、Log and Trace Analyzer ツールによって使用されるコンポーネント名を構成します。例えば、アダプター ID プロパティが、001 に設定されている場合、コンポーネント ID は、PSFTRA001 となります。</p> <p>同じアダプターを複数インスタンス実行する場合、アダプター ID プロパティの最初の 7 文字は、必ずインスタンスごとに固有にし、ログおよびトレース情報を特定のアダプター・インスタンスに相互に関連付けられるようにしてください。アダプター ID プロパティの最初の 7 文字を固有にすることにより、そのアダプターの複数インスタンスのコンポーネント ID も固有になり、アダプターの特定インスタンスにログおよびトレース情報を相互に関連付けることができます。</p> <p>アダプター ID プロパティの長さが、ログおよびトレース・ファイルのフィルター処理にどのように関係するかを示すため、2 つのインスタンスの WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise のアダプター ID プロパティを 001 と 002 に設定するとします。これらのインスタンスのコンポーネント ID、PSFTRA001 および PSFTRA002 は、短いので固有性を保つことができ、別のアダプター・インスタンスとして区別することができます。しかし、もっと長いアダプター ID プロパティのインスタンスの場合、互いを区別できなくなります。例えば、2 つのインスタンスのアダプター ID プロパティを、Instance01 および Instance02 に設定するとします。この場合、各アダプター・インスタンスのログおよびトレース情報を個別に調べることはできなくなります。これは、両方のインスタンスのコンポーネント ID が PSFTRAInstanc に切り詰められるためです。</p> <p>Inbound 処理の場合、このプロパティの値は、リソース・アダプター・レベルで設定されます。Outbound 処理の場合、リソース・アダプター・レベルと Managed Connection Factory レベルの両方で設定できます。外部サービス・ウィザードを使用して、アダプターを Outbound 処理用に構成した後、リソース・アダプター・プロパティおよび Managed Connection Factory プロパティを個別に設定できます。WebSphere Integration Developer アセンブリー・エディターまたは管理コンソールを使用して、これらのプロパティを再設定する場合、ログおよびトレース・エントリーのマーキングが不整合にならないように、矛盾がない設定になっていることを確認してください。</p> |
| <p>グローバル化</p>  | <p>はい</p>  |
| <p>BIDI 対応</p> | <p>いいえ</p>   |

### 「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」と記述する」 (HideConfidentialTrace) プロパティ

このプロパティは、ログおよびトレース・ファイル中のユーザー・データを「X」のストリングに置換し、潜在的な機密データが許可なく外部に漏れないようにします。

表 16. 「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」と記述する」の詳細

|                  |                       |
|------------------|-----------------------|
| <p>必須</p>        | <p>いいえ</p>            |
| <p>使用可能な値</p>    | <p>True<br/>False</p> |
| <p>デフォルト</p>     | <p>False</p>          |
| <p>プロパティ・タイプ</p> | <p>Boolean</p>        |

表 16. 「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」と記述する」の詳細 (続き)

|         |   |
|---------|---|
| 使用法     | このプロパティを True に設定すると、アダプターでは、ログおよびトレース・ファイルに書き込む時に、ユーザー・データを「X」のストリングに置換します。<br><br>Inbound 処理の場合、このプロパティの値は、リソース・アダプター・レベルで設定されます。Outbound 処理の場合は、リソース・アダプター・レベルと Managed Connection Factory レベルの両方で設定できます。外部サービス・ウィザード を使用して、アダプターを Outbound 処理用に構成した後、リソース・アダプター・プロパティおよび Managed Connection Factory プロパティを個別に設定できます。WebSphere Integration Developer アセンブリー・エディターまたは管理コンソールを使用して、これらのプロパティを再設定する場合、ログおよびトレース・エントリーのマーキングが不整合にならないように、矛盾がない設定になっていることを確認してください。 |
| グローバル化  | いいえ   |
| BIDI 対応 | いいえ   |

### 高可用性サポートを使用可能にする (Enable high availability support) (enableHASupport)

このプロパティは変更しないでください。true に設定してください。

### ログ・ファイルの最大サイズ (Log file maximum size) (LogFileMaxSize)

このプロパティでは、ログ・ファイルのサイズをキロバイト単位で指定します。

表 17. 「ログ・ファイルの最大サイズ (Log file maximum size)」の詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 必須        | いいえ  |
| デフォルト     | 0  |
| プロパティ・タイプ | Integer  |
| 使用法       | ログ・ファイルがその最大サイズに到達すると、アダプターは新規のログ・ファイルの使用を開始します。ファイル・サイズを 0 と指定するか、最大サイズを指定しなかった場合、そのファイルに最大サイズはありません。 |
| グローバル化    | はい   |
| BIDI 対応   | いいえ  |

### ログ・ファイル名 (LogFilename)

このプロパティでは、ログ・ファイルの絶対パス名を指定します。

表 18. 「ログ・ファイル名」の詳細

|           |                |
|-----------|----------------|
| 必須        | いいえ            |
| デフォルト     | デフォルト値なし       |
| プロパティ・タイプ | String         |
| 使用法       | このプロパティは非推奨です。 |
| グローバル化    | はい             |
| BIDI 対応   | はい             |



## ログ・ファイルの数 (Log number of files) (LogNumberOfFiles)

このプロパティーでは、ログ・ファイルの数を指定します。

表 19. 「ログ・ファイルの数 (Log number of files)」の詳細

|            |   |
|------------|---|
| 必須         | いいえ   |
| デフォルト      | 1   |
| プロパティー・タイプ | Integer   |
| 使用法        | ログ・ファイルがその最大サイズに到達すると、アダプターは別のログ・ファイルの使用を開始します。値を指定しなかった場合、アダプターはログ・ファイルを 1 つ作成します。 |
| グローバル化     | はい  |
| BIDI 対応    | いいえ   |

## トレース・ファイルの最大サイズ (Trace file maximum size) (TraceFileMaxSize)

このプロパティーでは、トレース・ファイルのサイズをキロバイト単位で指定します。

表 20. 「トレース・ファイルの最大サイズ (Trace file maximum size)」の詳細

|            |                                       |
|------------|---------------------------------------|
| 必須         | いいえ                                   |
| デフォルト      | 0                                     |
| プロパティー・タイプ | Integer                               |
| 使用法        | 値を指定しなかった場合は、トレース・ファイルに最大サイズが設定されません。 |
| グローバル化     | はい                                    |
| BIDI 対応    | いいえ                                   |

## トレース・ファイル名 (TraceFilename)

このプロパティーでは、トレース・ファイルの絶対パスを指定します。

表 21. 「トレース・ファイル名」の詳細

|            |                 |
|------------|-----------------|
| 必須         | いいえ             |
| デフォルト      | デフォルト値なし        |
| 計測単位       | キロバイト           |
| プロパティー・タイプ | String          |
| 使用法        | このプロパティーは非推奨です。 |
| グローバル化     | はい              |
| BIDI 対応    | はい              |

## トレース・ファイルの数 (Trace number of files) (TraceNumberOfFiles)

このプロパティーでは、使用するトレース・ファイルの数を指定します。トレース・ファイルがその最大サイズに到達すると、アダプターは別のトレース・ファイルの使用を開始します。

表 22. 「トレース・ファイルの数 (Trace number of files)」の詳細

|            |  |
|------------|--|
| 必須         | いいえ                                    |
| デフォルト      | 1                                      |
| プロパティー・タイプ | Integer                                |
| 使用法        | 値を指定しなかった場合、アダプターはトレース・ファイルを 1 つ使用します。 |
| グローバル化     | はい                                     |
| BIDI 対応    | いいえ                                    |

## Managed Connection Factory プロパティー

Managed Connection Factory プロパティーは、PeopleSoft Enterprise サーバーとの Outbound 接続を作成するために、アダプターによって実行時に使用されます。

以下の表は、Outbound 通信用の Managed Connection Factory プロパティーをリストおよび説明しています。Managed Connection Factory プロパティーは、外部サービス・ウィザードまたは管理コンソール (デプロイメント後) のいずれかを使用して設定します。

各プロパティーの詳細については、表の後のセクションで説明します。続くセクションのプロパティーの詳細表を読む方法については、『プロパティー詳細についてのガイド (Guide to understanding property details)』を参照してください。

**注:** こうしたプロパティーを、外部サービス・ウィザードは Managed Connection Factory プロパティーとして参照し、管理コンソール は (J2C) 接続ファクトリー・プロパティーとして参照します。

表 23. Managed Connection Factory プロパティー

| ウィザード内                                     | 管理コンソール内              | 説明   |
|--|-----------------------|--|
| アダプター ID                                   | AdapterID             | PMI イベントのアダプター・インスタンス、ロギングおよびトレースのアダプター・インスタンスを識別する場合に使用します。                 |
| 失敗した接続をテストするための Component Interface        | PingCompInterface     | PeopleSoft Enterprise サーバーへの接続を検証するためにアダプターが使用する Component Interface を指定します。 |
| ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」として記述する | HideConfidentialTrace | ログおよびトレース・ファイルへの書き込み時に、ユーザー・データを「X」のストリングで記述し、潜在的な機密データを隠すようにするかどうかを指定します。   |
| ホスト名                                       | HostName              | PeopleSoft Enterprise をホストするサーバーの名前またはアドレスを指定します。                            |

表 23. Managed Connection Factory プロパティ (続き)

|                            |          |  |
|----------------------------|----------|--|
| 123 ページの『言語 (Language)』    | Language | PeopleSoft Enterprise サーバーにログオンするためにアダプターが使用する言語コードを指定します。 |
| 123 ページの『パスワード (Password)』 | Password | PeopleSoft Enterprise サーバー上のアダプターのユーザー・アカウントのパスワードを指定します。  |
| 123 ページの『ポート番号 (Port)』     | Port     | PeopleSoft Enterprise サーバーにアクセスするためにアダプターが使用するポート番号。       |
| 124 ページの『ユーザー名 (UserName)』 | UserName | PeopleSoft Enterprise サーバー上でアダプターが使用するユーザー・アカウントの名前。       |

### アダプター ID (AdapterID)

このプロパティは、アダプターの特定のデプロイメント (インスタンス) を識別します。

表 24. 「アダプター ID」の詳細

|           |        |
|-----------|--------|
| 必須        | はい     |
| デフォルト     | 001    |
| プロパティ・タイプ | String |

表 24. 「アダプター ID」の詳細 (続き)

|         |   |
|---------|---|
| 使用法     | <p>このプロパティは、ログおよびトレース・ファイル内のアダプター・インスタンスを識別し、また、アダプターのモニター時にアダプター・インスタンスを識別する場合に役立ちます。アダプター ID は、アダプター固有の ID、PSFTRA と共に使用され、Log and Trace Analyzer ツールによって使用されるコンポーネント名を構成します。例えば、アダプター ID プロパティが、001 に設定されている場合、コンポーネント ID は、PSFTRA001 となります。</p> <p>同じアダプターを複数インスタンス実行する場合、アダプター ID プロパティの最初の 7 文字は、必ずインスタンスごとに固有にし、ログおよびトレース情報を特定のアダプター・インスタンスに相互に関連付けられるようにしてください。アダプター ID プロパティの最初の 7 文字を固有にすることにより、そのアダプターの複数インスタンスのコンポーネント ID も固有になり、アダプターの特定インスタンスにログおよびトレース情報を相互に関連付けることができます。</p> <p>アダプター ID プロパティの長さが、ログおよびトレース・ファイルのフィルター処理にどのように関係するかを示すため、2 つのインスタンスの WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise のアダプター ID プロパティを 001 と 002 に設定するとします。これらのインスタンスのコンポーネント ID、PSFTRA001 および PSFTRA002 は、短いので固有性を保つことができ、別のアダプター・インスタンスとして区別することができます。しかし、もっと長いアダプター ID プロパティのインスタンスの場合、互いを区別できなくなります。例えば、2 つのインスタンスのアダプター ID プロパティを、Instance01 および Instance02 に設定するとします。この場合、各アダプター・インスタンスのログおよびトレース情報を個別に調べることはできなくなります。これは、両方のインスタンスのコンポーネント ID が PSFTRAInstanc に切り詰められるためです。</p> <p>Inbound 処理の場合、このプロパティの値は、リソース・アダプター・レベルで設定されます。Outbound 処理の場合は、リソース・アダプター・レベルと Managed Connection Factory レベルの両方で設定できます。外部サービス・ウィザードを使用して、アダプターを Outbound 処理用に構成した後、リソース・アダプター・プロパティおよび Managed Connection Factory プロパティを個別に設定できます。WebSphere Integration Developer アセンブリー・エディターまたは管理コンソールを使用して、これらのプロパティを再設定する場合、ログおよびトレース・エントリーのマーキングが不整合にならないように、矛盾がない設定になっていることを確認してください。</p> |
| グローバル化  | はい  |
| BIDI 対応 | いいえ   |

### 失敗した接続をテストするための Component Interface (PingComplInterface)

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise サーバーへの接続を検証するためにアダプターが使用する、PeopleSoft Enterprise Component Interface の名前を指定します。

表 25. 失敗した接続をテストするための Component Interface の詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 必須        | はい   |
| デフォルト     | リスト内の最初の Component Interface の名前。                                |
| プロパティ・タイプ | String   |
| 使用法       | PeopleSoft Enterprise アプリケーション内の既存の Component Interface 名を指定します。 |
| 例         | WBI_CUSTOMER_CI  |
| グローバル化    | いいえ  |

表 25. 失敗した接続をテストするための *Component Interface* の詳細 (続き)

|         |     |
|---------|-----|
| BIDI 対応 | いいえ |
|---------|-----|

### 「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」と記述する」 (HideConfidentialTrace) プロパティ

このプロパティは、ログおよびトレース・ファイル中のユーザー・データを「X」のストリングに置換し、潜在的な機密データが許可なく外部に漏れないようにします。

表 26. 「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」と記述する」の詳細

|           |   |
|-----------|---|
| 必須        | いいえ   |
| 使用可能な値    | True<br>False   |
| デフォルト     | False   |
| プロパティ・タイプ | Boolean   |
| 使用法       | このプロパティを True に設定すると、アダプターでは、ログおよびトレース・ファイルに書き込む時に、ユーザー・データを「X」のストリングに置換します。<br><br>Inbound 処理の場合、このプロパティの値は、リソース・アダプター・レベルで設定されます。Outbound 処理の場合は、リソース・アダプター・レベルと Managed Connection Factory レベルの両方で設定できます。外部サービス・ウィザード を使用して、アダプターを Outbound 処理用に構成した後、リソース・アダプター・プロパティおよび Managed Connection Factory プロパティを個別に設定できます。WebSphere Integration Developer アセンブリー・エディターまたは管理コンソールを使用して、これらのプロパティを再設定する場合、ログおよびトレース・エントリーのマーキングが不整合にならないように、矛盾がない設定になっていることを確認してください。 |
| グローバル化    | いいえ   |
| BIDI 対応   | いいえ   |

### ホスト名 (HostName)

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise をホストするサーバーの名前またはアドレスを指定します。

表 27. 「ホスト名」の詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 必須        | はい   |
| デフォルト     | デフォルト値なし   |
| プロパティ・タイプ | String   |
| 使用法       | PeopleSoft Enterprise をホストするサーバーを名前か IP アドレスのいずれかで識別します。 |
| 例         | 9.26.248.202   |
| グローバル化    | いいえ  |
| BIDI 対応   | いいえ  |

## 言語 (Language)

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise サーバーにログオンするためにアダプターが使用する言語コードを指定します。

表 28. 言語の詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 必須        | はい   |
| デフォルト     | 言語プロパティのデフォルト値は、システム・ロケールに基づいています。               |
| プロパティ・タイプ | String   |
| 使用法       | サポートされる各言語の前には 3 文字の言語コードが付いています。言語自体は括弧内に示されます。 |
| 例         | システム・ロケールが英語の場合は、このプロパティの値は ENG (英語) です。         |
| グローバル化    | いいえ  |
| BIDI 対応   | いいえ  |

## パスワード (Password)

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise サーバー上のアダプターのユーザー・アカウントのパスワードを指定します。

表 29. パスワードの詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 必須        | はい   |
| デフォルト     | デフォルト値なし   |
| プロパティ・タイプ | String   |
| 使用法       | 制限 (大/小文字、長さ、および文字) は、PeopleSoft Enterprise のバージョンによって決まります。 |
| グローバル化    | いいえ  |
| BIDI 対応   | いいえ  |

## ポート番号 (Port)

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise サーバーにアクセスするためにアダプターが使用するポート番号を指定します。

表 30. ポート番号の詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 必須        | はい   |
| デフォルト     | 外部サービス・ウィザードを使用してオブジェクトおよびサービスをディスカバーする時点で入力するポート番号。 |
| プロパティ・タイプ | Integer  |
| 例         | 9000   |
| グローバル化    | いいえ  |
| BIDI 対応   | いいえ  |

## ユーザー名 (UserName)

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise サーバー上でアダプターが使用するユーザー・アカウントの名前を指定します。

表 31. ユーザー名の詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 必須        | はい   |
| デフォルト     | デフォルト値なし   |
| プロパティ・タイプ | String   |
| 使用法       | 制限 (大/小文字、長さ、および文字) は、PeopleSoft Enterprise のバージョンによって決まります。 |
| 例         | DV1  |
| グローバル化    | いいえ  |
| BIDI 対応   | いいえ  |

## 対話仕様プロパティ

対話仕様プロパティは、操作での対話を制御します。アダプターの構成時には、外部サービス・ウィザードによって対話仕様プロパティを設定します。基本的に、それらのプロパティを変更する必要はありません。ただし、Outbound 操作のいくつかのプロパティは、ユーザーが変更できます。例えば、RetrieveAll 操作から完全な情報が返されない場合に、RetrieveAll 操作で返されるレコードの最大数を指定する対話仕様プロパティの値を増やすことができます。アプリケーションのデプロイ後にこれらのプロパティを変更するには、WebSphere Integration Developer のアセンブリ・エディターを使用します。プロパティは、インポートのメソッド・バインディングにあります。

表 32 に、ユーザーが設定する対話仕様プロパティのリストおよび説明を示します。表の後のセクションにあるプロパティ詳細表の読み方については、110 ページの『プロパティの詳細についてのガイド』を参照してください。

表 32. Adapter for PeopleSoft Enterprise の対話仕様プロパティ

| プロパティ名                  |              | 説明                          |
|-------------------------|--------------|-----------------------------|
| ウィザード内                  | アセンブリ・エディター内 |                             |
| RetrieveAll 操作のレコードの最大数 | MaxRecords   | RetrieveAll 操作時に返すレコードの最大数。 |

## RetrieveAll 操作のレコードの最大数 (MaxRecords)

このプロパティは、RetrieveAll 操作時に返すレコードの最大数を指定します。

表 33. RetrieveAll 操作のレコードの最大数の詳細

|       |   |
|-------|---|
| 必須    | はい  |
| デフォルト | 100   |
| 使用法   | PeopleSoft Enterprise のヒット数が RetrieveAll 操作プロパティのレコードの最大数の値を超えると、アダプターはエラーを返します。アダプターは、メモリー不足の問題を回避するために、このプロパティを使用します。 |



表 33. RetrieveAll 操作のレコードの最大数の詳細 (続き)

|               |         |
|---------------|---------|
| プロパティタイプ      | Integer |
| グローバル化されるかどうか | いいえ     |
| BIDI 対応       | いいえ     |

## Inbound 構成プロパティ

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise には、オブジェクトやサービスを生成したり作成したりするときに、外部サービス・ウィザードを使用して設定する、いくつかの種類 Inbound 接続構成プロパティがあります。リソース・アダプターおよびアクティベーション・スペックのプロパティは、モジュールをデプロイした後に WebSphere Integration Developer 管理コンソールまたは 管理コンソール を使用して変更できますが、外部サービス・ウィザードの接続プロパティは、デプロイメント後に変更することはできません。

### プロパティの詳細についてのガイド

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise を構成するときに使用されるプロパティは、リソース・アダプター・プロパティや Managed Connection Factory プロパティなど、それぞれの構成プロパティのトピックに記載されている表で詳細に説明されています。これらの表を使用しやすくするため、参照する各行の情報を以下に説明します。

次の表では、構成プロパティの表に表示される場合がある各行の意味を説明します。

| 行      | 説明   |
|--------|--|
| 必須     | <p>アダプターが動作するためには、必須フィールド (プロパティ) に値が必要です。必須プロパティに対しては、外部サービス・ウィザードがデフォルト値を提供する場合があります。</p> <p>外部サービス・ウィザードの必須フィールドからデフォルト値を除去しても、デフォルト値は変更されません。必須フィールドに値がまったく入っていないと、外部サービス・ウィザードは、その割り当て済みのデフォルト値を使用してフィールドを処理し、そのデフォルト値は管理コンソールにも表示されます。</p> <p>可能な値は「はい」および「いいえ」です。</p> <p>プロパティは、他のプロパティが特定の値の場合のみ必須となることがあります。その場合は、表にこの依存関係が記載されます。以下に例を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• EventQueryType プロパティが Dynamic に設定された場合は「はい」</li> <li>• Oracle データベースの場合は「はい」</li> </ul> |
| 使用可能な値 | プロパティで選択可能な値をリストして説明します。   |

| 行          | 説明  |
|------------|---|
| デフォルト      | <p>外部サービス・ウィザードによって設定される事前定義値。プロパティーが必須の場合は、デフォルト値を受け入れるか、ユーザーが値を指定する必要があります。プロパティーにデフォルト値がない場合、表には「デフォルト値なし」と記載されます。</p> <p>None という語は、受け入れ可能なデフォルト値です。デフォルト値がないという意味ではありません。</p>  |
| 計測単位       | <p>プロパティーの計測単位を指定します (例: キロバイト、秒)。</p>  |
| プロパティー・タイプ | <p>プロパティー・タイプを示します。有効なプロパティー・タイプとしては、以下のものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Boolean</li> <li>• String</li> <li>• Integer</li> </ul>   |
| 使用法        | <p>プロパティーに適用される場合がある使用の条件または制限について記述します。制限の記載例を以下に示します。</p> <p>Rational Application Developer for WebSphere Software バージョン 6.40 以前では、パスワードに以下の制限があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 大文字である必要があります</li> <li>• 長さが 8 文字である必要があります</li> </ul> <p>Rational Application Developer for WebSphere Software バージョン 6.40 よりも後のバージョンでは、パスワードの制限が以下のように変更されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 大文字小文字を区別しません</li> <li>• 長さが 40 文字まで可能です</li> </ul> <p>このセクションでは、このプロパティーに影響を及ぼす他のプロパティー、またはこのプロパティーによって影響を受ける他のプロパティーをリストし、その条件付き関係の内容を説明します。</p> |
| 例          | <p>プロパティー値のサンプルを示します。例:</p> <p>「言語が JA (日本語) に設定された場合、コード・ページ番号は 8000 に設定されます。」</p>   |
| グローバル化     | <p>グローバル化されたプロパティーには各国語サポートが備わっているので、値を各国語で設定できます。</p> <p>有効な値は「はい」および「いいえ」です。</p>  |
| BIDI 対応    | <p>プロパティーが双方向 (bidi) 処理でサポートされるかどうかを示します。双方向処理とは、1 つのファイルに左から右 (ヘブライ語やアラビア語など) と右から左 (URL やファイル・パスなど) の両方の意味内容を含むデータを処理するタスクを指します。</p> <p>有効な値は「はい」および「いいえ」です。</p>  |

## 外部サービス・ウィザード用の接続プロパティー

外部サービス・ウィザード用の接続プロパティーは、外部サービス・ウィザードと、ウィザードによるメタデータの取得元のアプリケーションとの間の接続を確立するために使用されます。こうしたプロパティーは、接続構成、双方向 (bidi) プロパティー、ロギング・オプションなどを指定します。

注: 双方向スクリプトを使用する接続プロパティを設定する場合は、そのプロパティのために入力する双方向スクリプトの形式を示す値を設定する必要があります。

外部サービス接続プロパティと各プロパティの目的を以下の表にまとめます。各プロパティの完全な説明は、表に続くセクションで説明します。

表 34. の外部サービス接続プロパティ

| プロパティ名                         | 説明  |
|--------------------------------|---|
| 『Component Interface JAR ファイル』 | 統合トランザクションのターゲットとなる PeopleSoft コンポーネントとの接続を確立するために、アダプターが使用する PeopleSoft Enterprise Component Interface を指定します。 |
| 『ホスト名』                         | PeopleSoft Enterprise をホストするサーバーの名前またはアドレスを指定します。   |
| 128 ページの『パスワード』                | PeopleSoft Enterprise サーバー上のアダプターのユーザー・アカウントのパスワードを指定します。   |
| 128 ページの『ポート番号』                | PeopleSoft Enterprise がクライアント要求を listen するように構成されているポート番号。  |
| 128 ページの『ビジネス・オブジェクト名の接頭語』     | 生成されたビジネス・オブジェクトに追加される接頭語を指定します。  |
| 129 ページの『ユーザー名』                | PeopleSoft Enterprise サーバー上でアダプターが使用するユーザー・アカウントの名前。  |

## Component Interface JAR ファイル

このプロパティは、統合トランザクションのターゲットとなる PeopleSoft コンポーネントとの接続を確立するために、アダプターが使用する PeopleSoft Enterprise Component Interface を指定します。

表 35. Component Interface JAR ファイルの詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 必須        | はい   |
| デフォルト     | デフォルトなし  |
| プロパティ・タイプ | String   |
| 使用法       | 目的の PeopleSoft Enterprise コンポーネントと接続するためにアダプターが使用する JAR ファイルの名前。 |
| 例         | CWYES_PeopleSoft%connectorModule%WbiEvent.jar                    |
| グローバル化    | いいえ  |
| BIDI 対応   | いいえ  |

## ホスト名

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise をホストするサーバーの名前またはアドレスを指定します。

表 36. 「ホスト名」の詳細

|    |    |
|----|----|
| 必須 | はい |
|----|----|

表 36. 「ホスト名」の詳細 (続き)

|           |  |
|-----------|--|
| デフォルト     | デフォルト値なし   |
| プロパティ・タイプ | String   |
| 使用法       | PeopleSoft Enterprise をホストするサーバーを名前か IP アドレスのいずれかで識別します。 |
| 例         | 9.26.248.202   |
| グローバル化    | いいえ  |
| BIDI 対応   | いいえ  |

## パスワード

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise サーバー上のアダプターのユーザー・アカウントのパスワードを指定します。

表 37. パスワードの詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 必須        | はい   |
| デフォルト     | デフォルト値なし   |
| プロパティ・タイプ | String   |
| 使用法       | 制限 (大/小文字、長さ、および文字) は、PeopleSoft Enterprise のバージョンによって決まります。 |
| グローバル化    | はい   |
| BIDI 対応   | はい   |

## ポート番号

PeopleSoft Enterprise がクライアント要求を listen するように構成されているポート番号。

表 38. ポート番号の詳細

|           |                             |
|-----------|-----------------------------|
| 必須        | はい                          |
| デフォルト     | 外部サービス・ウィザードの実行時に入力したポート番号。 |
| プロパティ・タイプ | Integer                     |
| 例         | 9000                        |
| グローバル化    | いいえ                         |
| BIDI 対応   | いいえ                         |

## ビジネス・オブジェクト名の接頭語

このプロパティは、生成されたビジネス・オブジェクトに追加される接頭語を指定します。

表 39. 接頭語の詳細

|       |         |
|-------|---------|
| 必須    | いいえ     |
| デフォルト | デフォルトなし |

表 39. 接頭語の詳細 (続き)

|          |  |
|----------|--|
| プロパティタイプ | String   |
| 使用法      | このプロパティにより、同じ PeopleSoft Component Interface に対して生成される各種のビジネス・オブジェクト間で区別することができます。 |
| 例        | 接頭語として IB を使用した場合、このサービスによって生成されるビジネス・オブジェクトはすべて、この接頭語を使用して命名されます。                 |
| グローバル化   | はい   |
| BIDI 対応  | いいえ  |

## ユーザー名

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise サーバー上でアダプターが使用するユーザー・アカウントの名前を指定します。

表 40. ユーザー名の詳細

|          |  |
|----------|--|
| 必須       | はい   |
| デフォルト    | デフォルト値なし   |
| プロパティタイプ | String   |
| 使用法      | 制限 (大/小文字、長さ、および文字) は、PeopleSoft Enterprise のバージョンによって決まります。 |
| 例        | DV1  |
| グローバル化   | はい   |
| BIDI 対応  | はい   |

## リソース・アダプター・プロパティ

リソース・アダプター・プロパティでは、アダプターの一般的な操作を制御します。アダプターの構成時にリソース・アダプター・プロパティを設定する場合は、外部サービス・ウィザードを使用します。アダプターのデプロイ後にこれらのプロパティを変更する場合は、管理コンソールを使用します。

ロギングおよびトレースに関する次のプロパティは、非推奨になっています。

- ログ・ファイル最大サイズ
- ログ・ファイル名
- ログ・ファイル数
- トレース・ファイル最大サイズ
- トレース・ファイル名
- トレース・ファイル数

以下の表には、リソース・アダプター・プロパティおよびその目的がリストしてあります。各プロパティの完全な説明は、表に続くセクションで説明します。

表 41. Adapter for PeopleSoft Enterpriseのリソース・アダプター・プロパティ

| 名前   |                       | 説明   |
|--|-----------------------|--|
| ウィザード内                                     | 管理コンソール内              |  |
| アダプター ID                                   | AdapterID             | PMI イベントのアダプター・インスタンス、ロギングおよびトレースのアダプター・インスタンスを識別する場合に使用します。               |
| ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」として記述する | HideConfidentialTrace | ログおよびトレース・ファイルへの書き込み時に、ユーザー・データを「X」のストリングで記述し、潜在的な機密データを隠すようにするかどうかを指定します。 |
| (なし)                                       | enableHASupport       | このプロパティは変更しないでください。  |
| (なし)                                       | ログ・ファイル最大サイズ          | 非推奨  |
| (なし)                                       | LogFilename           | 非推奨  |
| (なし)                                       | ログ・ファイル数              | 非推奨  |
| (なし)                                       | トレース・ファイル最大サイズ        | 非推奨  |
| (なし)                                       | トレース・ファイル名            | 非推奨  |
| (なし)                                       | トレース・ファイル数            | 非推奨  |

### アダプター ID (AdapterID)

このプロパティは、アダプターの特定のデプロイメント (インスタンス) を識別します。

表 42. 「アダプター ID」の詳細

|           |        |
|-----------|--------|
| 必須        | はい     |
| デフォルト     | 001    |
| プロパティ・タイプ | String |

表 42. 「アダプター ID」の詳細 (続き)

|                |  |
|----------------|--|
| <p>使用法</p>     | <p>このプロパティは、ログおよびトレース・ファイル内のアダプター・インスタンスを識別し、また、アダプターのモニター時にアダプター・インスタンスを識別する場合に役立ちます。アダプター ID は、アダプター固有の ID、PSFTRA と共に使用され、Log and Trace Analyzer ツールによって使用されるコンポーネント名を構成します。例えば、アダプター ID プロパティが、001 に設定されている場合、コンポーネント ID は、PSFTRA001 となります。</p> <p>同じアダプターを複数インスタンス実行する場合、アダプター ID プロパティの最初の 7 文字は、必ずインスタンスごとに固有にし、ログおよびトレース情報を特定のアダプター・インスタンスに相互に関連付けられるようにしてください。アダプター ID プロパティの最初の 7 文字を固有にすることにより、そのアダプターの複数インスタンスのコンポーネント ID も固有になり、アダプターの特定インスタンスにログおよびトレース情報を相互に関連付けることができます。</p> <p>アダプター ID プロパティの長さが、ログおよびトレース・ファイルのフィルター処理にどのように関係するかを示すため、2 つのインスタンスの WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise のアダプター ID プロパティを 001 と 002 に設定するとします。これらのインスタンスのコンポーネント ID、PSFTRA001 および PSFTRA002 は、短いので固有性を保つことができ、別のアダプター・インスタンスとして区別することができます。しかし、もっと長いアダプター ID プロパティのインスタンスの場合、互いを区別できなくなります。例えば、2 つのインスタンスのアダプター ID プロパティを、Instance01 および Instance02 に設定するとします。この場合、各アダプター・インスタンスのログおよびトレース情報を個別に調べることはできなくなります。これは、両方のインスタンスのコンポーネント ID が PSFTRAInstanc に切り詰められるためです。</p> <p>Inbound 処理の場合、このプロパティの値は、リソース・アダプター・レベルで設定されます。Outbound 処理の場合、リソース・アダプター・レベルと Managed Connection Factory レベルの両方で設定できます。外部サービス・ウィザードを使用して、アダプターを Outbound 処理用に構成した後、リソース・アダプター・プロパティおよび Managed Connection Factory プロパティを個別に設定できます。WebSphere Integration Developer アセンブリー・エディターまたは管理コンソールを使用して、これらのプロパティを再設定する場合、ログおよびトレース・エントリーのマーキングが不整合にならないように、矛盾がない設定になっていることを確認してください。</p> |
| <p>グローバル化</p>  | <p>はい</p>  |
| <p>BIDI 対応</p> | <p>いいえ</p>   |

### 「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」と記述する」 (HideConfidentialTrace) プロパティ

このプロパティは、ログおよびトレース・ファイル中のユーザー・データを「X」のストリングに置換し、潜在的な機密データが許可なく外部に漏れないようにします。

表 43. 「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」と記述する」の詳細

|                  |                       |
|------------------|-----------------------|
| <p>必須</p>        | <p>いいえ</p>            |
| <p>使用可能な値</p>    | <p>True<br/>False</p> |
| <p>デフォルト</p>     | <p>False</p>          |
| <p>プロパティ・タイプ</p> | <p>Boolean</p>        |



表 43. 「ログ・ファイルおよびトレース・ファイルで、ユーザー・データを「XXX」と記述する」の詳細 (続き)

|         |   |
|---------|---|
| 使用法     | このプロパティを True に設定すると、アダプターでは、ログおよびトレース・ファイルに書き込む時に、ユーザー・データを「X」のストリングに置換します。<br><br>Inbound 処理の場合、このプロパティの値は、リソース・アダプター・レベルで設定されます。Outbound 処理の場合は、リソース・アダプター・レベルと Managed Connection Factory レベルの両方で設定できます。外部サービス・ウィザード を使用して、アダプターを Outbound 処理用に構成した後、リソース・アダプター・プロパティおよび Managed Connection Factory プロパティを個別に設定できます。WebSphere Integration Developer アセンブリー・エディターまたは管理コンソールを使用して、これらのプロパティを再設定する場合、ログおよびトレース・エントリーのマーキングが不整合にならないように、矛盾がない設定になっていることを確認してください。 |
| グローバル化  | いいえ   |
| BIDI 対応 | いいえ   |

### 高可用性サポートを使用可能にする (Enable high availability support) (enableHASupport)

このプロパティは変更しないでください。true に設定してください。

### ログ・ファイルの最大サイズ (Log file maximum size) (LogFileMaxSize)

このプロパティでは、ログ・ファイルのサイズをキロバイト単位で指定します。

表 44. 「ログ・ファイルの最大サイズ (Log file maximum size)」の詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 必須        | いいえ  |
| デフォルト     | 0  |
| プロパティ・タイプ | Integer  |
| 使用法       | ログ・ファイルがその最大サイズに到達すると、アダプターは新規のログ・ファイルの使用を開始します。ファイル・サイズを 0 と指定するか、最大サイズを指定しなかった場合、そのファイルに最大サイズはありません。 |
| グローバル化    | はい   |
| BIDI 対応   | いいえ  |

### ログ・ファイル名 (LogFilename)

このプロパティでは、ログ・ファイルの絶対パス名を指定します。

表 45. 「ログ・ファイル名」の詳細

|           |                |
|-----------|----------------|
| 必須        | いいえ            |
| デフォルト     | デフォルト値なし       |
| プロパティ・タイプ | String         |
| 使用法       | このプロパティは非推奨です。 |
| グローバル化    | はい             |
| BIDI 対応   | はい             |

## ログ・ファイルの数 (Log number of files) (LogNumberOfFiles)

このプロパティーでは、ログ・ファイルの数を指定します。

表 46. 「ログ・ファイルの数 (Log number of files)」の詳細

|            |   |
|------------|---|
| 必須         | いいえ   |
| デフォルト      | 1   |
| プロパティー・タイプ | Integer   |
| 使用法        | ログ・ファイルがその最大サイズに到達すると、アダプターは別のログ・ファイルの使用を開始します。値を指定しなかった場合、アダプターはログ・ファイルを 1 つ作成します。 |
| グローバル化     | はい  |
| BIDI 対応    | いいえ   |

## トレース・ファイルの最大サイズ (Trace file maximum size) (TraceFileMaxSize)

このプロパティーでは、トレース・ファイルのサイズをキロバイト単位で指定します。

表 47. 「トレース・ファイルの最大サイズ (Trace file maximum size)」の詳細

|            |                                       |
|------------|---------------------------------------|
| 必須         | いいえ                                   |
| デフォルト      | 0                                     |
| プロパティー・タイプ | Integer                               |
| 使用法        | 値を指定しなかった場合は、トレース・ファイルに最大サイズが設定されません。 |
| グローバル化     | はい                                    |
| BIDI 対応    | いいえ                                   |

## トレース・ファイル名 (TraceFilename)

このプロパティーでは、トレース・ファイルの絶対パスを指定します。

表 48. 「トレース・ファイル名」の詳細

|            |                 |
|------------|-----------------|
| 必須         | いいえ             |
| デフォルト      | デフォルト値なし        |
| 計測単位       | キロバイト           |
| プロパティー・タイプ | String          |
| 使用法        | このプロパティーは非推奨です。 |
| グローバル化     | はい              |
| BIDI 対応    | はい              |

## トレース・ファイルの数 (Trace number of files) (TraceNumberOfFiles)

このプロパティーでは、使用するトレース・ファイルの数を指定します。トレース・ファイルがその最大サイズに到達すると、アダプターは別のトレース・ファイルの使用を開始します。

表 49. 「トレース・ファイルの数 (Trace number of files)」の詳細

|            |  |
|------------|--|
| 必須         | いいえ                                    |
| デフォルト      | 1                                      |
| プロパティー・タイプ | Integer                                |
| 使用法        | 値を指定しなかった場合、アダプターはトレース・ファイルを 1 つ使用します。 |
| グローバル化     | はい                                     |
| BIDI 対応    | いいえ                                    |

## 活動化仕様プロパティー

活動化仕様プロパティーには、エクスポート用の Inbound イベント処理の構成情報が入っています。活動化仕様プロパティーは、外部サービス・ウィザードまたは管理コンソールのいずれかを使用して設定します。

以下の表は、Inbound 通信の活動化仕様プロパティーを示します。各プロパティーの詳細については、表の後のセクションで説明します。表の後のセクションにあるプロパティー詳細表の読み方については、110 ページの『プロパティーの詳細についてのガイド』を参照してください。

表 50. 活動化仕様プロパティー

| 記述名                                 | プロパティー名                    | 目的   |
|-------------------------------------|----------------------------|--|
| イベント・フィルターのアダプター・インスタンス             | AdapterInstanceEventFilter | このアダプター・インスタンスがイベント・ストア内の特定のイベントを処理するかどうかを決定する ID                            |
| イベントを一度のみ送達する                       | AssuredOnceDelivery        | アダプターにより、1 回のイベント送達を確保する機能が提供されるかどうかを指定します。                                  |
| 将来のタイム・スタンプを持つイベントを処理しない            | FilterFutureEvents         | アダプターが各イベントのタイム・スタンプをシステム時刻と比較することによって、将来のイベントをフィルターで除去するかどうかを指定します。         |
| 失敗した接続をテストするための Component Interface | PingCompIntfc              | PeopleSoft Enterprise サーバーへの接続を検証するためにアダプターが使用する Component Interface を指定します。 |
| イベント通知用の Component Interface 名      | EventCIName                | イベント通知用にアダプターが使用する Component Interface を指定します。                               |
| 送達タイプ                               | DeliveryType               | イベントがアダプターによってエクスポートに配信される順序を指定します。  |
| イベント・ストアのキーの区切り文字                   | EventKeyDelimiter          | イベント・テーブル内のオブジェクト・キーの名前と値を指定します。   |

表 50. 活動化仕様プロパティ (続き)

|                               |                          |  |
|-------------------------------|--------------------------|--|
| 処理するイベント・タイプ                  | EventTypeFilter          | どのイベントをアダプターが配信するかをアダプターに示す、区切り文字で区切られているイベント・タイプのリスト。               |
| イベント・タイム・スタンプ用の Java 日付形式     | DateFormat               | イベント・タイム・スタンプを作成するために使用される形式を指定します。                                  |
| 最大接続数                         | MaximumConnections       | アダプターが Inbound イベント送達に使用できる接続の最大数                                    |
| 最小接続数                         | MinimumConnections       | アダプターが Inbound イベント送達に使用できる接続の最小数                                    |
| システム接続を再試行する回数                | RetryLimit               | エラーが発生したあと、アダプターが Inbound 接続の再確立を試行する回数。                             |
| ポーリング期間の間隔                    | ポーリング間隔                  | ポーリング期間中にアダプターが待機する時間の長さ   |
| ポーリング量                        | ポーリング数量                  | 各ポーリング期間中にアダプターがエクスポートに配信するイベント数                                     |
| 開始時に EIS 接続を再試行する             | RetryConnectionOnStartup | アダプターが始動時に PeopleSoft Enterprise サーバー に接続できない場合に、接続を再試行するかどうかを指定します。 |
| 接続が失敗した場合の再試行間隔               | RetryInterval            | Inbound 操作時のエラー後、新規接続を確立しようとする試行間にアダプターが待機する時間の長さ                    |
| ポーリング時にエラーが検出された場合にアダプターを停止する | StopPollingOnError       | ポーリング時にアダプターがエラーを検出した場合、アダプターがイベントのポーリングを停止するかどうかを指定します。             |

### イベント・フィルターのアダプター・インスタンス (AdapterInstanceEventFilter)

このプロパティは、このアダプター・インスタンスがイベント・ストア内の特定のイベントを処理するかどうかを制御します。

表 51. 「イベント・フィルターのアダプター・インスタンス」の詳細

|           |        |
|-----------|--------|
| 必須        | いいえ    |
| デフォルト     | NULL   |
| プロパティ・タイプ | String |

表 51. 「イベント・フィルターのアダプター・インスタンス」の詳細 (続き)

|         |   |
|---------|---|
| 使用法     | <p>このプロパティは、WebSphere Business Integration Adapter for PeopleSoft から WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise にマイグレーションできるようにします。WebSphere Business Integration Adapter for PeopleSoft では、複数のアダプター・インスタンスで同タイプのイベントを処理できるようにして、ボリュームの大きなイベント・タイプのロード・バランシングを行うことができます。ロード・バランシングが不要な場合は、単独のアダプター・インスタンスで特定タイプのすべてのイベントを処理します。このプロパティを利用すれば、現在、connectorID フィルター処理を使用している WBIA のお客様が円滑に JCA にマイグレーションを行うことができます。</p> <p>WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise では、通常、このようなロード・バランシングは必要ありませんが、これをサポートすることによって、イベントをイベント・ストアに書き込むデータベース・トリガーその他の機構を変更せずにマイグレーションが行えるようにしています。</p> <p>AdapterInstanceEventFilter プロパティは、WebSphere Business Integration Adapter for PeopleSoft の ConnectorID プロパティに相当します。</p> <p>この機能を使用するには、イベント・ストアにイベントを作成する PeopleCode が、適切な値を IBM_CONNECTOR_ID 列に割り当てる必要があります。</p> <p>表 52 は、AdapterInstanceEventFilter プロパティと、イベント・ストアの IBM_CONNECTOR_ID 列の値との相互関係を示しています。</p> <p>EventTypeFilter および AdapterInstanceEventFilter プロパティの両方が設定された場合、アダプターは、両方の基準を満たすイベントだけを処理します。すなわち、EventTypeFilter プロパティにタイプが指定されており、IBM_CONNECTOR_ID 列が AdapterInstanceEventFilter プロパティに一致しているイベントだけが処理されます。</p> |
| 例       | 表 52 を参照してください。   |
| グローバル化  | はい  |
| BIDI 対応 | はい  |

表 52. AdapterInstanceEventFilter プロパティと、イベント・ストアの IBM\_CONNECTOR\_ID 列との相互関係

| AdapterInstanceEventFilter プロパティ | イベントの IBM_CONNECTOR_ID 列 | 結果  |
|----------------------------------|--------------------------|---|
| NULL                             | NULL                     | アダプターはイベントを処理します。                                 |
| NULL                             | Instance1                | IBM_CONNECTOR_ID 列がチェックされていないため、アダプターはイベントを処理します。 |
| Instance1                        | Instance1                | アダプターはイベントを処理します。                                 |
| Instance1                        | Instance2                | インスタンス ID が一致しないため、アダプターはイベントを処理しません。             |
| Instance1                        | NULL                     | インスタンス ID が一致しないため、アダプターはイベントを処理しません。             |

## イベント送達は 1 回のみ (AssuredOnceDelivery)

このプロパティでは、Inbound イベントに対して、「イベントを一度のみ送達する」の機能を提供するかどうかを指定します。

表 53. 「イベント送達は 1 回のみ」の詳細

|    |    |
|----|----|
| 必須 | はい |
|----|----|

表 53. 「イベント送達は 1 回のみ」の詳細 (続き)

|           |  |
|-----------|--|
| 使用可能な値    | True<br>False  |
| デフォルト     | True   |
| プロパティ・タイプ | Boolean  |
| 使用法       | <p>このプロパティを True に設定すると、アダプターにより、1 回のイベント送達を確保する機能が提供されます。つまり、各イベントは 1 回のみ配信されます。値を False にすると、1 回のイベント送達を確保する機能は提供されませんが、パフォーマンスは向上します。</p> <p>このプロパティを True に設定すると、アダプターにより、トランザクション (XID) 情報のイベント・ストアへの保管が試行されます。このプロパティを False に設定した場合は、アダプターではこの情報の保管は行われません。</p> <p>このプロパティは、エクスポート・コンポーネントがトランザクションの対象である場合にのみ使用されます。そうでない場合は、このプロパティの値に関係なく、トランザクションを使用することはできません。</p> |
| グローバル化    | いいえ  |
| BIDI 対応   | いいえ  |

### 失敗した接続をテストするための Component Interface (PingCompInterface)

このプロパティは、PeopleSoft Enterprise サーバーへの接続を検証するためにアダプターが使用する、PeopleSoft Enterprise Component Interface の名前を指定します。

表 54. 失敗した接続をテストするための Component Interface の詳細

|           |  |
|-----------|--|
| 行         | 説明   |
| 必須        | はい   |
| デフォルト     | リスト内の最初の Component Interface の名前   |
| プロパティ・タイプ | String   |
| 使用法       | PeopleSoft Enterprise サーバーへの接続をテストするためにアダプターが使用する、Component Interface の名前。PeopleSoft Enterprise アプリケーション内の既存の Component Interface 名を指定します。 |
| グローバル化    | いいえ  |
| BIDI 対応   | いいえ  |

### イベント通知用の Component Interface 名 (EventCIName)

このプロパティは、Inbound 処理用にアダプターが使用する PeopleSoft Enterprise Component Interface の名前を指定します。

表 55. イベント通知用の Component Interface 名の詳細

|       |              |
|-------|--------------|
| 行     | 説明           |
| 必須    | はい           |
| デフォルト | IBM_EVENT_CI |

表 55. イベント通知用の Component Interface 名の詳細 (続き)

| 行         | 説明  |
|-----------|---|
| プロパティ・タイプ | String  |
| 使用法       | Inbound 処理用にアダプターが使用する Component Interface の名前。Inbound 処理を使用するには、PeopleSoft Enterprise 内で特にイベント通知用の Component Interface を作成する必要があります。 |
| グローバル化    | いいえ   |
| BIDI 対応   | いいえ   |

### 送達のタイプ (DeliveryType)

このプロパティでは、イベントがアダプターによってエクスポートに配信される順序を指定します。

表 56. 送達のタイプの詳細

|           |   |
|-----------|---|
| 必須        | いいえ   |
| 使用可能な値    | ORDERED<br>UNORDERED  |
| デフォルト     | ORDERED   |
| プロパティ・タイプ | String  |
| 使用法       | 以下の値がサポートされています。<br><ul style="list-style-type: none"> <li>• ORDERED: アダプターは、一度に 1 つのイベントをエクスポートに配信します。</li> <li>• UNORDERED: アダプターは、一度にすべてのイベントをエクスポートに配信します。</li> </ul> |
| グローバル化    | いいえ   |
| BIDI 対応   | いいえ   |

### イベント・ストアのキーの区切り文字 (EventKeyDelimiter)

このプロパティは、イベント・テーブル内のオブジェクト・キーの名前と値のペア用の区切り文字を指定します。

表 57. イベント・ストアのキーの区切り文字の詳細

| 行         | 説明  |
|-----------|---|
| 必須        | いいえ   |
| デフォルト     | =:  |
| プロパティ・タイプ | String  |
| 使用法       | このプロパティにより、イベント・ストア内でオブジェクト・キーとして使用されるオブジェクト名と値を指定できます。 |
| 例         | CustomerID=2001   |
| グローバル化    | いいえ   |
| BIDI 対応   | いいえ   |



## 将来のタイム・スタンプを持つイベントを処理しない (FilterFutureEvents)

このプロパティーでは、アダプターが各イベントのタイム・スタンプをシステム時刻と比較することによって、将来のイベントをフィルターで除去するかどうかを指定します。

表 58. 「将来のタイム・スタンプを持つイベントを処理しない」の詳細

|            |  |
|------------|--|
| 必須         | はい   |
| 使用可能な値     | True<br>False  |
| デフォルト      | False  |
| プロパティー・タイプ | Boolean  |
| 使用法        | True に設定すると、アダプターは各イベントの時刻をシステム時刻と比較します。イベント時刻がシステム時刻より後の時刻である場合、そのイベントは配信されません。<br><br>False に設定すると、アダプターはすべてのイベントを配信します。 |
| グローバル化     | いいえ  |
| BIDI 対応    | いいえ  |

## 処理するイベント・タイプ (EventTypeFilter)

このプロパティーには、どのイベントをアダプターが配信するかをアダプターに示す、区切り文字で区切られているイベント・タイプのリストが入っています。

表 59. 「処理するイベント・タイプ」の詳細

|            |   |
|------------|---|
| 必須         | いいえ   |
| 使用可能な値     | ビジネス・オブジェクト・タイプのコンマ (,) 区切りのリスト   |
| デフォルト      | NULL  |
| プロパティー・タイプ | String  |
| 使用法        | イベントは、ビジネス・オブジェクト・タイプ別にフィルタリングされます。このプロパティーを設定すると、アダプターは、リスト内に存在するイベントのみを配信するようになります。値が null の場合は、フィルターが適用されず、すべてのイベントはエクスポートに配信されることを示しています。   |
| 例          | Customer ビジネス・オブジェクトおよび Order ビジネス・オブジェクトに関連するイベントのみを受信するには、値: Customer,Order を指定します。<br><br>EventTypeFilter および AdapterInstanceEventFilter プロパティーの両方が設定された場合、アダプターは、両方の基準を満たすイベントだけを処理します。すなわち、EventTypeFilter プロパティーにタイプが指定されており、IBM_CONNECTOR_ID 列が AdapterInstanceEventFilter プロパティーに一致しているイベントだけが処理されます。 |
| グローバル化     | いいえ   |
| BIDI 対応    | いいえ   |

## 失敗したイベントの再試行制限 (FailedEventRetryLimit)

このプロパティは、アダプターがイベントの再送信を試みる回数を指定します。この回数に達すると失敗とマークされます。

表 60. 「失敗したイベントの再試行制限」の詳細

|           |   |
|-----------|---|
| 必須        | いいえ   |
| 使用可能な値    | 整数  |
| デフォルト     | 5   |
| プロパティ・タイプ | Integer   |
| 使用法       | <p>このプロパティは、この回数以上は失敗とマークする場合の、アダプターがイベントを送信する回数を指定する時に使用します。以下のいずれかの値を取ります。</p> <p><b>デフォルト</b><br/>このプロパティが設定されない場合、アダプターは、イベント送信失敗の後、さらに 5 回イベントの送信を試み、それでも送達できない場合にイベントを失敗とマーク付けします。</p> <p><b>0</b><br/>アダプターは、回数無制限でイベントの送信を試行します。このプロパティが 0 に設定されると、イベントはイベント・ストアに残されたままになり、イベントが失敗とマークされることはなくなります。</p> <p><b>&gt; 0</b><br/>正の整数の場合、アダプターは、指定した回数再試行を行った後、イベントを失敗とマークします。</p> <p><b>&lt;0</b><br/>負の整数の場合、アダプターは失敗したイベントの送信を再試行しません。</p> |
| グローバル化    | いいえ   |
| BIDI 対応   | いいえ   |

## イベント・タイム・スタンプ用の Java 日付形式 (DateFormat)

このプロパティは、イベント・タイム・スタンプに使用される形式を指定します。

表 61. イベント・タイム・スタンプ用の Java 日付形式の詳細

| 行         | 説明  |
|-----------|---|
| 必須        | はい  |
| デフォルト     | MM/dd/yy  |
| プロパティ・タイプ | String  |
| 使用法       | このプロパティは、PeopleSoft Enterprise サーバーから取得された日付値の形式を設定するために使用されます。 |
| グローバル化    | いいえ   |
| BIDI 対応   | いいえ   |

## 最大接続数 (Maximum connections) (MaximumConnections)

このプロパティでは、アダプターが Inbound イベント送達に使用できる接続の最大数を指定します。

表 62. 「最大接続数 (Maximum connections)」の詳細

|          |  |
|----------|--|
| 必須       | いいえ  |
| デフォルト    | 1  |
| プロパティタイプ | Integer  |
| 使用法      | 正の値のみが有効です。アダプターは、1 より小さい正の入力値を 1 であるとみなします。このプロパティに対して負の値または 1 を入力すると、実行時エラーが発生することがあります。 |
| グローバル化   | いいえ  |
| BIDI 対応  | いいえ  |

### 最小接続数 (Minimum connections) (MinimumConnections)

このプロパティでは、アダプターが Inbound イベント送達に使用できる接続の最小数を指定します。

表 63. 「最小接続数 (Minimum connections)」の詳細

|          |   |
|----------|---|
| 必須       | いいえ   |
| デフォルト    | 1   |
| プロパティタイプ | Integer   |
| 使用法      | 正の値のみが有効です。1 より小さい値は、アダプターによって 1 として処理されます。このプロパティに対して負の値または 1 を入力すると、実行時エラーが発生することがあります。 |
| グローバル化   | いいえ   |
| BIDI 対応  | いいえ   |

### ポーリング期間の間隔 (ポーリング間隔)

このプロパティでは、ポーリング期間中にアダプターが待機する時間の長さを指定します。

表 64. 「ポーリング期間の間隔」の詳細

|          |   |
|----------|---|
| 必須       | はい  |
| 使用可能な値   | 0 以上の整数   |
| デフォルト    | 2000  |
| 計測単位     | ミリ秒   |
| プロパティタイプ | Integer   |
| 使用法      | ポーリング期間は一定の割合で確立されます。つまり、ポーリング周期の実行が何らかの理由で遅延すると (例えば、前のポーリング周期が完了するまでに予想より時間がかかった場合)、遅延によって失った時間を取り戻すために次のポーリング周期がすぐに開始されます。 |
| グローバル化   | いいえ   |
| BIDI 対応  | いいえ   |

## ポーリング期間内の最大イベント数 (ポーリング数量)

このプロパティーでは、各ポーリング期間中にアダプターがエクスポートに配信するイベント数を指定します。

表 65. 「ポーリング期間内の最大イベント数」の詳細

|            |  |
|------------|--|
| 必須         | はい   |
| デフォルト      | 10   |
| プロパティー・タイプ | Integer  |
| 使用法        | 値は 0 より大きくする必要があります。この値を大きくすると、ポーリング期間ごとに処理されるイベントの数が増加し、アダプターのパフォーマンス効率が低下する場合があります。この値を小さくすると、ポーリング期間ごとに処理されるイベントの数が減少し、アダプターのパフォーマンスが若干向上することがあります。 |
| グローバル化     | いいえ  |
| BIDI 対応    | いいえ  |

## システム接続を再試行する回数 (RetryLimit)

このプロパティーでは、アダプターが Inbound 接続の再確立を試行する回数を指定します。

表 66. 「システム接続を再試行する回数」の詳細

|            |  |
|------------|--|
| 必須         | いいえ  |
| 使用可能な値     | 0 および正の整数  |
| デフォルト      | 0  |
| プロパティー・タイプ | Integer  |
| 使用法        | このプロパティーは、アダプターが PeopleSoft Enterprise サーバー に接続して Inbound 処理を実行できない場合に、接続を再試行する回数を指定します。値が 0 の場合は、再試行回数が無制限になることを指定します。<br><br>アダプターの当初始動時に、PeopleSoft Enterprise サーバー に接続できない場合、アダプターが再試行するかどうかを制御するには、RetryConnectionOnStartup プロパティーを使用します。 |
| グローバル化     | はい   |
| BIDI 対応    | いいえ  |

## 開始時に EIS 接続を再試行する (RetryConnectionOnStartup)

このプロパティーは、アダプターが始動時に PeopleSoft Enterprise サーバー に接続できない場合に、再度接続を試みるかどうかを指定します。

表 67. 「開始時に EIS 接続を再試行する」の詳細

|        |               |
|--------|---------------|
| 必須     | いいえ           |
| 使用可能な値 | True<br>False |
| デフォルト  | False         |

表 67. 「開始時に EIS 接続を再試行する」の詳細 (続き)

|          |   |
|----------|---|
| プロパティタイプ | Boolean   |
| 使用法      | <p>このプロパティは、アダプターの始動時に、PeopleSoft Enterprise サーバー に接続できない場合に、接続を再試行するかどうかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>アダプターが、PeopleSoft Enterprise サーバー に対する接続を確立できたかどうかに関するフィードバックを直ちに必要とする場合、例えば、アダプターからのイベントを受信するアプリケーションを作成し、テストしている場合は、このプロパティを False に設定します。アダプターが接続できない場合、アダプターは、ログおよびトレース情報を書き込んで、停止します。管理コンソールは、アプリケーション状況を Stopped と表示します。この場合、接続の問題を解決後、手動でアダプターを始動してください。</li> <li>接続に関するフィードバックをすぐに必要としない場合は、このプロパティは True に設定します。アダプターが始動時に接続できない場合、アダプターはログおよびトレース情報を書き込んでから、RetryInterval プロパティで再試行の頻度を判別して再接続を試み、RetryLimit プロパティの値で指定された値に達するまで、再試行を複数回行います。管理コンソールは、アプリケーション状況を Started と表示します。</li> </ul> |
| グローバル化   | いいえ   |
| BIDI 対応  | いいえ   |

### 接続が失敗した場合の再試行間隔 (RetryInterval)

このプロパティでは、アダプターが Inbound 接続に関連したエラーを検出した場合に、アダプターが新規接続を確立しようとするまで待機する時間の長さを指定します。

表 68. 再試行間隔の詳細

|          |   |
|----------|---|
| 必須       | はい  |
| デフォルト    | 2000  |
| 計測単位     | ミリ秒   |
| プロパティタイプ | Integer   |
| 使用法      | <p>正の値のみが有効です。このプロパティでは、アダプターが Inbound 接続に関連したエラーを検出した場合に、アダプターが新規接続を確立しようとするまで待機する時間の長さを指定します。</p> |
| グローバル化   | はい  |
| BIDI 対応  | いいえ   |

### ポーリング時にエラーが検出された場合はアダプターを停止する (StopPollingOnError)

このプロパティでは、ポーリング時にアダプターがエラーを検出した場合、アダプターがイベントのポーリングを停止するかどうかを指定します。

表 69. 「ポーリング時にエラーが検出された場合はアダプターを停止する」の詳細

|        |               |
|--------|---------------|
| 必須     | いいえ           |
| 使用可能な値 | True<br>False |

表 69. 「ポーリング時にエラーが検出された場合はアダプターを停止する」の詳細 (続き)

|           |  |
|-----------|--|
| デフォルト     | False  |
| プロパティ・タイプ | Boolean  |
| 使用法       | このプロパティを True に設定した場合、アダプターはエラーを検出するとポーリングを停止します。<br><br>このプロパティを False に設定した場合、アダプターはポーリング時にエラーを検出すると例外をログに記録し、ポーリングを続行します。 |
| グローバル化    | いいえ  |
| BIDI 対応   | いいえ  |

## グローバリゼーション

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise は、複数の言語および国/地域別環境で使用することができる、グローバル化されたアプリケーションです。アダプターは、文字セット・サポートおよびホスト・サーバーのロケールに基づいて、メッセージ・テキストを適切な言語で送信します。アダプターは、統合コンポーネント間の双方向スクリプト・データの変換をサポートします。

### グローバリゼーションおよび双方向データ変換

このアダプターは、1 バイト文字セットとマルチバイト文字セットをサポートし、指定された言語でメッセージ・テキストを送信できるようにグローバル化されています。アダプターは双方向のスクリプト・データ変換も実行します。双方向変換とは、1 つのファイルに右から左 (ヘブライ語やアラビア語など) と左から右 (URL やファイル・パスなど) の両方の意味内容を含むデータを処理するタスクのことを指します。

#### グローバリゼーション

グローバル化されたソフトウェア・アプリケーションは、言語環境や国/地域別環境が単一ではなく複数の環境で使用することを目的として設計され、開発されています。WebSphere Adapters、WebSphere Integration Developer、WebSphere Process Server、および WebSphere Enterprise Service Bus は、Java で作成されています。Java 仮想マシン (JVM) 内の Java ランタイム環境は、Unicode 文字コード・セットでデータを表現します。Unicode には、知られているほとんどの文字コード・セット (1 バイトとマルチバイトの両方) の文字エンコードが含まれています。そのため、これらの統合システム・コンポーネント間でデータを転送するとき文字を変換する必要はありません。

エラー・メッセージや通知メッセージを適切な言語や個々の国や地域に合った形でログに記録するために、アダプターは稼働先システムのロケールを使用します。

#### 双方向スクリプト・データ変換

アラビア語やヘブライ語などの言語は右から左に書きますが、テキストには左から右に書かれる部分も埋め込まれるため、双方向スクリプトになります。ソフトウェア・アプリケーションで双方向スクリプト・データを扱う場合は、その表示と処理

のためにさまざまな規格を使用します。双方向スクリプト・データ変換の適用対象は、ストリング型のデータのみです。WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus では、Windows® の標準形式が使用されますが、サーバーとデータを交換するアプリケーションまたはファイル・システムでは、異なる形式が使用される場合があります。アダプターでは、トランザクションが行われる 2 つのシステムでデータが正確に処理および表示されるように、これらのシステム間でやり取りされる双方向スクリプト・データが変換されます。スクリプト・データの変換は、スクリプト・データの形式を定義する 1 組のプロパティと、変換の適用先となるコンテンツまたはメタデータを指定するプロパティを使用することによって行われます。

### 双方向スクリプト・データ形式

WebSphere Process Server および WebSphere Enterprise Service Bus は、ILYNN (暗黙、左から右、オン、オフ、公称) の双方向形式を使用します。これは、Windows で使用される形式です。エンタープライズ情報システムが別の形式を使用する場合、アダプターは、データを WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus に導入する前に形式を変換します。

双方向形式は、5 つの属性で構成されます。双方向プロパティを設定する場合、これらの各属性に値を割り当てます。属性と設定値を次の表に示します。

表 70. 双方向形式の属性

| 文字の位置 | 目的        | 値 | 説明                 | デフォルト設定 |
|-------|-----------|---|--------------------|---------|
| 1     | スキーマの配列   | I | 暗黙 (論理的)           | I       |
|       |           | V | 表示                 |         |
| 2     | 方向        | L | 左から右               | L       |
|       |           | R | 右から左               |         |
|       |           | C | コンテキスト上の左から右       |         |
|       |           | D | コンテキスト上の右から左       |         |
| 3     | 対称スワッピング  | Y | 対称スワッピングのオン        | Y       |
|       |           | N | 対称スワッピングのオフ        |         |
| 4     | テキストの形状指定 | S | テキストの形状を指定する       | N       |
|       |           | N | テキストの形状を指定しない (名目) |         |
|       |           | I | 語頭形の指定             |         |
|       |           | M | 語中形の指定             |         |
|       |           | F | 語尾形の指定             |         |
|       |           | B | 独立形の指定             |         |
| 5     | 数字の形状指定   | H | 各国 (ヒンディ語)         | N       |
|       |           | C | コンテキストによる形状指定      |         |
|       |           | N | 数字の形状を指定しない (名目)   |         |

### 変換するデータを指定する双方向プロパティ



変換の対象となるビジネス・データを指定するには、BiDiContextEIS プロパティを設定します。この操作を行うには、このプロパティの 5 つの双方向形式属性 (前記の表にリスト) のそれぞれに対して値を指定します。BiDiContextEIS プロパティは、Managed Connection Factory と活動化仕様に対して設定できます。

## 双方向データ変換で使用可能なプロパティ

双方向データ変換プロパティを使用すると、アプリケーションおよび統合ツールとランタイム環境の間で、必ず正しい形式の双方向スクリプト・データがやり取りされるようになります。これらのプロパティが設定されると、双方向スクリプト・データは、WebSphere Integration Developer および WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service Bus で正しく処理および表示されます。

### 外部サービス・ウィザード用の接続プロパティ

以下の管理接続プロパティは、双方向スクリプト・データ変換を制御します。

- パスワード
- ユーザー名

### リソース・アダプター・プロパティ

双方向のスクリプト・データ変換の場合、以下の活動化仕様プロパティが有効になっています。

- ログ・ファイル名
- トレース・ファイル名

---

## アダプター・メッセージ

WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise によって送出されたメッセージを以下の場所に表示します。

メッセージのリンク先は<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r2mx/topic/com.ibm.wbit.620.help.messages.doc/messages.html>です。

表示される Web ページには、メッセージ接頭語のリストがあります。メッセージ接頭語をクリックすると、以下に示すように、その接頭語があるすべてのメッセージを参照できます。

- 接頭語 CWYES があるメッセージの送出元は WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise です。
- 接頭語 CWYBSを持つメッセージは、すべてのアダプターによって使用されるアダプター・ファウンデーション・クラスによって発行されます。

---

## 関連情報

以下の、インフォメーション・センター、IBM Redbooks および Web ページには、WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise の関連情報が含まれています。

## サンプルおよびチュートリアル

ユーザーが、WebSphere Adapters を円滑に使用できるようにするため、「Business Process Management Samples and Tutorials」Web サイトからサンプルおよびチュートリアルが利用できます。サンプルおよびチュートリアルには、以下のいずれかの方法でアクセスできます。

- WebSphere Integration Developer を始動すると表示される「ようこそ」ページ。WebSphere Adapter for PeopleSoft Enterprise のサンプルおよびチュートリアルを表示するには、「取得」をクリックします。表示されたカテゴリーをブラウズして、選択を行います。
- Web 上の <http://publib.boulder.ibm.com/bpcsamp/index.html> のページ。

## 情報リソース

- WebSphere Business Process Management の情報リソース Web ページ (<http://www14.software.ibm.com/webapp/wsbroker/redirect?version=pix&product=wps-dist&topic=bpmroadmaps>) には、記事、Redbooks、資料、および研修用資料へのリンクが組み込まれており、WebSphere Adapters を習得するのに役立ちます。
- WebSphere Adapters ライブラリーのページ (<http://www.ibm.com/software/integration/wbiadapters/library/infocenter/>) には、資料の全バージョンへのリンクが組み込まれています。

## 関連製品の情報

- WebSphere Business Process Management バージョン 6.2 インフォメーション・センター: <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r2mx/index.jsp>。ここでは、WebSphere Process Server、WebSphere Enterprise Service Bus、および WebSphere Integration Developer の情報が記載されています。
- WebSphere Adapters、バージョン 6.1.x、インフォメーション・センター: <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/dmndhelp/v6r1mx/topic/com.ibm.wbit.612.help.adapter.emd.ui.doc/topics/tcreatecmps.html>
- WebSphere Business Integration Adapters インフォメーション・センター: [http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wbihelp/v6rxmx/index.jsp?topic=com.ibm.wbi\\_adapters.doc/welcome\\_adapters.htm](http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/wbihelp/v6rxmx/index.jsp?topic=com.ibm.wbi_adapters.doc/welcome_adapters.htm)

## developerWorks® リソース

- WebSphere Adapter Toolkit
- WebSphere business integration zone

## サポートおよび支援

- WebSphere Adapters テクニカル・サポート: <http://www.ibm.com/software/integration/wbiadapters/support/>
- WebSphere Adapters テクニカル・ノート: <http://www.ibm.com/support/search.wss?tc=SSMKUK&rs=695&rank=8&dc=DB520+D800+D900+DA900+DA800+DB560&dtm>。「Product category」リストで、アダプターの名前を選択して、「Go」をクリックします。



---

## 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-8711  
東京都港区六本木 3-2-12  
日本アイ・ビー・エム株式会社  
法務・知的財産  
知的財産権ライセンス渉外

**以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。** IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation Department 2Z4A/SOM1  
294 Route 100  
Somers, NY 10589-0100  
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、さまざまなオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテスト

トを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物にも、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。「(c) (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 (c) Copyright IBM Corp. \_年を入れる\_. All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

---

## プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

### 警告:

診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

---

## 商標

IBM、IBM ロゴ、および [ibm.com](http://www.ibm.com) は、International Business Machines Corporation の米国およびその他の国における商標です。これらおよび他の IBM 商標に、この情報の最初に現れる個所で商標表示 (® または ™) が付されている場合、これらの表示は、この情報が公開された時点で、米国において、IBM が所有する登録商標またはコモン・ロー上の商標であることを示しています。このような商標は、その他の国においても登録商標またはコモン・ロー上の商標である可能性があります。現時点での IBM の詳しい商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft および Windows は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

この製品には、Eclipse Project (<http://www.eclipse.org>) により開発されたソフトウェアが含まれています。



# 索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

## [ア行]

- アダプターのアーキテクチャー 3
- アダプターの実装 9
- アダプターのパフォーマンス 89
- アダプター用パッケージ・ファイル 97
- アダプター・アプリケーション
  - 開始 88
  - 停止 88
- アダプター・アプリケーションの開始 88
- アダプター・アプリケーションの停止 88
- アダプター・テクニカル・ノート 147
- アダプター・プロジェクト、作成 38
- アダプター・メッセージ 146
- アプリケーション固有情報 103
- イベント・ストア 5

## [カ行]

- 外部依存関係、追加 39, 65, 66
- 外部サービス・ウィザード
  - 認証 11
- カスタム・プロパティール
  - 活動化仕様 81, 86
  - リソース・アダプター 77, 83
  - Managed Connection Factory 79, 84
- 活動化仕様プロパティール
  - 管理コンソールでの設定 81, 86
  - リスト 134
- 関連情報 147
- 関連製品、情報 147
- 技術概要 3
- 機密データ、隠蔽 10
- 機密トレース 10
- 組み込みアダプター
  - 活動化仕様プロパティール、設定 81
  - 使用する場合の考慮事項 14
  - 説明 12
  - リソース・アダプター・プロパティール、設定 77
  - Managed Connection Factory プロパティール、設定 79
- 組み込みデプロイメント 66
- クラスター化された環境
  - 説明 15
  - デプロイ 15
  - Inbound 処理 15
  - Outbound 処理 16

- 研修、WebSphere Adapters 147
- 高可用性環境
  - 説明 15
  - デプロイ 15
  - Inbound 処理 15
  - Outbound 処理 16
- 構成
  - トレース 96
  - ロギング 96
  - Performance Monitoring Infrastructure (PMI) 90
- 構成の概要 34
- 後方互換性
  - プロジェクト 20
  - プロジェクト交換ファイル 20
- 互換性マトリックス 2
- コンポーネントの接続 67

## [サ行]

- 再試行制限プロパティール 142
- サポート
  - 概要 95
  - セルフ・ヘルプ・リソース 102
  - テクニカル 147
- サポートされるデータ操作 105
- サンプル 31
- 実行時環境
  - 認証 11
  - EAR ファイルのデプロイ先 70
- 実装環境、Java 68
- 重要データ、隠蔽 10
- スタンドアロン・アダプター
  - 活動化仕様プロパティール、設定 86
  - 使用する場合の考慮事項 14
  - 説明 12
  - リソース・アダプター・プロパティール、設定 83
  - Managed Connection Factory プロパティール、設定 84
- セキュリティール 10
  - 重要データの隠蔽 10
- セキュリティール、Java 2 12
- セルフ・ヘルプ・リソース 102
- ソフトウェア依存関係、外部の追加 39, 65, 66
- ソフトウェア要件 2

## [タ行]

- ターゲット・コンポーネント 67
- 対話仕様プロパティール 124
  - 変更 63
- チュートリアル 31
- データ操作 105

- テクニカル・サポート 147
- テクニカル・ノート 2, 102, 147
- テクニカル・ノート、WebSphere Adapters 147
- テスト環境
  - デプロイ先 65, 69
  - モジュールの追加先 69
  - モジュールのテスト 70
- デバッグ
  - セルフ・ヘルプ・リソース 102
- デプロイメント
  - オプション 12
  - 環境 65
  - 実稼働環境への 70
  - テスト環境への 65
- トラブルシューティング
  - 概要 95
  - セルフ・ヘルプ・リソース 102
- トレース
  - 管理コンソールを使用したプロパティの構成 96
- トレース・ファイル
  - 使用可能化 96
  - 詳細レベル 96
  - 使用不可化 96
  - 場所 98
  - ファイル名の変更 98

## [ナ行]

- 認証
  - 外部サービス・ウィザード 11
  - 実行時 11
  - 説明 10
- 認証別名 12, 37
- の外部サービス接続プロパティ 112, 127

## [ハ行]

- ハードウェアおよびソフトウェアの要件 2
- ハードウェア要件 2
- パフォーマンスに関する統計 92
- パフォーマンスのモニター 89
- ビジネス・インテグレーション・アダプターから JCA 準拠アダプター 21
- ビジネス・オブジェクト 6
  - サポートされるデータ操作 105
- ビジネス・オブジェクト情報 103
- ビジネス・オブジェクト・レベル・メタデータ 103
- ビジネス・フォールト 99
- ファイル
  - SystemOut.log ログ・ファイル 98
  - trace.log トレース・ファイル 98
- フォールト
  - 説明 99
- プロジェクト交換 (PI) ファイル
  - マイグレーションなしでの更新 20

- プロジェクトへのインポート 39
- プロパティ
  - 活動化仕様 81, 86
  - リスト 134
  - 構成プロパティ
    - Inbound 125
    - Outbound 110
  - リソース・アダプター 77, 83
  - Inbound 構成 125
  - Managed (J2C) Connection Factory 79, 84
  - Outbound 構成 110
- プロパティ・レベルのメタデータ 104
- ポーリング 5

## [マ行]

- マイグレーション 21
  - WebSphere InterChange Server マイグレーション・ウィザード 24
- マイグレーションに関する考慮事項 16
- マイグレーションの概要
  - WebSphere InterChange Server アプリケーション 22
  - マイグレーションのためのロードマップ
  - WebSphere InterChange Server アプリケーション 21
- マトリックス、互換性 2
- メタデータ 103
  - ビジネス・オブジェクト・レベル 103
  - プロパティ・レベル 104
- メッセージ、アダプター 146
- モジュールの構成のためのロードマップ 33
- 問題判別
  - セルフ・ヘルプ・リソース 102

## [ヤ行]

- 要件、ハードウェアおよびソフトウェア 2

## [ラ行]

- リソース・アダプター (RAR) ファイル
  - インポート 38
- リソース・アダプター・アーカイブ (RAR) ファイル
  - サーバーへのインストール 71
  - 説明 71
- リソース・アダプター・プロパティ
  - 管理コンソールでの設定 77, 83
  - 詳細 115, 129
- ロギング
  - 管理コンソールを使用したプロパティの構成 96
- ログ・アナライザー 96
- ログ・ファイル
  - 使用可能化 96
  - 詳細レベル 96
  - 使用不可化 96
  - 場所 98

ログ・ファイル (続き)  
ファイル名の変更 98  
ログ・ファイルおよびトレース・ファイル 95

## A

Adapter for PeopleSoft Enterprise  
管理 77  
Adapter for PeopleSoft Enterprise モジュール  
開始 88  
停止 88  
EAR ファイルとしてのエクスポート 72  
EAR ファイルのサーバーへのインストール 73

## C

CEI (Common Event Infrastructure) 93  
Common Event Infrastructure (CEI) 93

## D

developerWorks 147  
developerWorks リソース、WebSphere Adapters 147

## E

EAR ファイル  
エクスポート 72  
サーバーへのインストール 73  
EAR ファイルとしてのモジュールのエクスポート 72  
EAR ファイルのインストール 73  
enableHASupport プロパティ 16

## F

FFDC (First Failure Data Capture) 99  
First Failure Data Capture (FFDC) 99

## I

IBM WebSphere Adapter Toolkit 147  
Inbound 構成プロパティ 125

## J

JAR ファイル、外部の追加 39, 65, 66  
Java 2 セキュリティー 12  
Java 実装環境 68

## L

Log and Trace Analyzer、サポート 95

## M

Managed (J2C) Connection Factory プロパティ  
管理コンソールでの設定 79, 84

## O

Outbound 構成プロパティ 110

## P

Performance Monitoring Infrastructure (PMI)  
構成 90  
説明 89  
パフォーマンスに関する統計の表示 92  
PMI (Performance Monitoring Infrastructure)  
構成 90  
説明 89  
パフォーマンスに関する統計の表示 92

## R

RAR (リソース・アダプター) ファイル  
インポート 38  
RAR (リソース・アダプター・アーカイブ) ファイル  
サーバーへのインストール 71  
説明 71  
Redbooks、WebSphere Adapters 147

## S

SystemOut.log ファイル 98

## T

trace.log ファイル 98

## W

WebSphere Adapters バージョン 6.0 情報 147  
WebSphere Adapters バージョン 6.0.2.x 情報 147  
WebSphere Application Server 情報 147  
WebSphere Business Integration Adapters 情報 147  
WebSphere Business Process Management バージョン 6.1.x 情報  
147  
WebSphere Enterprise Service Bus  
情報 147  
WebSphere Extended Deployment 15  
WebSphere Integration Developer  
情報 147  
テスト環境 65  
WebSphere Process Server  
情報 147

WebSphere Process Server または WebSphere Enterprise Service  
Bus

デプロイ先 70

WebSphere ビジネス・インテグレーション・アダプター 21





Printed in Japan